

---

# 魔法少女リリカルなのは～最終鬼畜の妹様な話～

フランとレミリア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜最終鬼畜の妹様な話〜

### 【Nコード】

N6688S

### 【作者名】

フランとレミリア

### 【あらすじ】

私は誰？

ここはどこ？

記憶喪失となった最終鬼畜な少女がリリカルな魔法少女とまさかのクロス！！

果たして少女は無事に記憶を取り戻せるのか？

\* 注意 \*

作者のオリジナル要素があるので嫌いな人はブラウザバックしてください！！

## 第1話 無印編

目が覚めると見知らぬ土地に一人で倒れてた。

「うつ…ここはどこ…?」

体を起こすと見た事が無い建物がたくさんあり、辺りは暗く月が天高く昇っていた。

「あ…れ…?なんで倒れてたのかな?」

体を動かすと痛みや不調を示すものは何もない。

「ん…?なんで私こんな所にいるのかな?」

自分が何故こんな所にいたのかが分からない。

その事に疑問を覚えながらも自分の体の状態をチェックしていく。

「身体の調子が良いし、服は赤色のフリフリがいっぱい付いたのと変な帽子に髪の毛の横に縛る紐?えとそれ以外に特に変わった事は…ん?うわ!!私の背中に羽がある!!」

自分の身体をチェックしていて初めて気が付いた羽の存在。

しかも七色の宝石のような物が羽にくっついているのだ。

「うわ~~~~綺麗~~~~」

その羽は自分の意思に反応し動いている。

「でもなんで私羽なんか生えてるのかな？……………というより……………  
私は誰？」

少女は頭を傾げて考えた。

まったく気が付かなかったが自分の事が何一つ思い出せないのだ。

「……………」きおくそうしちゅ”？つてのかな？」

どこか舌つたらずな発音になってしまったが本人はまったく気が付いていない。

「ま、いつか……………いつかまた思い出せるかもしれないしね」

そう言くと少女は翼に力を込めて羽ばたいて空を飛ぶ。

まるでそれが当たり前のように優雅にそれでいて力強く空を自由に飛び回る。

「気っ持ち良い……………！！」

髪や頬を撫でる優しい風を全身で感じとり空を舞う少女はある事に気が付く。

「誰もいないな……ぶっつまんなあい……」

そう、空から地上を眺めていてまだ一人も自分以外の人物に会っていないのだ。

少女はその事に落胆した表情を浮かべてさらに空を飛ぶ。

しかし直ぐさま何か不思議な気配を感じとり

「……………ん？なんだか変な感じがする……………行ってみよう！！」

そう言って少女はその気配のする方へ空を翔けて行ったのだった。

~~~~~

「……………（魔王）」

「魔王じゃないの！」

「い、いきなりどうしたの！？」

はっ！いけないいけない今は集中しないと。

私、高町なのはごくごく普通の小学3年生。

でも今大変な事に巻き込まれてるの！

昨日、夢で変な声が聞こえてきて放課後の塾に行く途中の森でその声が聞こえてきたから森に入るとフェレット？さんが怪我をして倒れてたの。

急いで動物病院に連れて行ってあげてそこで獣医さんが引き取り先を捜した方が良いつて言われたの。

家に帰って夕食の時に父さんとお母さんに聞いたらOKをもらえたから嬉しくて寝る前にアリサちゃんとすずかちゃんにメールした時にまたあの声が聞こえてきて

『聞こえますか？僕の声が聞こえますか？』

その声を聞いた私はその声の元だと思うフェレットさんを助けに家を飛び出したの。

そして動物病院に着いたらフェレットさんが変な怪物に襲われてて私にこう言ってきたの。

「君には資質がある。だから少しだけ僕に力を貸して！」

「資質？」

話を聞いてみると、このフェレットさんは私たちとは違う世界からある探し物のために来たらしいの。

でも、自分だけじゃ出来ないから魔法の資質がある私に手伝って欲しいらしいの。

「心を澄ませて 僕の言うとおりに繰り返して」

そう言ってフェレットさんは私を見つめる。

「いい？いくよ！！」

「う、うん！！」

私は勢い良く頷いてフェレットさんの言葉を復唱する。

「我使命を受けし者なり」

「我使命を受けし者なり」

「契約の元その力を解き放て」

「えと、契約の元その力を解き放て」

ドクンと脈打つ音が響いてくる。

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして不屈の心は」

「そして不屈の心は」

今思い出せば不思議なんだけど何故かこの先の言葉を私は知ってたの。



「この胸に！！」

「この手に魔法を！！レイジングハートセットアップ！！」

そのときレイジングハートから声が聞こえてきて……

《Stand by ready Set up》

「……ふえ！」

「なんて魔力だ……！！落ち着いてイメージして！！君の魔力を制御する魔法の杖のイメージを！！そして君の身を守る衣服のイメージを！！」

「そんな急に言われてもえと、え〜と…とりあえずこれで！！」

そして、気がつくとは私は白い服に杖を持った状態になったの

「成功だ」

そう言っつてフレットさんは少し誇らしげに胸を張ってたの。

「それよりこれからどうすればいいの？」

私がそう言っつとレイジングハートが

あなたには魔法を使った経験がないようですので、私がサポートします

と言っつてきてくれたので本当に助かったの。

~~~~~

## D i v i n e   B u s t e r

それは戦いのさなかレイジングハートが私の魔法の適性を組んで出来上がった私だけの魔法。

そしてレイジングハートから桜色の砲撃が放たれて怪物を飲み込んで怪物は消え去るはずだった……

「外れた！？そんな……」

しかし私の放った砲撃は怪物から僅かに外れ、フェレットさんからそんな声が聞こえてきた時には怪物は結界の外に出るまであと少しの距離にいたの。

「まずい！結界の外に逃げる気だ！！急いで追わないと！！」

そうフェレットさんは言ってるけど今からそこに向かうには距離があり過ぎて間に合わない。

その事に気が付きもはや回収は不可能と分かって落ち込むフェレッ

トさんと私。

しかしそんな私達の耳にこんな声が聞こえてきたの。

「キュとしてドッカーン！」

そんな気の抜ける掛け声とは裏腹にその威力には私もフェレットさんも驚いたの。

だってさっきまで結界の近くまで逃げていた怪物が木っ端みじんに砕け散ったの！

そして……空を見上げるとそこには七色に光る宝石みたいな飾りを付けた羽を持つ一人の女の子が浮かんでいたの。

そして彼女は

「……………ネエ、アソビマシヨウ?」

そう言って私達にどこか背筋に寒気を感じさせる笑顔を見せていたの。

## 第2話 無印編（前書き）

お知らせ

これからデバイス達の声は英語ではなく日本語で表記します。

## 第2話 無印編

不思議な気配を感じて空から捜していると

《Divine Buster》

そんな無機質な声とともにピンク色の光が一直線に走っていった。

「うわ~~~~、すっ~~~~い!!」

その光景に私は胸がワクワクした。

私はそのピンク色の光から目が離せない。

まるで”魔理沙”の砲撃みたいだ。

「……………ん?”魔理沙”？」

私は不意に頭に浮かんできた名前首を傾げる。

しかしその”魔理沙”が誰なのかが分からない。

しかしあのピンク色の光はその”魔理沙”の放つ砲撃に良く似ているという事が分かった。

「砲撃……………、なんで私そんな事を知ってるんだろっ……………」

私は何故そんな事が分かったのか不思議に思い首を傾げながらそのピンク色の砲撃の先にある目標を見ると

「……………気持ち悪い……………」

グネグネとうごめく生理的に受け付けがたい化け物がいた。

その化け物はその見た目からは想像もつかないような速さでその場から逃げ出そうとしているがピンク色の砲撃の方がかなり速い。

しかし

「……………外れた!……………」

そのピンク色の砲撃は僅かに外れ化け物は生き残ってしまった。

しかもその化け物は持ち前の素早さを生かしてその場から離脱しようとしている。

「…………………………」

私は化け物が逃げだそうとしているのをただじっと見ていた。

いや見ているしかなかった。

何故なら私には戦うすが無い。

「…………………………」

悔しい。

戦う力が無い自分が悔しい。

おそらくあの化け物は存在してはならない存在なのだろう。

居るだけで被害を撒き散らす。

そんな気配を感じ取れる存在が逃げていくのをただ見ている事しか出来ない自分が悔しい。

「私に………力があれば………」

そう自分でも無意識に呟いた時だった。

ダッタラ、コワシチャエ。

「………!?!?」

突然頭に響いてきたその声に私は驚いて自分の周りを見た。

しかし誰もいない。



「な……に……？今の……」

私は急に怖くなって周りを見渡し続ける。

しかし周りには誰もおらず、その場には自分以外存在しない。

「……気のせい……かな……？」

そう言っつて私は自分を落ち着けようとした時に

キノセイジヤナイヨ？マタマエミタイニアソビマシヨウ？

そう頭の中にまた声が響いてきた。

「だ……誰！？どこに居るの！？」

私は辺りを見回して気が付いた。

あの声は”私の中から”響いている事に……

ヤットキガツイテクレタンダネ？サア、アノキモチワルイノヲコワシチャオウ。ダイジョウブ、アナタニハチカラガアル。ダッテアナタハワタシデワタシハアナタナノダカラ。

そして私の意識はその声が聞こえてきた瞬間に途切れてしまった。

~~~~~

「……………ネエ、アソビマシヨウ？」

そう言っただけでどこか背筋に寒気を感じさせる笑顔を見せていた女の子はいきなり色とりどりの野球ボールくらいの弾を打ち出してきたの。

「ッ！？」

私は身体が動かなかったけれどレイジングハートが咄嗟に

《プロテクション》

バリアを張ってくれたから助かったの。

「やめて！！危ないの！！」

私はそう言っただけでも女の子は

「キャハハハハハハハハハハ！アハハ、ハハハハハハハハハハ！」

狂ったように笑い弾幕を打ち続けている。

ズガガガガガーン！

「え？」

いきなり私の後ろからそんな音が聞こえてきた。

プロテクションに魔力を送りながら後ろを振り返ると

「……………嘘……………」

私の後ろにあったはずの建物が廃墟になっていた。

「あ……………ああ……………」

あまりの事に恐怖が私の心を侵食していく。

あの弾に当たったら自分もあなるのだと、その廃墟は身を持って教えてくれたのだ。

当たりたくない、死にたくない。

そんな思いでプロテクションに魔力を送り続ける。

しかし女の子の放つ弾幕は多く、しかも一発の威力が高い。

そのためプロテクションを保つ魔力が凄まじい勢いで減っていく。

「嫌…………やめて……………」

そんな思いを踏みにじるかのように女の子はあの狂った笑いを続け、弾幕を放ち続ける。

私は必死に守り続け、魔力が切れるまでずっと続くんじゃないのかと思える長い時間耐えた。

だけどそれはいきなりだった。

「……………ツマンナイ」

そう言って女の子は弾幕を放つのをやめた。

「はぁはぁはぁ…止まった？」

私の魔力は限界近くでやめてくれた事が正直嬉しかった。

これで助かる。

そう思った。

「禁忌『レーヴァテイン』」

この声を聞くまでは。

「……………え？」

女の子を見るとその手に炎を纏った何かがあった。

私はそれを見た瞬間に死を覚悟した。

恐怖に身体が固まる。

喉が渴き視線が女の子の持つ炎の剣のようなものから外せない。

そして彼女はその剣を振りかぶり凄まじい速度で突っ込んできた。

《プロテクション》

レイジングハートが再びプロテクションを張るが私にはそれで防げると思えなかった。

そして

ズバン！

レイジングハートの張ったプロテクションはあっさり切られてしまい

「……………コワレチャエ」

そう言って彼女は私に剣を振り下ろした。

「……………あれ？」

しかし予想に反して私に痛みを感じる事はなかったの。

何故なら

「……………」

女の子は剣を完全に振り下ろさなかったの。

そして

「大丈夫？」

私から剣を下ろしてそうやってきたの。

極度の緊張から解放された私は

「うっ……ひっく……ひっく……えぐっグス……」

涙が止まらなかった。

「ど、どうしたの？どこか痛いのか？」

そんな風に女の子は私を心配してくれてるの。

とてもさっきの雰囲気とは似ても似つかない。

私はそんな女の子に抱き着きさらに泣いた。

女の子はとても慌ててるけど私は気にしない。

だってとっても怖かったの。

もしかしたら死んでたかもしれないという事実が私の頭から離れなかったの。



だから私は離れなくなかった。

そう思っただけ抱き着いていると彼女は

「……ふえ？」

頭を撫でてくれた。

その事で安心した私はさらに泣いて彼女を困らせてしまったけれど  
も彼女は頭をずっと撫でてくれたの。

~~~~~

あの後ジュエルシールドを封印して地上に下りるとパトカーのサイレンが聞こえてきたから最初の弾幕によって壊れた建物の破片に当たって気絶していたフェレットさんを回収し、女の子と一緒に公園まで逃げたの。

そしてそこでユーノ君……フェレットさんの名前を聞いたんだけど、

夜も遅いから一旦家に帰る事にしたの。

だけど

「どうしよつ……」

女の子はそう言って何か悩んでいたの。

私は不思議に思い話を聞いてみると

「……………実は私”きおくそうしちゅ”みたいで家がどこにあるのか  
分からないだよね」

そう笑顔で言ってきたの。

私とユーノ君は驚きのあまりその場で固まってしまったけれども女の子は気にせず終始笑顔だったの……………

結局ユーノ君と女の子は家に連れて帰りユーノ君はお姉ちゃんともみくちゃんにされ、女の子は記憶喪失の事を告げるとお母さんが優しく抱きしめてたの。

お父さんは難しい顔をしたまま何も言わなかったけどお兄ちゃんは

「……まさか…いやそんなはずは……」

そうぶつぶつ呟いてたの。

お母さんが

「そういえばお名前聞いてなかったわね？」

と言っていた。

そういえば私も女の子の名前を聞いてないの。

そう思って私も女の子の近くに近寄ると

「フラン！ フランドール・スカーレット！」

そう元気良く答えたのだった。



### 第3話 無印編

私の名前はフランドール・スカーレット

昨日桃子に名前を聞かれ無意識に出た私の名前。

そして私は”化け物”である。

どうしてそんな事が言えるのかは簡単に答えられる。

だって……

普通人間なら背中に羽は生えてないし”血液”なんて必要としないもん。

今私の目の前には”ゆけつぱく”が置いてある。

なんでも人間が治療する際に足りなくなつた血液を補充する物らしい。

これは恭也が”私と同じ種族”の人と交流があつて、その人に私の事を話してから貰つてきた物らしい。

なのはやその家族は今家にいない。

その変わり恭也が私の目の前にいてテーブルにゆけつぱくを置いている。

「この事は誰にも言わないから早く飲むといい」

恭也はそう言つてゆけつぱくを開けてストローを刺して私に渡す。

私は急に感じる喉の渴きを抑えられずゆけつぱくを受け取りストローを介して勢い良く血液を飲んでいく。

「……ん……ん……」

私はそのなんとも言えない甘く香る鉄の風味に恍惚とし、心いくまです味わった。

そして血液を飲み終わった頃に恭也が

「今から出掛けるから準備してくれ」

と言う。

私がどこに行くのか聞いてみると

「俺の交流のある”吸血鬼”の所さ」

そう恭也は言った。

~~~~~

「よく来てくれたわねフランちゃん」

そう言って大きなお屋敷から出てきた女の人。

名前を月村 忍というらしい。

そう、この人こそ私と同じ種族の”吸血鬼”。

そして恭也は忍が吸血鬼である事を知りながらも交流を続けている数少ない人物であり良き理解者でもあるそうだ。

忍は私にこう言った。

「フランちゃん？今貴女の置かれている状況はあまり良いとは言えないわ」

忍がそう言う理由としては私が伝承に伝わる吸血鬼と共通する点がいくつもある事。

まず一つ目に私は日光を浴びると灰になる。

これは今日の朝の出来事だったのだけど昨日なのはと一緒に布団で眠っている時に朝日が私を焼いた事で分かった。

灰になる前に恭也が様子を見にきてくれたから助かったけれどもし恭也が気が付いてくれなかったら大変な事になっていた。



二つ目に私は流水に触れない。

これもやはり今日の朝ご飯を食べる前に手を洗おうとして分かった。

三つ目に吸血衝動がある。

これは吸血鬼として当たり前的事ではあるが私は恭也に言われるまで何故喉が渴き続けるのか分からなかった。

そして四つ目は私の背中に羽が生えてる事。

これは一目で私が人外存在である事を示す存在である。

以上の四つの問題を解決しなければ私は外に出る事は出来ず、一生家の中で暮らさなければならぬ。

「そう言う訳でフランちゃんは外には出られないのよ……」

忍は悲しそうにそう言って私を見る。

私はその話を聞いて心の奥底で”またか”という感情が沸き上がって来るのを不思議に感じていた。

まるで前にもそんな事があつたかのように……

「取り敢えず私の方でもフランちゃんが外に出られるように考えてみるから……」

そう言うて忍は話を聞いて落ち込んでいる私に気分転換に散歩を進

めてきた。

私は特に断る理由もなくそれを受け入れた。

~~~~~

私は肩を落とし、散歩の為日傘を差すフランちゃんを見ながらため息を吐いた。

念の為にファリンを後ろに付かせてだ。

「忍、なんとかならないのか？」

そう言つて恭也は私に話かけてくる。

「はつきり言つて不可能に近いわね……あそこまで伝承に近い……  
……いや伝承にある吸血鬼そのものよフランちゃんは……」

改めて今回の件はかなりの難題なのだと自覚する。

恭也が持ち込んだ私と同じ夜の一族の話がここまで複雑な話だった

なんて誰が想像できたろうか？

そのまさかの自体に頭を抱える。

「……………私、少し甘く見過ぎたわ……………」

そう言って私は恭也と対策を考える。

せめてフランちゃんが人並みの幸せが掴めるように……………

……………

忍の話を聞いて私は落ち込んだ。

私が吸血鬼であるが為に起きてしまった問題。

多分忍と恭也は私の為に今も話あっているのだろう。

後ろからついて来るファリン？だったっけ？も心配そうに私を見ている。

「…………どうしよう……」

思わず口からそんな言葉が漏れてしまった。

しかしこのままでは一生家から出る事は出来ない。

出る事が出来ても夜の間だけでなのはと一緒に遊ぶ事が出来ない。

全ては私の吸血鬼としての弱点のせい。

「……………う……………う……………グスン」

そう思うと涙が出てきた。

後ろでファリンが慌ててるけど私は悲しくて気にしてられない。

私は少し一人になりたくて森の木よりも低く空を飛んだ。

ファリンがさらに慌ててたけど今の私にそんな事気にする余裕はなかった。

しばらく空を飛ぶと気分が少しずつ晴れてきた。

私はそこで飛ぶのをやめた。

辺りをみるとだいぶ日が傾き夕暮れ時になっていた。

どうやらかなり長い時間空を飛んでいたようだ。

恭也や忍、置いて行ってしまったファリンが心配してるかもしれない。

そう思つて再び空を飛ばうと羽に力を入れたその時、私は見つけてしまった。

「……………ジュエルシード」

大きな木のしたに落ちているそれを……………

そして恭也と忍の”くるま”で移動してる間に念話と呼ばれる方法で聞いたユーノからのジュエルシードの正体。

”持っている者の願望を歪んだ形で叶える宝石”

じゃあその”歪み”を無くす事ができればどうなるのか？

わたしの顔が次第に緩んでくる。

”歪み”があつて願いが叶えられないなら”歪み”を壊してしまおう。

そうすれば後に残るのは”願いを叶える宝石”のみ。

私は自分の手に力を込める。

なのはと初めて会った時の力はすでに思い出している。

いや私の技の全てはすでにあの時に思い出していた。

すべては私の中のワタシが教えてくれた。

でも肝心の私に関する事は教えてくれなかったけれど……

それでも十分過ぎる。

だって今の私の抱えている問題を一気に解決してくれる力なのだから……

そして私は……

手に集まったそれを……

「キュとしてドッカーン！」

握り潰したのだった。

## 第4話 無印編

「へへ えへへ」

私は笑いが止まらない。

だって”太陽の光を浴びる”のがこんなにも楽しいから……

こんなにも日光を浴びるのを気持ち良く感じるなんて知らなかった。

「ふんふん うふふ」

私は太陽に向かって手を伸ばす。

夕暮れ時の太陽は私の手の中にすっぽりと収まってなんだか私は太陽を征服した気になる。

いや、実際にそうなのだ。

私は吸血鬼としての最大の弱点、太陽を克服したのだ。

それを実現させた物。

それは……



「……ジュエルシード……」

私は”砕け散った”その宝石を手に屋敷の方に戻るのだった。

~~~~~

「し……信じられない……まさか本当に克服してしまったっていうの？」

忍は私の話を聞いて驚いている。

「そんな馬鹿な……」

恭也も私の方を見てそう呟いている。

「でも本当だよ？ほら！」

そう言って私は窓から差し込む夕日を浴びる。

そして……

「ほら羽も隠せるよ？」

そう言って私は羽を消した。

これを見た忍と恭也はまた頭を抱えた。

~~~~~

「それじゃあジュエルシールドがフランちゃんのお願いを叶えたって

事なの？」

「信じられない……まさかジュエルシールドが正常に作動するなんて……」

上からなのはとユーノ。

特にユーノは驚きを隠せないようだ。

家に帰ってきてからなのはとユーノには私が吸血鬼である事を含めて事情を全部説明した。

「でも良かったの！これでフランちゃんも一緒にお日様の下で遊びに行けるの！」

そう言うてなのはは素直に喜んでくれたけどユーノはまだうんうん唸りながら悩んでいた。

「吸血鬼……フランは吸血鬼なんだよね？」

「うん、そうだよ？」

ユーノは少しおどおどした感じで

「これから生きていく為に必要な血液を手に入れるあてはあるの？」

そう聞いてきた。

ユーノは多分血液なんてそう簡単に手に入れにくいものであるという現実を知っている。

だからこそ聞いてきたんだと思うけど

「大丈夫！」ゆけつぱく」を貰える事になってるから！」

私は元氣良く笑顔でそう言った。

~~~~~

「へへ ジュエルシードって便利だね」

私は今一人で”お風呂”に入っている。

そう”お風呂”にだ。

吸血鬼は流水に入れない。

お風呂自体は入れない事はないのだけれど湯舟の中に入ったり、ましてや流水で石鹸を洗い流す事なんて出来ない。

しかし今の私には造作もない簡単な作業。

それどころか石鹸の泡で遊んでいるくらいだ。

「えへへ この石鹸っての面白い」

こんな事”きおくそうしちゅ”になる前の私ですら出来なかったはずだ。

「……………んしょ」

頭からお湯を被り泡を洗い流す。

そして湯舟に浸かる。

「……………あ……………気持ちいい……………」

足先からじんわりとした暖かさが私を包む。

そんな心地良い湯舟の中で私は、ジュエルシードに願った事を思い出していた。

……………

私がジュエルシードに願ったお願いは三つ。

一つ目は吸血鬼としての弱点をすべて克服する事

これは私にとって絶対叶えたい願望。

いや私と同じ伝承に伝わる吸血鬼と似ている者ならば誰でも叶えた  
いはずの願いを願った。

二つ目に私の羽を自分の意志で出したり消したりする事ができるよ  
うになる事。

これは一つ目の願いが叶ったとしても忍が言った通り普通のようにで  
人間には羽は生えていないから羽が生えているのは不自然だ。

だからこそ外で動く為に羽を出し入れできるように願ったのだ。

三つ目に吸血衝動の抑制を願った。

これはせつかく外に出られるようになっても吸血衝動により急に人  
を襲ってしまったらいけないので願った。

しかしこの三つ目のお願いにはもう一つの意味がある。

それは……

吸血衝動による”ワタシの暴走”の抑制。

これは恭也からゆけつぱくを貰う前に喉の渴きを癒せずどこか落ち着かない時に

オソツチャエバ？

そんな声が私の中から聞こえてきたからだ。

なのはからも最初会った時に襲われたとユーノから聞いた。

なのはやユーノは私にとって大切な友達であって絶対にそんな事はしたくない。

だからこそ願った願いなのだ。

そんな私の願いをジュエルシードは叶えてくれた。

いや、”無理矢理”そうするようにしたのだ。

”歪み”を破壊したジュエルシードにその三つの願いを祈り、その力を解放した。

ジュエルシードはそんな私の願いを正確に叶えてくれ、そして力を出し尽くして碎けてしまった。

しかしジュエルシードは私の願いを叶えてくれた。

それだけで十分だった。

これで私は本当の意味で自由を手に入れた。

それはまるで”今まで自由ではなかった”そう言っているかのよう  
に……

そう、思えた。

~~~~~



お風呂から上がり今日もまた一日が終わる。

あとはまたなのはの部屋でなのはと一緒に眠るだけだ。

何故なのはの部屋で寝起きしてるのかというと桃子がそうするとい  
いと言ってきたからだ。

そういえばユーノから聞いたけど今日もまたなのはがジュエルシー  
ドを一つ封印したらしい。

全部で21個あるジュエルシードの内なのはが2個で私が1個手に  
入れた事になる。

この調子で全部のジュエルシードが早く集まるよう祈りながら部屋  
に入る。

なのははすでに寝ているようだ。

今日の戦いで疲れたのかもしれない。

私はなのはが起きないように静かにベットに入ると

「…………お休み……」

そう言って眠りにつくのだった。

## 第5話 無印編

「ねえ、”弾幕ごっこ”しよう?。」

きっかけはフランちゃんのその一言から始まったの。

「”弾幕ごっこ”?それって何なの?。」

私は”弾幕ごっこ”の意味が分からず取り敢えずフランちゃんに聞いてみると

「えっとね……………ん〜と死合<sup>しあひ</sup>?。」

可愛く小首を傾げながらそんな物騒な言葉が返ってきたの!

「し…………死合って…………そんなの危ないの!。」

私はフランちゃんのそんな言動に頭が痛くなりながらそう言つと

「大丈夫だよ！だって”ひさっしょうせってい”だったっけ？それ付けておくから！」

そう言つてフランちゃんは私とレイジングハート、そしてユーノ君を裏山の方に連れ出したの。

~~~~~

「それじゃあ弾幕ごっこ始めよ~~~~！！」

そう言つてフランちゃんはユーノ君に結界を張らせたの。

ユーノ君は弾幕ごっこがどんなものなのか興味津々で止める気無いの……………

「それじゃあなのはは初心者だから”スペルカード”は3枚にしとくね？」

そう言つてフランちゃんは3枚のカードを掲げる。

「”スぺルカード”？」

私には何の事だかさっぱり分らない。

ただどなんとなくその”スぺルカード”が弾幕ごっこにおいて重要な存在である事は分かったの。

仕方なくレイジングハートを起動しバリアジャケット（以後B）  
を見に纏う。

「それじゃあ逝くよ～～～！！」

そう言ってフランちゃんは構えた。

「ちょ…ちょっと待つの！なんだか嫌な感じがするの！！」

私はそう言っただけ

「もんどーむよー！てりゃ～～～！！」

色とりどりの魔力球が凄まじい勢いで迫ってきました。

「に、にやあああああああああああああ！！！！！！」

それを必死に避ける私。

「キヤハハハハハハハハハハ！ 凄い凄い凄～い！なのは凄いですよ」

それを笑いながら弾幕を放ち続けるフランちゃん。

「.....ポカーン」

口が開きっぱなしのユーノ君。

《マスター！次右斜め43。から通常弾48！さらにその奥から誘導弾が32です！》

的確に指示を出すレイジングハートがいた。

「うまいねなのは！ ようしそれじゃあ逝くように！ ！」

フランちゃんをそう言ってさっき掲げたカードの内の1枚を、私に見えるように掲げた。

「にやあああああ！今度は何〜〜〜〜！？」

私は避けるのに必死でともじやないけどそれを見続ける余裕はな

かった。

「スペルカード！禁弾『スターボウブレイク』」

さらに弾幕が多くなりました。

「にゃ！にゃにゃにゃ！にゃあああああああああ！..!」

私は必死の気合いの避け。

ジリジリ

魔力球が掠るたびにそんな音が.....



気合い避け再開!!

「も、もういや~~~~~!!」

~~~~~

結局弾幕が止まるのに15分かったの……

身も心もボロボロな私は家に帰り身体を休めようとベットに倒れ込み……

キーン!



「なのは！ジュエルシードの反応をキャッチしたよ！」

「にゃああああああああああああああああああ！」

ゆっくり休めなかった。

「私の休息を返してなの！！全力全壊！スターライト……………ブレイカあああああ！！！！！！！！」

桜色の収束砲撃が炸裂する。

「……………す……………凄い……………」

これがなのはの必殺技スターライト・ブレイカーの誕生秘話である。

ユーノはその威力に驚き、こう思ったらしい。

フランの弾幕ごっこにはこんな効果があるのかと…………

「なのは……………訓練に弾幕ごっこを取り入れてみようか……………」

「にゃあああああああああああああああ!!！」

なのはは本気で嫌がったがレイジングハートも乗り気で結局訓練に組み込まれたらしい。

## 第6話 無印編（前書き）

フランちゃんの音楽教室を聞いてて思いついた話です。

## 第6話 無印編

「がっこう」？それって美味しいの？」

なのはが弾幕ごっこを訓練に取り入れ始めて2週間が過ぎた頃のことだった。

「にやはは……違うよフランちゃん。学校ってのは皆でお勉強したり、遊んだりする所でお友達もいっぱい作れる場所なんだよ？」

「そうだよフランちゃん、楽しい所だよ……？」

「そうよフランちゃん？どうかしら？」

どうやらなのはと美由希、それに桃子はフランを学校に通わせたいようだ。

「それじゃあ弾幕ごっこ出来るかな!？」

フランはとても嬉しそうにそう言う。

「にやはは……それは……ちょっと……無理かな……」

なのはは苦笑いをしながらやんわりと否定する。

するとフランは不満げに

「え〜〜〜なんで〜〜〜なのは出来るのに……つまんな〜い」

そう言って頬を膨らました。

「あ…あはは…はあ…」

弾幕ごっこの意味が分からない美由希は困ったように笑い。

「ふう……困ったわね〜」

桃子も純粹に困っていた。

「これじゃフランちゃんの可愛い制服姿が見れないわね〜」

「問題点はそこなの!?!」

なのはのツツコミをそのままに桃子は純粹にそっち方面で困っていた。

~~~~~

いろいろとフランを説得し続けた結果

（主になのはと美由希は学校の楽しさを……桃子は制服及び体操服の可愛いらしさについてを……）

「分かった！行ってみる！」

フランはそう言ったのだった。

「それじゃあ学校の編入試験の勉強をしないとね？」

美由希はそう言って国語や算数といった基本的な教材を取り出すと

「は~~~~い！」

フランは可愛く返事をするのだった。

~~~~~

「ねえねえ！」そいんすうぶんかい”ってどうすればいいの？それにこの”さいん・こさいん・たんじえんと”ってのは？」

「ええつと……………それはね……………」

「プシュ~~~~~」

『な…なのは！頭から煙出てる！』

上からフラン、美由希、なのは、ユーノ（念話）である。

「驚いたわ〜。フランちゃんって頭良いのね？」

そう言っただけで桃子はフランの頭を撫でる。

それをフランは気持ち良さげに

「えへへ〜」

と受け入れてさらに撫でて貰おうと頭を桃子の方に向ける。

「これなら学校の編入試験も大丈夫ね？」

桃子はそう言っただけでフランを撫でながら何やら書類に記入している。

「何それお母さん？」

美由希がそう言ってその書類を覗き見ると

「フランちゃんの裏編入用の書類よ？フランちゃん戸籍が無かったから士郎さんにずいぶん無茶してもらっちゃったんだけどね」

ニツコリ笑いながらそう言った。

「「え？」」

見事に重なるのはと美由希の声と固まった表情とは裏腹に桃子の顔はどこまでもにこやかだったそうなの………

妹様学校編入まであと僅か



第7話 無印編

$$\int \neg$$

とてもご機嫌な様子で鼻歌を歌いながら町を歩くフラン。

それもそのはずなのはが通う聖祥大附属小学校の編入試験に合格し、2週間後には晴れてフランも小学校に通えるようになったのだ。

「えへへ、友達100人出来るかな？」

町は夕暮れ時でそろそろ帰る時間なのだが今日は土郎が関わっているらしいサッカーチームの戦勝祝いでは家には誰もいない。

私も参加したかったのだが編入試験が同じ時間にあつた為桃子と二人で行つたのだが桃子も戦勝祝いの料理を作る為に先に帰つてしまつた。

だけど私はご機嫌だった。

何故なら

「えへへ お小遣いもらっちゃった」

そう、桃子からお昼代も含めて50000円も貰っていたからである。

そのお金で私は昼と夕方の食事を取り、ついでにお菓子のアイスま

で買ってとても嬉しかった。

家に帰るまでの時間がまだ少し時間があった為、町を歩くと

「あつ、ワンちゃんだ!」

私は子犬を見つけて駆け寄り

「可愛い〜〜〜!!」

抱きしめてほお擦りした。

そうして時間をつぶした私は実に充実した気分だった。

~~~~~

「そろそろ帰らないと桃子が心配するからまたね」

私は子犬に別れ告げ家に帰ろうとしたその時だった。

キン！

「ッ！？……ジュエルシード？なのは？」

私は周りを見渡すがいつまでたってもユーノが結界を張る雰囲気が無い。

ジュエルシードが発動したはずなのに周りにはまだ人がたくさんいた。

「……………危なくないやつなのかな？」

いつまでたっても何も起こらないので私はそう言ってその場を離れようと歩き出した時だった。

ドカーーーン！

「え！？」

振り返ると木の根っこらしき物が異常な大きさとなり建物を破壊していた。

「……………嘘……………なのは！！……………ユーノ！！」

私はとつさに二人の名前を叫んだけど近くに二人がいる気配は無い。

周りの人達は悲鳴を上げながら逃げて行く。

その間にも木の根っこは建物を破壊し続けている。

「……………」

そして私以外周辺には誰も居なくなった。

「……………ひどい…」

さっきまで散策していた綺麗な町並みが壊れていく。

「……………ひどいよ……………こんなの……………」

私は無意識の内に涙を流しそう言っていた。

ふと、血の臭いがした。

「ッ！？」

私は今まで直していた羽を出して空を飛んだ。

誰かが怪我をしている。

その誰かを助ける為に私は飛んだ。

そして血の臭いが強く感じる場所を見つけて降り立つ。

そして私がそこで見たのは……

さっきまで私が抱きしめていた子犬だった。

「……………」

ショックのあまり声が出なかった。

その子犬は強い力で叩きつけられたのか身体の一部が違う方向に向いており全身から血を噴き出して死んでいた。

「うえつく……ひつく……うええええええええええん！」

私は服が血で汚れるのも構わず子犬を抱きしめて泣いた。

悲しかった。

何よりもジュエルシードの発動が分かっていながら何もしなかった自分自身が悔しかった。

私の声に反応したのか木の根っこは私に向かって襲い掛かってきた。

「禁忌『クランベリートラップ』」

私はスペルカードを発動させて木の根っこを破壊する。

[illegible]

ルサナイ！！！！！！！！！！！！！！」

私の視界が赤く染まっていく。

目の前に写る木の根っこが憎い。

私ノ好きな町ヲ壊スこのキの根ツコがニクイ！

ワタシノダイスキナマチヲコウスジュエルシードガニクイ！

コワセ！

ナニヲ？

ワタシノダイスキナマチヲコウスジュエルシードヲコワセ！

[illegible]

ジュエルシードヲハカイスル！

フランは羽を広げると向かってくる木の根っこに対して攻撃を開始した。

死んだ子犬を抱きしめたまま………



~~~~~

「ひどい……」

「なのは……」

全部私のせいなの……サッカーチームの選手の一人が持っていたジュエルシードを見逃したせいで町がこんな事に……

「なのは！落ち込んでる暇は無いよ！早くジュエルシードを封印しないと！町がもっとひどい事になっちゃう！」

「……………そうだねユーノ君！反省するのは後にして……………」

ズガガガガガーン！

どうやってジュエルシードを捜すの？そうユーノ君に聞こうとした声は大きな爆発音に遮られてしまったの。

「な……なんなの!？」

驚いて町の方を見ると

ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア ア  
! ! ! ! ! !  
└

フランちゃんが叫び声を上げながら木の根っこに攻撃して町への被害を食い止めてたの。

「フ…フランちゃん!?!? ……どうしてフランちゃんがここにいるの?」

私は何故フランちゃんがこの場所にいるのか分からなかったけど、取り敢えずユーノ君にジュエルシードの封印方法を聞き出した。

そして私は

「フランちゃん!!」

フランちゃんの名前を呼んでフランちゃんの近くへと急いだ。

~~~~~

「フランちゃん!!」

ダレガカワタシノコトヲヨンデイル……

アレハ……ナ……なの……は……

私は狂気が薄れていくのを感じながらなのはが近付いて来るのを待った。

「フ……フランちゃん? その……子犬は……?」

なのはが私が抱いている子犬の死体を見ながら私に恐る恐る聞いて

くる。

まるで聞くのを怖がっているみたいに……

だから私は

「この子はね……なのは……さっきまで生きてたんだよ？でもね？あの木の根っこがこの子を殺したの……この子何も悪い事してないのに殺されたの！」

泣きながらなのはにそう言った。

「ッ！？……そ……そんな……」

なのはは顔を強張らせて私を見る。

まるでそれが嘘であって欲しいと願うかのように……

「なのは……私もジュエルシード集めを手伝う！絶対に……絶対にこんな事起こしちゃいけないんだよ！」

私はなのはにそう言って訴える。

するとなのはは

「……………そうだね……絶対に起こしちゃ駄目なの！」

そう言ってレイジングハートを構え直す。

「なのは……！」

「うん！」

私達は今だ建物を破壊し続ける木の根っこを操るジュエルシードを封印する為に空を翔けた。

~~~~~

「禁忌『レーヴァテイン』」

フランちゃんが向かってくる木の根っこを炎の剣で薙ぎ払いつつ弾幕で周りへの被害を減らしていく、そしてその間に私がジュエルシードの場所をサーチする。

「……………見つけた！フランちゃん！！あの一番大きな木だよ！」

「分かった！スペルカード！禁忌『スターボウブレイク』」

フランちゃんの弾幕が木の根っこを薙ぎ払い、ジュエルシードへの道を作る。

「リリカルマジカル！ジュエルシードシリアルX封印！」

《シーリング》

ジュエルシードが封印されるとあれほど被害をもたらした木の根っこはまるで元々無かったかのように消え去った。

「……………」

フランちゃんはその様子を何も言わずじっと見ていた。

~~~~~

「……これで良しつと」

私達は今あの助けられなかった子犬のお墓を作つてその中に子犬を埋葬している。

私達の周りには遅くなり私の帰りを心配して来てくれた桃子や土郎、それに恭也と美由希がいる。

なのはが魔法を使える事は皆には内緒なのでこの子犬は私に会つたあとすぐに交通にあつた事になっている。

土郎や恭也は子犬を撥ねたありもしない車を探すとまで言つてきてくれたのが嬉しくもあり、逆に苦しくもあつた。

「それじゃあフランちゃん？この子犬にお花をあげようか？」  
士郎がそう言っているのか用意していた小さな花束を私に渡してきた。

私は小さく頷くと花束を受け取りお墓に捧げた。

「……………グス……………ひつく……………」

もう枯れたと思っていたはずの涙を流し私は泣いた。

その時後ろからなのはが抱きしめてくれた。

「……………ひつく……………ひつく……………」

そしてなのも静かに涙を流していた。

二度とこんな事が起きないようにジュエルシードは全て見つけ出して封印する。

そう私となのは、そしてユーノはともに誓い合った。





## 第8話 無印編

「……………友達の家？」

「うん！すずかちゃんって言ってね？私の友達なの」

私は今日すずかちゃんの家遊びに行く日で、せっかくだからフランちゃんも一緒に遊ぼうと思って誘ってみたの。

「……………ううん、私の事は気にしないで遊んで来て？」

だけどフランちゃんは笑顔でそう言うの。

「……………フランちゃん……………」

フランちゃんは確かに笑顔なんだけどどこか無理してるの……………

まるで……………昔の私みたいに……………

「なのは、もう行かないと時間が無いぞー！」

私はそれ以上何も言えずすずかちゃんのお姉さんの忍さんと会う予定のお兄ちゃんと一緒に家を出たの。

昔の私によく似た顔をしたフランちゃんに何も言えないまま……  
本当にどうすればいいのだろうか？

~~~~~

「……………ふう……………」

私は小さくため息を吐く。

あの日から私の気分は晴れる事がない。

どうやらジュエルシードの巻き起こした事件の一つであるあの事件は私の中でそれくらいシヨックが大きいらしい。

私がこんな風になってもあの子犬は帰ってくるはずも無いのに……

「……………私も出かけようかな……………」

なのはが出掛けてすでに一時間が過ぎている。

やっぱりなのはと一緒に出掛けて行くべきだった……………そう思いながら私は家を出た。

町に出た私は前に桃子に貰ったお小遣いの残りで少し早いお昼を食べた。

とっても美味しい大きな”はんばーがー”を食べただけどやっぱり気分が晴れない。

「はあ……………」

口を開ければ出るのはため息ばかり…………

そして気が付けば…………

「ッ!?!.....なんで来ちゃったんだろっ.....」

あの現場に私はいた。

「.....ひっく.....」

自然と涙がこぼれてくる。

青色のシートに覆われたその建物達は私の無関心が招いた災害の大きさを物語っている。

町行く人達は泣いている私を尻目に歩き去っていく。

見て見ぬ振り

そんな言葉が今の私の周りの様子を表すのにちょうどいい状態だ。

そんな状態でも私の涙は止まってはくれず、逆にさらに多くなった。

「……うつうつ…ひつく…ひつく……………グス…」

心が痛い。

本当は声をあげて泣きたい。

でも私にはそんな事する資格は無い。

発動したのが分かっていたのに何もしなかった私にはそんな資格が無いのは分かってる。

でも……………

そう思うとさらに涙が止まらない。

辛くて辛くて辛くて辛くてしょうがない。

私の心は壊れてしまいそうだった。

視界が赤く染まっていく……

私はそれに気が付いたけど止めようとする気持ち起きない。

「……………もうイヤ……………」

そう言って私は意識を手放そうと目を閉じた。

「大丈夫？」

私は驚いて振り返った。

そこには私と同じ金髪に赤い瞳をした女の子がいた。

~~~~~



私はこの第97管理外世界にジュエルシードを集める為に使い魔のアルフと一緒にやって来た。

しかし来たのは良いが全く地理が分からない。

「図書館ってどこだろう?」

取り敢えず図書館に行って地図を見ようと思ったのだけど道が分からない。

気が付けば町の中をグルグルと回るはめになってしまった。

「ここどこ……? アルフ……」

私は困ったが取り敢えず誰かに道を尋ねようと周りを見ると

「あの子……泣いてる?」

赤い服を着た金髪の女の子が一人で泣いていた。

その女の子の視線の先には青色のシートに覆われた建物が見える。

「……………何か事故があつたのかな？」

私はその女の子の事が放っておけなくて

「大丈夫？」

と声をかけた。

すると女の子は驚いて振り返り私を見る。

トクン

「え？」

その女の子は赤い瞳をしており同性の私から見てもとても可愛いらしかった。

「今のつて……………何？」

私は自分の胸を押さえて自問したが答えは返ってこない。

だが確かに自分の胸が先程高鳴ったのだ。

そして沸き上がる温かいこの感情。

この子を今すぐ抱きしめてしまいたい衝動が私の中を駆け巡る。

「……………えっと、あの〜？」

私は深く思考巡らしてしまい声をかけたつきり女の子の事を放置してしまっていた。

だからだろう。

私は女の子の顔がとても近くにあるのに気が付いて

「……………え？……………はう！」

ボタン！

それに驚いてみっともない声を上げて倒れてしまった。

「へー！？ちょ…ちよっと！」

女の子がそれを見て慌ててる姿を見てその姿も可愛いと思いながら私は意識を手放した。

~~~~~

泣いていた私に声をかけてくれた女の子の名前は” フェイト・テスタロッサ”というらしい。

意識を取り戻したフェイトが自分から自己紹介してくれた。

「それじゃフェイトはお母さんに言われて捜し物を捜しに来たんだ？」

「うん……だけど見つかりにくい物なんだ……」

フェイトは苦笑しながらそう話す。

フェイトは図書館に行く途中との事だったので道案内のついでに話をしながら歩いていた。

「それじゃあフランはその子犬の事が大好きだったんだね？」

「うん……でも……もう……」

私はその時の事を思い出してまた涙が出そうになって俯いた。

ぎゅー！

「え？」

私は急に抱きしめられて戸惑ってしまった。

「フェイト……ト……？」

顔を上げるとそこにはフェイトの顔があった。

フェイトは私に笑顔でそう言うてくれた。

私は声を上げて泣いた。

93

そう言ってフェイトは私の頭を撫でてくれた。

そしてしばらくの間私はフェイトに抱きしめてもらいながら泣き続けた。

~~~~~

「へへ ありがとうフェイト！」

「どう致しまして…ふふ」

二人で笑い合いながら手を繋いで図書館への道を進む。

まるで”お姉様と咲夜”みたいに……

「ッ!？」

私はいきなり思い出した単語に驚いて足を止めてしまった。

「どうしたのフラン？」

急に歩くのをやめた私にフェイトが驚いている。

「うっん、なんでもない！それよりこっちだよ！」

私はごまかすようにフェイトの手を引き歩いた。

フェイトは不思議そうな表情をしていたけども私が笑顔で歩いていたらフェイトも笑顔になっていた。

「それじゃあここが図書館だから」

私はフェイトにそう言って手を離した。

「……あ……」

フェイトは少し寂しそうな表情を浮かべて私と握っていた手を見ていた。

私はどうしてそんな顔をしているか分からなかったけど



ぎゅ！

「え？」

私はフェイトを抱きしめた。

「フェイトは私の悲しみを救ってくれた……今度は私がフェイトを救う番だよ！」

私は笑顔でフェイトにそう言った。

「……フラン……」

フェイトは一瞬だけ泣きそうな表情をしたけれどすぐに笑顔で頷いてくれた。

そんなフェイト見た私は絶対にフェイトの味方になると心に決めたのだった。

~~~~~

私はフェイトと別れて家に帰る事にしたけど……

「……その前にお参りに行こうかな？」

私はあの子犬のお墓の前に来ていた。

「私……頑張るからね……絶対……絶対に頑張るから！」

私はポケットに入っていた昼間買ったお菓子をお供え物にしようと考えて取り出そうとした。

「……痛！……これって……」

ポケットの中に入っていたのは私の願いを叶えて砕け散ったジュエルシードの破片だった。

「……………」

私はそれを静かにお墓に供えた。

「……………何してるんだろ私……」

こんな事をしたって子犬が生き返るわけではないのに……………

でもどこか気分が落ち着いてきた。

「……ふふ 帰ろ」

私は上機嫌で家路に着いた。

明日は何して遊ぼうかな？



## 第9話 無印編

「これが”りよかん”なの？」

「うん、そうだよフランちゃんこの建物が旅館なの」

私は今なのは達と一緒に”りよかん”に来ている。

「それじゃあフランちゃんは初めて旅館に来たんだね？」

「日本に住んでるのに来た事無いなんて今どき珍しいわね」

そう言うのは”すすか”と”アリサ”

二人はなのはの親友らしくて特にすすかはお姉さんの忍が恭也の恋人らしい。

「うん！だからね楽しみにしてたんだ！」

私は皆で出掛けられるのが嬉しくて笑顔でそう言つと皆も笑顔で私の事を見ていた。

~~~~~

「それじゃあ早速”おんせん”つてのに行こう?」

フランちゃんは笑顔でそう言って着替えを持っている。

私達はフランちゃんの強い要望により荷物を下ろした後、先に温泉に入る事になったの。

「そうだね、せっかく来たんだし先に入っておこうよ」

すずかちゃんはそう言って着替えを用意する。

「それもそうね、ほら行くわよなのは!」

アリサちゃんはもう準備が終わって部屋の扉を開けようとしてたの。

「ふえええええええ!皆準備早いの!」

私は急いで準備して皆の後を追った。

「きゅきゅ~~~~~!!」

もちろんユーノ君も一緒に……

~~~~~

「うわぁ！広い！」

私は初めて見る大きな湯舟に感激してタオルを手に持ったままつい大きな声を出してしまった。

「ふふふ 元気だねフランちゃん」

すずかは前をタオルで隠しながら脱衣所から出てくる。

「まあ見たこと無いなら当然の反応ね」

アリサは特に隠しもせずに堂々としている。

「皆待つので……!!」

なのは右手にタオル左手にユーノの組み合わせで走ってこっちにやって来る。

「あ、なのはちゃん!!走ったら……」

すずかが何かなのはに注意しようとしたけど

「……………にゃあ!」

見事にこけた。

「危ない……………って間に合わなかったね……………大丈夫?」

すずかは苦笑しながらなのはを見る。

「ふん、そそっかしいわね」

そう言いつつもアリサも様子を見に行く。

「なのは、大丈夫?」

私もなのはが怪我をしてないか心配だったので近付いて声をかけた。

「うつ……………痛いの……」



少し涙目だったけどなのはは無事だった。

そう……”なのは”は……

「あれ？なのは、ユーノは？」

私の指摘になのは気が付いて地面に座ったまま周りを見るがどこにもいない。

すずかとアリサも一緒に周りを見るがどこにもいない。

「どこ行っただろう……」

「なのは、あんたこけた時にどこに投げたか覚えてないの？」

すずかは純粹に心配しアリサはなのはに事情聴取。

「うーんどこだろう？」

皆で首を傾げていると

「空からフェレットが飛んできた！」

「うお！………ってユーノじゃないか！？」

隣の男湯から士郎と恭也の声が聞こえてきた。

「お父さん！お兄ちゃん！ユーノ君そっちに行つてない！？」

なのはが隣の男湯を隔てる塀に近付いてそう叫ぶと

「その声はなのはか？ユーノならいきなりこっちの湯舟に突っ込んで今プカプカ浮いてるぞ！」

恭也が状況を事細かに教えてくれる。

というより

「お兄ちゃん早くユーノ君を助けて！」

ユーノが生きているのか私達は心配になった。

~~~~~

あの後私は先に部屋に戻るとなのはとユーノが帰ってきた。

「酷い目にあつたよ……」

ユーノはなのはの肩の上でぐったりとしていた。

「にやはは……ごめんねユーノ君……」

「あはは 災難だったねユーノ」

なのははユーノに謝り私はユーノの不幸が面白くて笑ってた。

「笑い事じゃないよフラン……危うく死んじゃう所だったんだから……」

そう言つてユーノは小さくため息を吐く。

「まあまあ、無事だったからいいじゃん。それよりもあの”たつきゆう”ってのやろつよなのは！」

私は早く遊びたくてうずうずしていたけど

「その前に話があるんだフラン」

ユーノがそう言って私を止める。

「話？なのはも急に黙ってどうしたの？」

なのはは真剣な表情をして私を見る。

「実はねついさっきの事なんだけど……………」

なのはとユーノが話してくれたのはユーノとは別にジュエルシードを探す魔導師の話だった。

「それでさっきフランと別れたすぐ後にその魔導師の関係者らしい人になのが絡まれたんだ……………」

「ふーん、そうなんだ。でもなんでジュエルシードを集めてるんだろつ……………」

私はユーノの話を聞いて考えたが実際に会ったわけでもないのだからはずもなかった。

「フランも注意しておいて？何が目的でジュエルシードを集めてるのがまだ分からないからさ……取り敢えず僕はここで休んでおくよ」

ユーノはそう言ってなのは用意した寢床に横になった。

「私も次会った時にはお話するの！」

そう言ってなのは握り拳を作る。

「私も手伝うからねなのは？」

私もなのはの力になる為に頑張ろう、そう改めて思いなのはに笑顔でそう言った。

「……うん、分かったの」

しかし何故かなのはの返事の歯切れは悪く、どこか辛そうな表情だった。

私は何故そんな顔をするのか分からず首を傾げてしまったが

「……フ…フランちゃん！卓球しに行こう？」

そう言ってなのはが私の手を引いてしまったので私は追求する機会を失ってしまったのだ……



第10話 無印編

「バカバカバカ！なのはとユーノのバカ！」

私はそう言ってなのはから離れようと空を飛ぶと

「ごめんなさいなの！待ってフランちゃん！」

「待ってフラン！これには訳が……」

なのはは私に追い付こうと走ってくる。

私は泣きながら空を飛ぶ。

全部なのはとユーノが悪いんだ。

だって……ジュエルシールドが発動したのに私を呼ばないなんて……

まだ夜が明ける前の森の中、私は涙で前があまり見えなかったが全力で飛び続けた。

それは皆が寝静まる前の事だった。

~~~~~

「そろそろ眠らないとね」

「そうね、また明日起きなくなるわ」

それまで遊んでいた私達にすずかとアリサがそう言って布団に入っていた。

「私達も寝ようなのは」

「分かったの」



私も明日起きれなくなるのは嫌だったので素直に布団の中に入って目を閉じた。

するとかかなり早い段階で睡魔が襲ってきてすぐに眠ってしまった。

「……んん？……なのは？」

不意に大きな力が動くのをかんじて目が覚めるとなのはが布団になかった。

胸騒ぎを感じた私はその大きな力の感じる場所へと羽を広げて飛んだ。

そこで見たのは傷付き顔を俯かせるなのはの姿だった。

心配になって高度を下げるとなのはとユーノの声が聞こえてきた。

「……………やっぱりフランはジュエルシード探索に参加するべきじゃない」

「ッ！？」

不意に聞こえたそんなユーノの言葉に私は身体が固まったように感じた。

「でもユーノ君……………フランちゃんも一緒に手伝ってくれれば……………」

なのはが私のフォローをしてきているがユーノは

「……………なのは…なのはだって分かっているはずだよ？フランの力が強過ぎる事、それにその力を制御できてない事も……………」

そう言っただけなのはのフォローを切って捨てる。

「…そ…それは……………」

なのはは口ごもり黙ってしまった。

「それになのはだって今日発動した時にフランを起こさなかったじ

やないか……」

ユーノはそう言ってなのはを責める。

「……………」

なのはは俯いたまま顔を上げようとしない。

裏切られた。

私の頭の中にそんな言葉が響いた。

「……………うぐ……………ひっく……………」

私は泣いていた。

「フ…フランちゃん!?!」

「フラン!?!どうしてここに!」

どうやら二人は私に気が付いたようだ。

「一緒に集めるって言ったのに……協力するって言ったのに……」

震える声で私は精一杯話そうとするけど言葉にならない。

「フランちゃん……これには訳が……」

なのはが何か言っているけど今の私には届かない。

「……………ひっく……………うるさい！」

気が付くと裏返った声で怒鳴ってた。

そして

「バカバカバカ！なのはとユーノのバカ！」

そう言ってその場を離れる為に空を飛んだのだった。

~~~~~

フランちゃんを傷付けてしまった。

フランちゃんは泣いていた。

私が泣かせてしまった。

「待つて！フランちゃん！！」

走って追い付こうとするけど空を飛ぶフランちゃんは速くで追いつかない。

「ユーノ君ごめん！！」

「なのは!？」

私はユーノ君を置いて空を飛び、フランちゃんを追い掛けた。

「ごめんなさいなの……………」

届くはずがないと分かっているのに私はそう呟いていた。

~~~~~

なのはが私の後を追ってくる。

「……ひつく…ひつく…なのはのバカ~~~~~!!」

私は弾幕をなのはに向かって放った。

散弾や誘導弾それに通常弾を大量にばら撒いたのだが、なのはは訓練に弾幕ごっこを取り入れているので難無く避ける。

私はその事にカツとなり

「スペルカード！禁弾『スターボウブレイク』」

スペルカードを発動させた。

しかし

「ッ！？当たらない!？」

私の放つ弾幕をなのははギリギリで避けて行く。

それもそのはず、レイジングハートがこのスペルカードを訓練用にコピーした物をほぼ毎日なのはは避けているのだ。

「制限時間が……」

スターボウブレイクは一度も当たらずにスペルカードは終了してしまった。

「フランちゃん!!話を聞いてなの!!」

なのははそう言って私に近付いてくる。

「……く、来るな!」

私はそう言って弾幕をさらに放つ。

そして

「スペルカード!禁忌『カゴメカゴメ』」

「ッ!?新しいスペルカード!」

なのはを囲むように弾幕を張る。

そして

《マスター!後ろです!》



「ッ！？危ないの！」

黄色の大きな弾がその囲みを崩しながらなのはに迫る。

全部で6発の大きな弾をなのはは避けるが崩された囲みとなっていた弾幕が逃げ場を少なくしていく。

「やめてなのフランちゃん！！話を聞いてほしいの！」

なのははそう懇願するが私は無視する。

そろそろ制限時間だ。

なのはのBは弾幕がいくつも掠った為ボロボロだった。

でも私はやめない。

だってなのはとユーノが私を裏切ったから……………

コワシチャエ

そんな声が聞こえた。

「……………スぺルカード…禁弾『過去を刻む時計』……………」

なのはの周りに十字のレーザーを二つ出現させて逆時計周りに回転させる。

なのはは驚いて上下に避けるが私が弾幕を張る。

「……………コンテニューなんてさせないんだから……………」

私はそう呟いて弾幕を張り続ける。

避けきれなくなったのなのはが弾幕に当たって弾け飛んでいる。

そしてなのはは意識を失って地面に向かって落ちた。

~~~~~

「……うっ……ん、ここは……」

頭に柔らかい感触を感じながら私は目が覚めた。

「……………目が覚めたんだ……」

「フランちゃん!？」

私の目の前に悲しそうな表情をしたフランちゃんの顔があったの……

どうやら私はフランちゃんに膝枕をしてもらってるみたいなの。

「ごめんねフランちゃん……あんな事言っ……」

私は身体が痛くて動けなかったたのでそのままの体勢で謝った。

「いいよ……そんなの分かりきってた事だもん……」

フランちゃんはそう言って悲しそうに顔を俯かせる。

「……でもね……でもねなのは……私練習したんだよ？なのはやユーノの足を引っ張らないようになるのはやユーノが寝てる間にレイジングハートから”ひさっしょうせつてい”の仕方を習って必死に練習したんだよ？」

初めて知った事実だった。

「……頑張って相手に怪我させない程度に手加減できるようになって……これなのはやユーノの手伝いができるってそう思ったんだよ？」

フランちゃんは声を震わせて泣いていた。

「……レイジングハートも合格って言ってくれたから必要になるその時まで内緒にしてビックリさせようって……そう思って……」

フランちゃんはそこまで言ったつきり声が震えて何も言えなくなつた。

「フランちゃん……」

私やユーノ君に内緒でしていた練習。

それがどれだけ大変だった事なのかは素人だった私は分かる。

それは手加減の苦手なフランちゃんにとってそれは血の滲むような練習だったに違いない。

それを知った私は……

ぎゅ！

「え？」

私は痛む身体に鞭を打ち、フランちゃんを抱きしめた。

「……………なの……は……」

フランちゃんはそんな私の行動に驚いていた。

「ごめんねフランちゃん……………気が付いてあげられなくて……………」

私の目からも涙が溢れてきた。

フランちゃんはこんなにも優しくて頑張り屋さんなのにあの時何も言えなかったのだろう……………

そんな自己嫌悪が私の中で渦巻く。

するとフランちゃんは

「……ありがとうなのは」

私に笑顔でそう言ってくれたの。

トクン

その時フランちゃんの笑顔を見た瞬間、確かに私の胸が高鳴ったの。  
温かくて優しい気持ちが私の身体を包むように感じたのは絶対に勘違いなんかじゃない。

そんな温かい気持ちをこの胸にフランちゃんと一緒に頑張っていく決意を改めて誓う私がいた。



第11話

無印編（前書き）

新キャラ登場

分かる人はニヤニヤしてください。



第11話 無印編

「今日は新しいお友達が来ています!」

扉越しに聞こえる先生の声

ザワザワ!!

それに伴ってざわめく教室に私はドキドキする。

先生から入って来るように指示するのでそれまで待つように言われて廊下で胸を高鳴りっぱなしでどうにも止まってくれそうにない。

「はいはい皆々静かに!!」

そう言って先生が手を叩く音が聞こえる。

「それじゃ呼びますよ、転校生入って来て!!」

ついに私を先生が呼んだ。

「はい!!」

私は元気良く返事をして引き戸を開けて入った。

教室中の視線が私に向けられる。

緊張して手と足が一緒に出そうになるのを必死に我慢して教卓前まで歩く。

そして……

「フランドール・スカーレットです！皆と仲良くなれるようになりたいのでよろしくお願いします！」

~~~~~

「疲れたあ……」

「にやはは、お疲れ様フランちゃん」

なのはがそう言ってくれるだけで私は気分が少し落ち着いた。

「そうだね、フランちゃん皆から質問攻めにあってたもんね」

すずかも私の近くに来てそう言つと

「まったくよ……特に男子からの質問が多かったみたいだしね」

アリサはそう言つてため息を吐いた。

実際この会話から分かるように私は質問攻めにあっていた。

私はクラスメートからの質問の多さに困っていると

「皆！フランちゃんが困ってるの！-」

そう言つて助けてくれたのはなのはだった。

「そうよ！そんなに一気に質問したら逆に迷惑になるわ！」

アリサもそう言つて私を助けてくれる。

そんな二人の言葉にクラスメートの皆は渋々といった感じだが従つてくれた。

そして今現在昼休み時間

私はなのは達と一緒に屋上で食事を取っていた。

「それにしてもびつくりしたよ……まさかあんなに一気に質問してくるなんて……これが”がつこう”なんだね？」

私は苦笑まじりにそう言つと

「にやはは……あれは少し違うかな？……でも私も驚いたの」

なのはもお弁当を食べながら苦笑を浮かべながらそう答える。

「皆フランちゃんに興味津々だったもんね」

「皆というか主に男子ね……」

そう話しつつすずかとアリサも食事を進める。

「でもフランちゃんの事は絶対守ってあげるの！」

そしてなのははそう言つと握り拳を作つて私の方を見る。

「ありがとなのは！」

私はそんななのはの言葉が嬉しくて笑顔でお礼を言う。

「……………」

なのはの時がいきなり止まった。

「なのは？」

私は心配になってなのはに顔を近づけると

「プシューーーーー！！」

顔を真っ赤にしたのはが頭から煙を出して倒れてしまった。

「だ、大丈夫なのは！？」

「なのはちゃん！？」

「いったいどうしたっていうのよ！？」

そんな私達の騒ぎを嘲笑うように昼休み終了のチャイムがなってしまい、私達は昼食をあまり食べる事なく午後の授業を受ける事となった。

ちなみに午後の授業は体育の時間だった。

~~~~~

「…………フランちゃんごめんなさいなの…………」

がっこうが終わってすずかとアリサが習い事がある為、なのはと二人で帰っている途中でなのはがいきなり謝ってきた。

私は何故謝られているのか分からずに首を傾げていると

「…………ユーノ君の説得はやっぱり長くなりそうなの…………」

なのははそう言って俯いた。

「そっかぁ…………ユーノはまだ認めてくれないんだ…………」

私は少し落ち込んだ。

あの旅行以来ユーノは私がジュエルシード探索に加わる事を認めてくれない。

それどころか何処か私を避けている感じまでする。

「ユーノは私の事嫌いになっちゃったのかな……………」

もしそれが本当だったらとっても悲しい。

ユーノやなのは手伝いがたくて頑張ってきたのに肝心のユーノが私のことを嫌いになっていたのだとしたら私のしよつとしてゐる事は逆効果だ。

「大丈夫だよフランちゃん！きつとユーノ君はフランちゃんにあの時あんな事を言っちゃったから少し気まずくなってるだけなの！」

なのははそう言つて私を元氣付けようとしてくれるけど私は氣分が晴れなかつた。

「フランちゃん……………そうだ！お墓参りに行くの！」

そんな私を見かねたなのははそう言つて私の手を引く。

「お墓参り？誰の？」

私にはそんな事する相手が思い付かず首を傾げていると

「あの子犬のお墓なの！」

そう言つてなのはは私の手を握つたまま走り出した。

~~~~~

「…………嘘…………」

そこで私となのはが見たのは掘り返された子犬のお墓だった。

「なんで……………」

そこからは言葉にならなかった。

「…………許せないの…………」

なのはも怒っているようだった。



せつかく子犬の為に作ったお墓を壊されて私は涙が出てきて止まらない。

なのはがそんな私の肩をそっと抱き寄せようとしてくれた時だった。

「わふ~~~~~!! 見つけたのです~~~~~!!」

そんな声とともに茶髪の女の子が全裸で茂みから飛び出してきた。

そして……

ドン!

「きゃ!」

「わふ!」

その女の子と私は倒れた。

「え? え? いったい何なの!？」

なのはも混乱しているようで倒れたままの私と女の子を見ている。



なのはの絶叫が辺りに響き渡る。

私も自分のした事に驚いて呆然としていると

「契約完了なのです。」 まいますたー」

そんな混乱の中、女の子はそんな事を言っていた。

第12話 無印編

「つまりあなたはあの時の子犬で私が置いていったジュエルシードのおかげで私の使い魔みたいな存在になれたって事？」

「そうなのです！」

私は今家である公園でキスをしてしまった女の子から詳しい話を聞いている。

女の子はニコニコと終始笑顔で私の質問に答えてくれている。

なんで家にいるのかというと公園で全裸のまましていると”おまわりさん”とか”変人”に声をかけられそうだったから私となのはで女の子を人目に付かないような道を通って連れてきたのだ。

「信じられない……」

「それは本当なの？」

私となのはは今だに信じられないが、確かに女の子からは魔力を感じとることができる。

そして私の中にも女の子となにか繋がっているような感覚もある。

「まだ疑っているみたいですね……………これならどうですか？」

ポン！

そんな可愛いらしい音を立てて女の子の身体が煙に包まれた。

そして煙の中から出てきたのは……………

「わんちゃんだ！」

私は驚いてつい声を上げてしまったがなのはも驚いているように何も言えないようだった。

「これで信じてくれますか”ますたー”？」

そう言って首を傾げている子犬はとても可愛いらしくて私はつい…………

「可愛い……………！！！」

と言って抱きしめた。

「わ、わふ！ますたー！？」

子犬が何か言っているけど私は気にせず抱きしめて頭を撫で続けた。  
すると次第に気持ち良くなってきたのか、わふわ言う声が聞こえ  
なくなってきた

「寝ちゃった……えへへ」

子犬は眠ってしまった。

「とっても可愛いの」

なのはも私と一緒に子犬の頭を撫でていたけど

「そういえばこの子の名前って何なの？」

不意にそう言って首を傾げた。

「あ、聞いてなかった……」

私は肝心な事を聞いてなかった。

~~~~~

「名前はまだ無いのですたーが決めてくださいなのです」

子犬はそう言っているけど

「名前……うん……あんまりそういうのって思い付かないな」

「そうなの」

私達は悩んだ。

理由は簡単

名前を決める事がこんなに難しいとは思わなかったからだ。

「うん……ポチってのはどうかな？」

「フランちゃん……その名前はこの子には合わないの……」

こんな感じで私の考えた名前はなのはにすぐに却下されてしまう。

今までに却下された名前はドリアン、ゴン、ジローそしてバーバリアンだ。

何がいけなかったんだろう……カッコイイのに特にバーバリアン……

……

「うーん………ん？………ねえなのは？」ハチ”って名前はどうかかな？」

私はなのはにそう言った。

「ハチ？ありきたりな名前だね？でもなんでそんな名前思い付いたの？」

なのはも案外普通の名前なのですぐには却下せずに私に理由を聞いてくる。

だから私は

「昨日のテレビで忠犬ハチ公って番組があつたよね？その時のハチ公の忠誠心と忍耐強さに感動したからこの子にもそういう風になってほしいなって」

そう答えた。

「……………悪く無いんじゃないかな？」

なのははそう言つと子犬の方を見る。

「ますたーが私の為に考えてくれた名前に文句は無いのです」



そう言って人型に変化して”ハチ”は笑顔でそう言った。

全裸のまま

「……………先にお洋服を着てもらっの……………」

「そうだね……………」

名前を考える事でその事をすっかり忘れてた私達だった。

「わふ？別に服を着なくても大丈夫です！」

「それはダメなの!!」

なのはは八チのその言葉に激しくツツコミをいれていた。

~~~~~

あの後仕事から帰ってきた皆に八チの事を教えると驚いていたが桃子と美由希が

「「可愛い!!」」

と言って八チを抱きしめていた。

八チはわふわふと慌てていたがしばらくしたら桃子の着せ替え人形になっていた。

そして家にいたはずなのに空気だったユーノは

「フラン……………明日から一緒にジュエルシードを探すのを手伝ってくれないかい？……………もちろん君の使い魔も連れて……………というか絶対に連れて来て！！」

と言っていた。

私は皆と一緒にジュエルシード探索に行ける事が嬉しくて

「分かったよ！よろしくねユーノ！」

と言ってユーノの手？を握り握手した。

とうとう私もなのはやユーノと一緒にジュエルシード探索をする時がきた。

ハチはあの時の事を覚えていらしくて今でも思い出すたびに身体が震えるらしい。

もう二度とそんな思いをする人が出ないように精一杯頑張る事を私は皆と仲良くしているハチを見ながら誓った。



### 第13話 無印編

「賭けて…………あの時と同じように……………うつん、ジュエルシードとフランを賭けて勝負!!」

フェイトがそう言つて黄色の魔力刃を付けた黒色の鎌を構える。

「フェイトちゃんがその気なら私も負けられないの! フランちゃん  
は渡さない!!」

なのはもレイジングハートを構え直してフェイトに向ける。

何故こんな事になったのだろう………

「フェイト! そんな事よりジュエルシードを!!」

「そうだよなのは! あの子より先にジュエルシードを!!」

フェイトの使い魔のアルフ?とユーノが二人にそう言つと

「うるさい（アルフ）（のユーノ君）……！！！！！！」

「は、はい！！！！」

凄じい剣幕で怒られていた。

「わふ……ますたーはもてもてなのです」

そんな光景にハチも驚きっぱなしだ。

「……えと……私はどっちを応援すれば良いのかな？」

そんな私の呟きに

「<sup>なの</sup>私！！！！！！」

フェイトとなのはは揃って答えた。

どうしてこうなっちゃったんだろう……

事の始まりはユーノが魔力を感知した事だった。

~~~~~

「この魔力反応は！ジュエルシードを強制発動させようとしてる！  
」

ジュエルシード探索の為夜の町のパトロールをしている時の事だった。

ユーノが町の中で誰かがジュエルシードを見つける為に放った魔力を感じ

「間に合え！！」

周囲に被害が出ないように結界を張った。

「わふ！凄いですユーノ！」

ハチが驚いてユーノの事を褒めると

「それほどでもないよ！」

ユーノは何故かとても誇らしげだった。

「とにかくジュエルシードを早く封印するの！レイジングハート！」

《S e t u p》

なのははBJを身に纏い戦闘体勢に入った。



私もすぐに攻撃ができるようにスペルカードを取り出しておいた。

「それじゃあ行くよ?」

「うん!」

私となのははジュエルシードの反応がする場所へ飛んだ。

「わふ~~~~!! ますたー待ってくださいなのです~~~~!!」

ハチも一応魔力を消費する事で空を飛べるので追ってくる。

「なのは! 僕を置いて行かないで!!」

哀れユーノはなのはに置いてけぼりにされて陸路を移動していた。

そしてジュエルシードの発動した場所に着いたのだけどすでにジュエルシードの暴走は止まっていてそこにいたのは

「フェイト!？」

「フラン!？どうしてそこに!？」

黒色のBJを身につけたフェイトが黒色の杖を手にしてそこにいた。

「ふえ!？フランちゃんはフェイトちゃんと知り合いなの?」

なのはは困惑したように私に聞いてくる。

「うん……フェイト……」

私は驚きを隠せないままフェイトへと視線を向けると

「ッ!？フラン……」

何故かフェイトは顔を赤く染めた。

「ん?フェイト?」

隣にいたオレンジ色の髪をした女の人が怪訝な表情を浮かべてフェイトを見る。

「ッ!？な、なんでもないよアルフ……」

しかしフェイトはそう言って視線を逸らした。

「フェイトちゃん……まさか……」

そんななのは呟きにフェイトは肩をビクッとさせ露骨に反応した。

「そうなんだ……………フェイトちゃん……………」

そう言ったのはから漂うオーラは尋常じゃなかった。

どのくらい凄いのかというと前にテレビで見たドラ○ン○ールって  
いうアニメの主人公が全力全壊で戦う時みたいだ。

「ま、ますたー……………」

あまりの凄まじさにハチも怯えてしまっている。

そういう私も近くにいただけで吸血鬼の本能が危険を知らせてくる。

それは向こうも同じだったのだろう。

アルフと呼ばれた女の人は顔を真っ青にしてガタガタと震えていた。

しかしそんな中でなのはオーラを真っ向から受け止める人がいた。

「負けない……………!!」

フェイトだった。

フェイトもなのと同じくオーラを身に纏いプレッシャーを与えている。

ゴゴゴゴゴ!!

音にするならそんな感じだろう。

きつと互いの視線のぶつかり合った所に火花が散っているのが幻視できたのは私だけではないはずだ。

互いの緊張が最高頂に達したとき

「やっと追い付いた!……………えっと……………これはどういう状況なの?」

雰囲気全台なしにする淫獣もといユーノが追い付いてきた。

「「「.....」」」」

全員が無言のジト目でユーノを見る。

その状態に耐え切れなくなったユーノが

「ぼ、僕の事よりジュエルシードを封印した方が良いんじゃないかな!？」

と言った事で再び時が動き出す。

「とにかくジュエルシードは頂いていきます」

フェイトがそう言って再び杖を構えると杖が変形し黄色の魔力刃を持った鎌になった。

そこから先はなのはとフェイトの一騎打ちだった。

それを私達はただ呆然と見守るだけの時間が続く。

「.....なんか置いてけぼりだね.....」

「わふ...」

私とハチそれとユーノにアルフは戦う事なくその勝負の行方を見ていた。

「私、なのは！高町なのは！！聖祥大附属小学校三年生！！」

二人が距離を取った際に急になのはがそう言った。

「話し合いだけじゃ……言葉だけじゃ何も変わらないって言ったけど……話さないと……言葉にしないと伝わらない事だってきつとあるよ……」

そう言われたフェイトは驚いていたが何も言わない。

「何も知らないのにぶつかり合うのは嫌だ……」

そう言ってなのははレイジングハートを構え直す。

「でも………フランちゃんだけは絶っっっっっっっつ対に渡さないの……」

最後のこの発言がなければ結構決まったように思ったのは私だけじゃないはずと周りを見ると

「「「……………」」」

やっぱり私だけじゃなかった。

その事に私は胸を撫で下ろした。

しかし

「賭けて……………あの時と同じように……………うつん、ジュエルシードとフランを賭けて勝負！！」

フェイトがそう言って黄色の魔力刃を付けた黒色の鎌を構える。

「フェイトちゃんがその気なら私も負けられないの！フランちゃん  
は渡さない！！」

なのはもレイジングハートを構え直してフェイトに向ける。

どうやら戦いの方向性は変な方角に突き進んだまま帰ってきていないようだ。

アルフとユーノの言葉も今の二人には届かない。

しかし私の呟きには反応してくれた。

そして二人は再び空を飛び一騎打ちを再開した。

一騎打ちが始まった時に私は疑問に思った事をユーノに聞いてみた。

「ねえユーノ？」

「……………ん？なんだいフラン？」

少し沈黙があつたもののユーノは反応してくれた。

だから私は



「さっきジュエルシードは魔力によって強制発動したんだよね？  
だったら今戦うのは危ないんじゃないの？」

それを聞いたアルフとユーノは顔を真っ青にして

「二人とも戦うのはやめ……」

言ってる間に黄色の魔力刃がジュエルシードに突き刺さった。

「フェイトおおおおおー！」

アルフ絶叫。

しかし幸いにもジュエルシードはギリギリ発動せず全員でホッと胸を撫で下ろした瞬間

桜色の砲撃が突き刺さった。

「なのはあああああああ！！」

今度はユーノが絶叫。

そして

ジュエルシードは暴走……………

「キュとしてドカーン！」

しなかった。

「へ？」

驚く皆をよそにハチだけは

「流石なのですますたー!!」

と言って喜んでいた。

~~~~~

「二人ともちゃんと反省した？」

「はい……」

今私の前にはボロボロになったBJを纏ったまま正座をするのはとフエイトがいる。

「とにかくジュエルシードは危ないものなんだから乱暴に扱ったら駄目なんだよ？」

とりあえずあの後戦いをやめないなのはとフエイトを”ひさっしよ  
うせつてい”の弾幕で撃ち落として反省させているのだ。

「「ごめんなさい（なの）」」

二人ともちゃんと反省しているようなので私は

「ならいいよ？……でも良かった……もし二人が怪我してたらっ  
て思うと………」

私は悲しくなつて俯いた。

「「フラン（ちゃん）………」」

二人は顔を見合わせて頷いた。

「「<sup>なの</sup>一時停戦協定」」

そう言って握手をしていた。

「え~~~~~!!」

アルフとユーノが驚いていた。

「あのねフェイトちゃん、私ユーノ君のお手伝いでジュエルシードを集めてたの。あ、もちろん自分の意志だよ？」

「そうなんだ……私は母さんをお願いされて集めてたんだ」

二人は今まで争っていたのが嘘のように互いの事情を話し出した。

「……頭痛い……」

ユーノとアルフは互いに頭抱えていたがなのはとフェイトは私とハチを交えて和気あいあいとしている。

そして

「それじゃあ私となのはそれにハチでフェイトのお手伝いをしようよ！」

「「賛<sup>なの</sup>成（です）！」」

「あれ！？僕は！？」

何故か驚いているケモノがいるけど気にならない。

私達は互いに握手をし、連絡先を教えて合って解散した。

私達は明日からのジュエルシード探索がもっと楽しくなりそうな雰囲気<sup>雰囲気</sup>に心躍らせて家に帰った。

「だから僕は!？」

「うるさいのユーノ君」

ケモノはまだ騒いでいた。



## 第14話 無印編

「ここがフェイトちゃんのお母さんの住むお家なの？」

「なんか”らすぼす”が出て来そうな所だねー」

「?……”らすぼす”って何……?」

上からなのは、私、フェイトの順である。

今日はフェイトがお母さんに経過報告をする為にお母さんの住む”時の庭園”に訪れる日で、フェイトが私の事を紹介たいから一緒に来てほしいと言われたのでフェイトについて来た。

その時になのはが

「一人じゃ危ないの！だから私も一緒に行くの！」

と言って笑顔でついて来ました。

その時フェイトが少し顔を曇らせてたけどなんでだろう？

「そう言えば今日はあの使い魔と小動物はどうしたんだい？」

不意にアルフそんな事を聞いてきた。

「……確か私がハチに今日はフェイトのお母さんに会いに行くだけだから家に居るようになって言ったらユーノも行かないって言ってた

よ？」

私がアルフにそう言うつと

「……………青春つてのかね…」

つてアルフは呟いてた。

”せいしゅん”ってなんだろう？帰ったら桃子に聞いてみよう。

そんな話をしながら歩く事15分

ようやく目的地の王座の間に着いた。

「ようやく”らすぼす”の間に着いたんだね……………」

「にやはは……………」

「さっきも聞いたんだけど”らすぼす”って何？」

私はフェイトの問いに答えないまま

「スペルカード！禁忌『レーヴァテイン』とりゃー！…」

扉をレーヴァテインで吹き飛ばした。

「つていったい何してんだー!!」

突然の事に皆は呆然としていたがいち早く立ち直ったアルフからのツツコミが入った。

「えへへ 凄いでしょ?」

私は得意げにVサインをアルフにすると

「凄いでしょ? じゃな〜い!! いったい何考えてんのさ!」

頭を抱え込みながらツツコミを入れた。

「フランちゃんやり過ぎなの!」

「か、母さん!」

なのはやフェイトもなんとか立ち直りそれぞれアクションをとってた。

みんなの反応があまりにも大きいので

「雇って壊す為にあるんだよね？」

ってアルフに聞いてみた。

「んなわけあるか—————！！てかそんなの誰に聞いた！！」

アルフはそう言って私に詰め寄る。

だから

「分かんない だって私”きおくそうしちゅ”だもん」

って笑顔でアルフにそう言った。

するとアルフはorz こんな格好で

「…………聞かなきゃ良かった…」

そう言ってた。

「あー！」

「……………今度はどうした？」

そんな疲れたような声をしたアルフに

「えっと確かこう言うんだっけ？」 弾幕はPAW-DAZE!!」

そう言って私はアルフに握り拳の親指を立てるポーズをとった。

するとアルフは

「頼むから帰っておくれよ……………」

そう言っただけ涙を流した。

私は何故アルフが泣いているのか分からなかったけど、とりあえず慰めてあげようと近づくと

バシユン！

「「「え？」」」

気が付くと私達は時の庭園の入り口に戻っていて

ビービービー！！

《王座の間に侵入者あり！非常用警備システム作動します！》

そんな警報と無機質な声が聞こえてきた。

そして

「……………嘘だと言っとくれよ……」

そんなアルフのぼやきとともに大きな鎧みたいなのがいつぱい出てきた。

「ねえねえ” ひじょうようけいびしすてむ” って何？」

私は” ひじょうようけいびしすてむ” の意味が分からなかったのでその事をみんなに聞いてみたら

「「「……………」」」

三人ともorz こんな格好をしてた。

「？」

私はそのみんなが何故そんな格好をしているのか気になったけど

「スペルカード！禁忌『スターボウブレイク』」

こっちに迫っていた鎧を全部粉々に吹き飛ばした。

「なんだかワクワクしてきた！これが” はやて” の言ってた” あーるぴーじー” ってのかな？」

そう言って私は次に使うスペルカードを構える。

するとそれまで沈んでいた三人が立ち上がった。

「……………そういつ事なの……………フランちゃんが変な事を言う原因は……」

「その”はやて”って名前の悪い虫のせいなんだ……………」

「……………じゃあさっさとこれ終わらせて……」

「……O H A N A S Iしないと（いけないの）（な）……！」

その時の監視カメラの映像には三人の目からハイライトが消えていたらしい。



第15話 無印編

「いつたいなんなのあの子達は!!」

私、大魔導師たるプレシア・テストロッサは監視カメラの映像を見ながらつい叫んでしまった。

画面に映し出されているのは”あの人形”とその使い魔、そして二人の少女の姿だった。

「……………いつたい何が起きたというの？」

無意識に出た私の独り言に答えてくれる存在は居ない。

そう”あの子”や使い魔だったりニスはもう居ないのだ。

「くっ……………あの子…時空管理局なのかしら…？」

あの人形と一緒に行動する白い魔導師はもしかしたら時空管理局の局員なのかもしれない。

「厄介ね……………」

もしそうだとしたらあの赤い服を着た金髪の少女は白い魔導師の使い魔の可能性がある。

使い魔は主の強さと素材にした動物、それに僅かばかりの運によっ

て強さが決まる。

私の見る限りあの赤い服の少女は魔力球だけで防衛用の人形を倒している。

あの人形達は少なくともランクA〜AAAまで用意しておりそこの管理局の局員ではまず太刀打ちできない。

「……………まずいわね……………このままでは……………」

どうして嗅ぎつけられたのかは分からないけどこのままでは”計画”に支障が出る。

「……………戦力を削ぐ必要があるわ……………」

どうしてあの人形が私に反抗し、管理局に寝返ったのかは分からない。

「……………言うしかないのかしら？」

しかしあの人形を止める手はある。

「フフ……………アッハハハハハ！」

計画に支障が出るかもしれないがこれ以上こちらに被害を出す訳にはいかない。

それにあの手を使った後のあの人形の表情が目には浮かぶ。

そう思うと笑いが止まらない。

あの人形はまだその事に気が付いていないはずだ。

「……………使えない人形は捨てないかね？」

狂気の笑みを浮かべ、笑い続けるプレシアは気付いていなかった。

この騒ぎがちょっとした誤解から始まり

自身に訪れるはずであった運命すらも破壊する行為であったことに

.....

~~~~~

「……それでフランちゃん？その”はやて”って子は男の子かな？  
かな？」

その質問は唐突だった。

質問された私は近づいていた5体の鎧を全てレーヴァテインで薙ぎ  
払い弾幕でとどめを刺してなのはを見る。

私がそこで見たのは

元は鎧だったのかもしれないが形がはつきりと残っていない状態まで破壊された大量の残骸と外まで続くしゅうしゅうという音と大量の煙が立つ大きな縦穴だった。

「……………なのは…それ……………」

そう言っただけで私がなのはの後ろを指差した。

「にゃはは……………つい力み過ぎちゃったの」

なのはがそう言っただけで笑いながら頭をかいた。

しかしその後ろにある光景はそんなかわい言い方で許されるものじゃなかった。

いつもの砲撃よりもかなり威力が上がっている。

「……こっちは終わったよ」

「こっちも終わったよ……ふう、少し疲れたよ……」

そう言ってフェイトとアルフがこっちに合流してくる。

二人とも清々しいまでの笑顔だがその後ろにあるのはバラバラにされた後穴だらけにされた残骸とボコボコに凹み、その上で強い力で引き裂かれた残骸があった。

「……………」

私は三人のあまりの鎧に対する過剰攻撃の凄まじさに若干引いてしまった。

しかもアルフは気が収まったのか治ってしまったがなのはとフェイトはまだ瞳のハイライトが消えたままだった。

「フランちゃん？どうしたの？」

そう言っただけなのはが私に近づいて来る。

顔は笑顔なのだがハイライトが消えたままの目が少し怖い。

「……………それでフランちゃん？」はやて”って名前の子は男の子

なの？そしていったいいつ知り合ったのかな？かな？」

そう言っただけなのは私の右腕を掴む。

まるで壊れ物を扱うかのような掴み方だったのだけれど実際に掴まれた私はのはから溢れ出す、前回フェイトと戦った際に出したオーラの前に体が固まってしまった。

「……そうだね、私も聞いてみたいな？」

左腕はなのと同じようにオーラを放出するフェイト掴まれて私は完璧に身動きができなくなった。

それに気が付いたアルフが耳を伏せて明後日の方向いて

「……ほ、他に鎧が居ないか見てくるよ！！」

と言っただけで走り去った。

「それじゃあフラン（ちゃん）？話してもらえるかな？」

二人はとても綺麗な笑顔で私にそう言った。

そして近くにあるというフェイトの部屋に私は連れて行かれて質問を答える事になった。

~~~~~

「……………それじゃあそのはやてちゃんは図書館に本を読みに行った時に偶然本が高い位置にあって困っていた所を助けた女の子でその時にお友達になったんだね？」

「……………うん…そうだよ…」

今私は正直泣きそうだった。

あの後三人でベットに腰掛けて私に対しての質問が始まったのだ。



なのはやフェイトはあのオーラを纏い、瞳のハイライトを消したまま質問に答える私を凝視していた。

それが怖くて私は泣きそうになっているのだけど二人は気が付いてくれない。

できればアルフに戻って来てもらってこの状態から解放してもらえるようになるのはとフェイトをなだめてほしい。

二人がオーラを纏ったままである為体が固まったまま動こうとしないでくれないので今現在深刻な問題が発生している。

それは……………

(ア、アルフ…………早く戻ってきて…………じゃないと…………漏れちゃうよ…………)

先程からどうしてもお手洗いに行きたくて堪らないのだ。

すでに我慢できる限界点を超えつつある。

「それじゃあフラン？そのはやては”ただの”お友達だよね？」

私は限界に近い為声を出すだけで危なかったので頷いた。

「……………ふう……………」

なのはとフェイトは同時にため息を吐き出した。

その瞬間二人からオーラが消えて瞳に色が戻ってきた。

私は体が動くのを確認するとフェイトに

「フェイト！お手洗いつてどこ！？」

そう聞いてフェイトの手短な説明を聞いて部屋を飛び出した。

途中で会った鎧達をスターボウブレイクで薙ぎ倒し、目標地点まで全力で突き進んだ。

その時に

「ん？……あ！フラン！大丈夫……ぐはっ！」

という声が聞こえた気がしたけど多分幻聴だろう。

それよりも先に成すべき事が私にはある。

そんな事を考えつつ私はお手洗いを目指した。

結論から言つとなんとか間に合ったが動いたせいで………  
(ここから先の文章はフランの涙目による強い訴えにより削除)

~~~~~

「フェイトちゃん！」

お手洗いから帰ってきた私が部屋に入った瞬間にそんなのは焦った声が聞こえてきた。

そしてそこで私が見たのは表情が抜け落ち、まるで人形みたいになって崩れるように倒れるフェイトの姿だった。

「フェイト！」

間一髪、床に倒れる前に私となのはがフェイトを支える事に成功した。

「……………ひどい…なのは、いったい誰がこんな事を？」

部屋の中を見回しても敵らしい存在が見当たらないので私はなのはに聞いてみた。

そして私はどうしてフェイトがこうなったのかという原因とフェイ

ト誕生の秘密を知ることになった。

「……………フェイトが実験の失敗作だなんて……………」

私はショックを隠しきれなかった。

まさか自分の友達がクローン技術によって生まれてきた存在である事を誰が想像できただろうか。

私が戻ってくる少し前にいきなりフェイトの部屋にプレシアからの通信が入り知らされたらしいのだ。

フェイトのお母さんであるプレシアには一人の娘がいた。

しかしある事故が原因でその娘は死んでしまい悲しみのあまりプレ

シアは禁断の研究であるプロジェクトFを始動させてフェイトを生み出した。

しかしフェイトはプレシアの本物の子供のクローンであるものの、本物とは全く似ていない存在になってしまったらしいのだ。

その事に絶望したプレシアはフェイトの事を人形扱いし、しかも今回の事でもういらないとまで言うてきたらしいのだ。

「……………フランちゃん……………」

なのはは涙を流しフェイトを抱きかかえたまま私を見る。

私もあまりに突然の事だったのでどうすれば良いのか分からない。

でもただ一つだけやらなくてはいけない事がある。

それは

フェイトのお母さんであるプレシア・テストロッサにフェイトを”娘”である事を認めさせる事だ。

確かにフェイトはプレシアから純粹に生まれた訳ではない。

しかしそれでもフェイトの育ての親である事には変わりはないのだ。

しかもフェイトはそのオリジナルであるプレシアの子供のクローン、つまり血を分けた家族、もしくは姉妹にあたる存在のはずだ。

それに本当に嫌っているのであればフェイトを自分の目の届く範囲に置いていた意味が分からないし、おそらく自分でも心の中でフェイトの事を思っている事に気が付いていないのかもしれない。

そんな考えが私の中で纏まっていく中、私は自然とそう考えつく事のできた自分に驚いた。

まるで……

過去に自分が体験したかのようにだった。

「……………」

しかしそう考えると妙に納得できる。

おそらく自分はこの中でプレシアの状態に似た何かをやってしまったのかもしれない。

だとしたらこんな無益な事を続ける必要はない。

「……………終わらせなきゃ……………」

それに今のフェイトの状態はかなり危険だ。

一刻も早くプレシアを説得してフェイトを助けないと取り返しのつかない何かが起こるように感じる。

「……………なのは、フェイトをお願い」

「フランちゃん!？」

私はフェイトをなのはに任せて部屋を出た。



目指すは王座の間

フェイトが笑って過ごせる未来をの為に私は進む。

それが如何なる結果をもたらすのかは誰にも分からない。

そして

「プレシア・テストロッサ!!」

「……………良く来たわね? 歓迎するわ」

私とプレミアアの対話が今始まるつとじていた。

第16話

無印編（前書き）

過去最長です

第16話 無印編

「プレシア・テストロッサ！」

そう私の名前を呼んで王座の間に入ってくる金髪の少女。

「……………よく来たわね？歓迎するわ」

私はその少女以外誰も入って来ないのを確認し、心の中でほくそ笑んだ。

どうやらうまくいったらしい。

これであの人形は使い物にならない。

そう思っていると

「プレシア……………なんでフェイトにあんな酷い事を言ったの！？フェイトはプレシアの人形なんかじゃない！！プレシアの子供なんだよ！？」

少女はそう言って私に近寄る。

私は少女の言っただ事に嫌悪感を感じた。

あの人形が私の子供？

ふざけないでほしい。

「何を言うかと思えば……………私の子供は”アリシア”だけよ？あんな失敗作の人形なんて私の子供ではないわ」

そう言っ て私は鼻で笑う。

すると少女は近寄るのを止め何故か悲しそうな顔をして

「可哀想な人……………過去に縛られて今が見れないんだ。」

そう言っ た。

それを聞いた瞬間体中の血が沸騰するかと思えるほどの怒りを感じた。

「なんですって……？アリシアが過去の存在だと言うの！？」

私はその怒りをこらえきれずに少女に向かって叫ぶようにそう言う  
と少女は

「そうだよ！！だって………だって死んだ人に縋っても何もしてく  
れないよ！？それにそんな事したら死んだアリシアも心配で眠れな  
いよ！！」

涙を目に貯めながらそう言い返してきた。

私は少女のそんな言葉にハツとした。

確かにあの優しいアリシアの事だからこんな事をしている私を見て  
心配しているかもしれない。

そんな考えが頭をよぎった瞬間、全身に冷水を浴びせられたような  
感じがした。

そして少女は泣きながらにこう言った

「……………それに……………フェイトはそのアリシアのクローンだって言う  
なら……………フェイトはアリシアの妹なんじゃないの！？」

そう言われた瞬間私はある事を思い出していた。

あれはまだアリシアが生きていた頃。

その日はアリシアの誕生日だった。

しかし仕事を立て込んでいた私はアリシアへの誕生日プレゼントを  
買う事が出来ず、その場しのぎにアリシアに次の誕生日にプレゼント  
を渡す約束をして何が欲しいのかを聞いたら

『ママ！私妹が欲しい！！だって二人でいたらお留守番も寂しくな  
いもん！！』

そう笑顔で言っていたのだ。

「……………アリシア……………フェイト……………」

今になって思い出した。

私はなんて愚かなのだろうか……

気が付いた時にはすでに手遅れとなっている。

そんな苦い経験はアリシアの時に散々味わったはずなのにまた繰り返し  
返していたなんて……

自責の念が私の中を駆け巡る。



しかし表面上は平然としているように取り繕う。

何故そんな事をするのか……

それは

私にフェイトの母親としての資格が無いからだ。

今まで散々人形扱いしておいてさらにはいらないとまで言ってしまったのだ。

それに………

私にはもう時間が無い。

私の中に巣くう病魔が着実に私を死に近づけている。

そんな状態で今更フェイトの母親になったとしてもとてもじゃない  
が時間が足りない。

それならば……………

私は悪を貫き通してあの子に嫌われた方があの子の幸せに繋がるの

ではないかという考えが頭の中にあるからだ。

それにここには目の前にいるフェイトの為に泣いてくれている少女やあの人の良さそうな白い魔導師もいる。

ならば私がいる必要はない。

「……………だからどうしたというの？例え血が繋がっていたとしても人形には変わらないわ！！」

心がキリキリと痛むのを無視して私は少女に吐き捨てるようにそう言う

「なんで！？なんでそんな事言うの！？そんなのおかしいよ！？だって……………フェイトは……………フェイトは！！！」

少女は綺麗な赤い宝石のような両目から大粒の涙を流しながら叫ぶ。

正直嬉しい。

フェイトにはこんなにもフェイトの事を思ってくれる友達がいる事がとても嬉しい。

だからこそ

私はフェイトの為にここで消えるべきだ。

私は泣き続ける少女に向かって自分の持つ鞭を振り上げる。

少女は気が付いたようだが咄嗟の事だったので避ける事が出来ない。

「……………」ごめんなさい……………」

フェイトの友達に攻撃することに心が痛んだ。

しかしフェイトの為に私は必要悪にならなければならない。

悪の魔導師プレシア・テストロッサとして最後まで貫き通して見せなくてはフェイトは管理局に犯罪者として捕まってしまう。

そんな事には絶対させない為に私は少女に鞭を振り下ろした。

そんな無機質な男性の声と共に少女に当たるはずだった私の鞭を切り落とす黄色の魔力刃。

そして

「……………母さん……………」

そこには妙に威圧感のするオーラを身に纏い、瞳のハイライトを消したフェイトの姿だった。

そして

「……………フランに手を出すならいくら母さんが相手でも許さない」

そう言って魔力刃を展開したバルティッシュを私に向けて構え直す。

「へ？」

私は思わず変な声を出してしまった。

これがあのフェイトなのだろうか？

私の知っているフェイトとはまるで違う。

というよりも

「フェイト……？」

あの少女を見るフェイトの目が少し……いやだいぶおかしい。

「何？母さん？」

フェイトは慈愛の目を少女に向けつつ、私には絶対零度の視線を向けてくる。

やめなさいフェイト！……その道は進んではいけないわ！！



だ  
っ  
て  
.....

私と同じ趣味になったフェイトを手放したくなるじゃない！！  
そんな私の心の中の葛藤をよそにフェイトは後から来た白い魔導師  
と少女を取り合っている。

そして

「フラン（ちゃん）は渡さない（の）！！」

フェイトと白い魔導師の少女を奪い合う戦いが始まった。

ああフェイト……素晴らしいわフェイト……さすがテストロッサ  
家の娘！！

私は先ほどまで考えていたフェイトの突き放そうとする考えをスパ  
ッと忘れてこの素晴らしい場面を記録するためにカメラを構えた。

どこから出したか聞くのは野暮よ……

~~~~~

「……………まったく、反省した？」

「……はい」

私は今フェイトとなのはにお説教をしている。

せっかく私がフェイトの為にプレシアの説得をしていたのに二人ともいきなり戦い始めるんだから……………戦ってた理由は私をめぐってだっていうから始末に負えない。

そして

「……………プレシアはいつまでそうしてるの？」

プレシアは先ほどから鼻がから忠誠心を大量に流しながらカメラを回し続けている。

先ほどまでのシリアスな空気はどこに消えたのか思わず聞いてみたくなるくらいにグダグダな空気だ。

「怒られて俯くフェイト……ハアハア……いいわ……まったくなんでこんなに可愛いのかしら……！」

プレシアはもう手遅れっばいです。

「はあ……………なんだか疲れちゃったよ……………」

元々の原因は扉を破った私んだけど誰がこんな展開を読めたのだろうか…………

「ツツコミ役が少ないなあ……………ってフェイト？アルフは？」

このカオスを収める唯一の純然たるツツコミ役のアルフがいないのでフェイトに聞いてみると

「アルフ？……………あ！そういえば黒こげになって廊下に倒れてたよ？アルフも変な趣味してるよね」

原因判明。

私が恐らくスターボウブレイクで誤って（ここ重要）誤射してしまった後、誰もアルフを起こさずそのまま放置してしまったらしい。

「……………後で助けよう」

少し罪悪感を感じた私はそう思った。

『とりあえず一件落着なのかな？』

そんな誰かの一言を聞いて確かにこれで終わりだと私も思った。

だって私に怒られて俯くなのはとフェイト、そしてそれを撮影し続けているプレシア。

「え？」

私はもう一度状況を確認した。

私に怒られて俯くのはとフェイト、そしてそれを撮影しているプレシア。

じゃあ今私に話しかけたのは？

『私！』

そう言って私の頭上から逆さまの状態で全裸のフェイトが……  
って

「何してるのフェイト……………違う……………フェイトは私よりも身長が少し高いはず、それになんて透けてるの？」

私はフェイトに似た少女を見て驚きよりも疑問を覚えた。

その少女は笑うばかりで何も語らないが、私に手招きをして王座の裏側へと誘っている。

私はその誘いに乗り、王座の裏側へと進んだ。

「そつかあ……………あなたが”アリシア”なんだね？」

『うん！』

王座の裏側にあつたのは一つのカプセル。

その中にはフェイトに似た少女が培養液の中にまるで体育座りをするかの様に浮かんでいた。

『ずっとママの事もフェイトの事も見てたんだ……………私のせいで壊れていくママや傷ついたフェイトを見るのは辛かったよ……………』

そう言いながら俯くアリシアだけど次の瞬間には笑顔で

『……………でもあなたのおかげでフェイトもママも笑顔を取り戻してくれた……………』

そう言った。

私もその事を言われて嬉しくなって笑顔になると



『もう………思い残す事はないや………』

アリシアはそう言ってキラキラと光りを放ち始めた。

「ッー!! 待ってー!! まだ………フェイトやプレシアとお話しないと………」

そんな私の言葉にアリシアは静かに首を振る。

『もうね………お迎えがすぐそこまで来てるんだ………』

そう言ってアリシアが指差す先には歪んだ鎌を持つ赤い髪の死神が近づいてくるのが分かった。

「スペルカード 禁忌 恋の迷路」

とりあえず私はなんとなくその死神にスペルカードを使ってみた。

「さうしてお迎えだよ………って弾幕！？あ！ちょ！やめ！」

ぴちゅーん！

「ふう………ん？どうしたのアリシア？」

アリシアはハトが豆鉄砲喰らったみたいにポカンとしていたが

『うつん………なんでもない………』

そう言っただけ何かを諦めたような表情をみせた。

~~~~~

「……………というわけでアリシアはここに居るんだけど……………」

と言うとみんなは私に暖かい目で見てくる。

『みんな信じてくれないね……………』

いいよアリシア……………分かった事だもん……………

「「フラン（ちゃん）……………ゴクリ」」

俯いた私を見て喉を鳴らす猛獣二人は放置して

「アリシアが教えてくれたんだよ！！プレシアが病気だって！！」

私が二人に信じてもらおうとそう言う

「ハアハア……………フエイト……………ああフエイト……………」

そう言いながら先ほど撮影していた映像を見ながら大量の忠誠心を流出させるプレシアの方を見て

「「確かに病気（だね）なの」」

二人はそう言った。

『……………ママ……………そっちに居るんだね？…今行くよ…』

あまりの惨状にアリシアが現実逃避し始めた。

「ア、アリシア！そっちには何も無いよ！！プレシアはあっち！」  
そう言ってアリシアを連れ戻そうとすると

『いや！離して！あんなの私のママじゃない！！』

そう言って暴れるアリシア。

「多分大丈夫だよ！！あれはアリシアのお母さんだよ！！」  
そう言って暴れるアリシアを押さえつける私。

「「カオス（だね）（なの）」」

そして時間だけが過ぎていった。

あの後なんとかアリシアを宥める事に成功した私はいつまでもアリシアを霊体のままにするのはいろんな意味で危険だと思ったのであるからジュエルシードを二つ借りて私の能力で歪みを破壊してその力を使った。

そしてアリシアの魂を再び肉体に定着させる事に成功し、ついでにアリシアの外見年齢を私達と同じくらいに調節した。

その時に

「アリシアああああああ！！」

そう叫びながら抱き付こうとしたプレシアにアリシアが綺麗ならりあつと？をかけたのはご愛嬌。

しばらくプレシアは泡を吹いていたけれどフェイトとアリシアが抱き合ってたらしいの間にか復活してカメラで撮影していた。

そしてプレシアの病気に關しては（けしてあつちではない）ジュエルシードで簡単に完治した。

そこまでやるとジュエルシードは一つが砕け散り、一つは罅が入る程度消費した。

罅の入ったジュエルシードはもう一度レイジングハートに格納してもらおうとなのはに渡すと何を血迷ったのかなのはが

「……………フランちゃんも私達と一緒に成長して欲しいの！」

なんて言った。

するとジュエルシードは強く輝いて砕け散り、私の中に入っていた。

「……………？」「……………」

なのは以外私も含めてなのはの行動の意味が分らず沈黙した。

しかしなのはは胸を張りながら

「これでフランちゃんも私達と一緒に進級出来るの！」

と言った。

そこで私はなのはが言いたい事を理解する事ができた。

なのはの言葉が少なくて理解しづらいが、つまりはこういう事であ

る。

私は伝説上の吸血鬼そのものだから不老不死で成長する事はない。

しかしなのははジュエルシードの力を使う事によって不老の部分によって阻害されている肉体的成長をなのは達と同じ分だけ成長するようにしたのである。

しかしなのはの言葉ではあまりにも不明瞭過ぎて恐らく成長するのは肉体だけには止まらないかもしれない。

それに気が付けた私は良く理解できたと自分を誉めても良いはずだ。プレシアも私が普通ではない事を感じているのかなのはの言った意味をある程度理解したようだ。

しかし私は嬉しい。

なのは達と一緒に学校に通い続けていられる機会を得る事が出来た。これからの生活はもっと楽しいものになっていくはずだ。

私はいまだに首を傾げているフェイトとアリシアに近寄り笑顔で

「そんな事で悩むより今から遊ぼうよ!!」

と言うと二人は笑顔で頷いてなのはも

「私も遊ぶの!!」

と言って入ってきた。

それを見ていたプレシアはまたカメラを構えて撮影を始める。

そして時の庭園には私達の笑い声が響いていた。

「ねえ……アルフは？」

「「「あ！」「」」

すっかりと忘れ去られていたアルフを救ったのは意外にもアリシアだった事を追記しておきます。





第17話

無印編（前書き）

中途半端

第17話 無印編

「今すぐ謝るんだ!!まだ間に合う!!」

そんな誰力の声が聞こえる。

でもワタシは赤ク染まってク視界ノセイでウマク理解デキナイ。

「何故謝るんだ?.....それにこちらの指示に従わないばかりかい  
きなり襲って来たんだ。公務執行妨害で君達を.....」

ナニヲ言つてルノ?

先二手を出シタノハそっちナノ二.....

こんな人二なノハやフェイトは怪我させられてアルフやハチは攻撃  
サレタの?

許セナイ…………許セナイ!!

ワタシノ大切ナ友達ヲ傷ダラケニシタ”コイツ”をワタシハ許サナイ!!

ダカラ…………

殺シテアゲル…………

~~~~~

（30分前）

「ハチ！なのは！フラン！あそこにジュエルシードが落ちてる」

そこは人気の無い倉庫だった。

テストロッサー一家を助けた私達はもはや不必要になったユーノの落とし物であるジュエルシードをフェイトから受け取り、町にまだ散らばったままのジュエルシードを回収する為に貴重な休日を潰してパトロールしていた。

するとまるであらかじめ用意してあったかのように落ちていたジュエルシードを見つけたのだ。

「案外あっさり見つかったの」

なのはは私の方を向いてそう言った。

「そうだね……………もしかしてなんかの罠かな?」

そう言って私は首を傾げる。

「わふ……………罠があるようには見えません……………」

周りを見渡しながらハチはそう言う。

「どちらにせよジュエルシードは回収しないと……………ん?」

話していたユーノが急に黙り込んだ。

「どうしたですかユーノ?」

ハチが同性の私達でも可愛らしく見える動作でユーノに聞く。

「…………フ……………何でも無いよハチ」

ユーノは何故かポーズを決めながらそう答える。

「……………ユーノ君……………流石にそれは無いの……………」

なのははそう言ってかなり引いてた。

確かにポーズを決めるフェレットを見るのはかなりシユールだ。

「とりあえずユーノの様子もおかしいしフェイトとアルフを応援に  
呼ばうよ……………ねえ、なのは?」

なのはまだユーノの奇行に引いててこつちに気が付いてくれない。  
なので仕方なく私はフェイトに連絡した。

（25分後）

「ごめんねフラン、遅くなっちゃって」

「……………またカオスだねえ……………」

私となのは二人が来てくれた事に本当に感謝していた。  
だって

「ハチ……………なんで君はこんなにも可愛らしいんだ……………」

映画に出てくる俳優のようなセリフと決めポーズをとるユーノ。

これを見ている私達はかなり引いてる。

「それは褒め過ぎですユーノ」

そんなユーノの褒め言葉に素直に喜ぶハチ。

多分それに込められた思いには気が付いていないだろう。

「……………段々イライラしてきたの……………」

そう言ってレイジングハートを構えるなのは。

「そうだね……………私もイライラしてきたよ……………」

そう言ってバルディツシュを構えるフェイト。

「え？」

「ちよっ！ジュエルシードが後ろに……………」

そんな間の抜けた声を出した私とアルフの焦る声を尻目に二人は砲撃体勢に入る。

「デイバイーン」

「サンダー」

二人はハチに当たらないように照準をユーノに合わせてチャージを



開始する。

「あああああああああ！フェイトおおおおお！！なのは  
あああああああ！！！」

アルフ絶叫

「……………はあ……………」

そんな二人を見ながら私はため息を吐いた。

また私の出番かな？なんて考えながらユーノの最後を見守る事にした。

そして

「バスター！！！」

「レイジ！！！」

二人の砲撃が放たれる瞬間。

ズガンー！！

二人のいた場所が突如爆発し、なのはとフェイトが吹き飛んで壁に叩きつけられた。

「え？」

私は驚いて吹き飛ばされた二人を見ると二人は重なり合うように倒れていて頭からは血を流していた、

「……………フェイト？……………なのは？」

私の隣にいたアルフはまるで壊れた玩具のようにノロノロした動きでなのはとフェイトの方を見る。

そして

「時空管理局だ！ここでの戦闘行為は危険だと判断した為、少々強引ではあったが強制的に中断させてもらった！！」

そんな高圧的な言葉と共に空から黒髪で黒い服を着た男の子が降りてきた。

「……………」

私はあまりの急展開についていけず呆然としていたが

「何にやってんだあんたはあああああああ！！」

アルフがその男の子に飛びかかった。

しかし男の子はアルフに杖を向けて魔力球を放った。

「アルフ！」

吹き飛ばされたアルフをハチが受け止めようとしたがその小さな体では支えきれずにアルフと一緒に壁に打ち付けられた。

「ふん……………正当防衛だ。僕は悪くない」

そう言つて男の子は冷めた目でアルフとハチを見ていた。

「……………あ……………ああ……………」

私はこの僅か数分の出来事を理解できなかった……………いや理解し  
たくなかった。

私の大切な友達のなのとはとフェイトそれにアルフ、そして私の使い  
魔であるハチが傷だらけで倒れて血を出している。

そんなの認めたくない。

確か魔導師の魔法は”ひさっしょうせつてい”のはずだから怪我を  
しているはずがない。

なんで？

なんでなのはとフェイト、それにアルフとハチは怪我してるの？

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでナンドでナンドでナンドでナンドでナンドで  
ナンドでナンドでナンドでナンドでナンドでナンドで  
ナンドでナンドでナンドでナンドでナンドでナンドで  
ナンドでナンドでナンドでナンドでナンドでナンドで

ナンドでなのは達八怪我してるノ？

「今すぐ謝るんだ！！まだ間に合う！！」

そんな誰力の声が聞こえる。

でもワタシは赤く染まってく視界ノせいでうまく理解デキナイ。

「何故謝るんだ？……………それにこちらの指示に従わないばかりかい  
きなり襲って来たんだ。公務執行妨害で君達を……………」

ナニヲ言ってるルノ？

先二手を出シタノハそっちナノ……………

こんな人二なノハやフェイトは怪我させられてアルフやハチは攻撃  
サレタの？

許セナイ……………許セナイ！！

ワタシノ大切ナ友達ヲ傷ダラケニシタ”コイツ”をワタシハ許サナ  
イ！！

ダカラ……………

殺シテアゲル……………

~~~~~

僕は焦っていた。

目の前で不意打ちとはいえないのはとフェイトが吹き飛ばされたのだ。  
しかもそれに怒ったアルフがああ管理局局員であると言った少年に

飛びかかって逆に弾き飛ばされてハチまでも巻き込んでしまった。

ハチを巻き込んだこの局員に怒りがこみ上げたが今はそれどころじゃない。

僕が焦る原因それは……

フランだ。

フランは精神的にまだまだ未発達なところがある為に暴走したら手が付けられない。



初めてフランと出会った時のあの暴走はレイジングハートの映像を通して見てもあの恐ろしさは伝わってきた。

（その時ユーノは気絶していた）

だからこそこでフランを暴走させてはならない。

そんな事をすればもしかするとフランが逮捕されて……………

……………ハチに会えなくなってしまうかもしれない。

それだけは絶っっっっっっっつ対に避けたい。

ハチは僕の心のオアシスだ！

つと話が逸れたがとにかくフランを暴走させない為に彼に謝らせてフランを宥めなくては！！

「今すぐ謝るんだ！！まだ間に合う！！」

僕は彼にそう言つと

「何故謝るんだ？……………それにこちらの指示に従わないばかりかい  
きなり襲つて来たんだ。公務執行妨害で君達を拘束する事ができる  
！」

彼はそう冷たく言い放った。

駄目だ！

僕は焦った。

今フランにそんな言葉を聞かせたら……………

「……………キャハ！」

そんな声が聞こえた。

その時僕は絶望感を覚えた。

間に合わなかった。

そんな言葉が僕の頭をよぎった。

振り返ってフランを見るとフランはあの狂った笑みを浮かべて彼の事を見ている。

彼は知らないとはいえ自ら死刑台に登ったのだ。

管理局とはいえあの高圧的な言い方や態度に僕も怒っている。

決して八手を巻き込んだから怒っているのではない。

僕は彼の説得を止める。

恐らく彼女を止める事は僕には無理だろう。

しかし”僕”が彼女を止める必要はない。

だったら彼女を止められる人達を起こせばいい。

僕は倒れたまま動かないのは達の下に走る。

彼がフランに殺されてしまう前に！



第18話 無印編

「禁忌『フォーオブアカインド』」

そんな声が不意に聞こえた。

ふとさっきまで僕と話していたフェレットが走り去るところから目を離すと先ほどまで呆然としていた金髪の少女が4人に増えていた。

しかもその背中には七色に光る宝石のような装飾品が付いた翼が生えており、その顔には狂気という言葉が似合う笑みを浮かべていた。

「……………て…抵抗すると言うならこちらでも攻撃する事になる！大人しくするんだ！」

少しでもってしまったが大丈夫。

僕は管理局の執務官だ。

いくら彼女が怒っていたとしても流石に公務執行妨害をすればただでは済まない事は分かるはず。

しかしその僕の考えを嘲笑うかのように彼女達は

「「「「  
.....キヤハ!」「」」

頬が裂けんばかりに口を歪ませて笑った。

そして

一斉に魔力球を放ってきた。

「な！」

僕は迫ってくる弾幕をギリギリで避けて難を逃れると

「スペルカード 禁忌『クランベリートラップ』」

「スペルカード 禁弾『スターボウブレイク』」

「スペルカード 禁忌『カゴメカゴメ』」

「スぺルカード 禁忌『恋の迷路』」

色とりどりの魔力球が壁のように僕に迫ってきた。

「く！」

僕はそれを空に飛び上がって避けると

「スぺルカード 禁弾『カタディオプトリック』」

「スぺルカード 禁弾『過去を刻む時計』」

上からも弾幕が降ってきた。

「うわぁ！」

何発かの魔力球が当たり爆発したがBJを身代わりにした為助だった。

しかしそのせいで身を守る物が一つも無い。



しかし凄まじい力だ。

あの魔力球の一つ一つには僕の全力で込めたくらいの魔力が詰まっ  
ていて、それに見合う威力を秘めている。

ランクをつけるならEXというのが彼女達にはふさわしいだろう。

背後にあった建物はすでに崩れ落ちてしまっておりその威力を物語  
っている。

恐らく次は無いだろう。

「……………」

嫌な汗が背中を伝う。

「……………クス、クスクスクス」

少女達の中の一人がいきなり笑い始めた。

「……………何がそんなにおかしいんだ！」

僕はその少女を睨みながらも残りの少女達を警戒しながらそう言う

「クスクスクス……………」

残りの少女達も笑い始めた。

「……………」

僕は居心地の悪さを感じながらも笑い続ける少女達から視線を外さないまま警戒を続ける。

何故彼女達が笑い続けているのか分からないが警戒するに越した事はない。

そう思いながら油断なく彼女達の間を窺った。

「……………ネエ」

不意に少女の一人に声をかけられた。

僕はその少女の方を見ると

「………殺シテアゲル！！」「」「」

少女達全員がそう言ってまた魔力球を放ってきた！

「な！」

それもさつきとは比べものにならない量の数だ！

迫ってくる魔力球を必死に避ける僕を見ながら少女達は笑う。

一発目がS2Uを持つ右腕に当たった。

「ぐあああああああ！！！」

右腕に激痛が走る。

そして肉の焼けるような匂いと大量の液体が地面に落ちる音がした。

視線を激痛のする方に向けると

肘から先の腕が消え去っていた。

「あああああああー！」

その事実を認識したときに次は左足に激痛が走る。

そして僕は何が起こったのか理解する間もなく地面に倒れた。

「うぐううううう………」

左足から伝わる痛みと右腕から伝わる痛みに気がおかしくなりそうになりながらも顔を上げて状況を確認すると………

魔力球の壁は無く

「……………ハハ」

目の前にあの少女がいた。

「……………あ……………ああ……………」

僕は口を開くが言葉にならない。

そのあまりの恐怖にもはや僕は管理局局員の執務官であるクロノ・ハラオウンではなく、ただ一人の子供としてのクロノ・ハラオウンになってしまっていた。

「……………ダメだよ？ ナノハタチハモットヒドイメニアッタんだカラ……………」

少女しゃがみ込んで僕の目を覗き込みながらそう言ってきた。

「ソウだよ？」

「ドウシヨウカナ？」

「ヤッパリアレカナ？」

周りを見ると残りの少女達が僕の周りを囲んでいた。

そしてそのうちの一人の言葉に僕は愕然とした。

「……………ソウダネ……………テカゲンシテタカウノハツマライモノ」

僕の頭の中は真っ白になった。

あれだけの威力と数の魔力球を放ちながらまだ全力ではないのだという。



真の絶望とはこの事なのだろうか？

彼女達はまた笑い出す。

「クスクスクス………」

「アハ アハハハハ………」

「キャハハハハハ………」

「ウフ ウフフフフ………」

その笑い声が僕らの精神を掻き乱す。

「うわあああああああ！！！」

怖い！

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い！

残った左手で頭を抱える。

そんな事をして助かるはずはないのに体が勝手に動く。

『待ってください！こちらの話を………』

モニターが現れて母さんが映り止めようとしてくれる。

しかし

「キュッとしてドカーン！」

そんな間の抜けた言葉によってモニターは破砕音とともに消え去っ

た。

「クスクスクス……ダメだよ？」

そう言ってまた彼女達は笑う。

「「「「.....アナタハワタシガ殺シテアゲルンダカラ!」」」」  
「

そう彼女達は高らかに宣言する。

「「「「禁忌『レーヴァテイン』」」」」

彼女達の手には紅蓮の炎に包まれた剣が現れる。

「「「死ンジャエ……………」」」」

そう言っ て彼女達は剣を僕に振り下ろした。

第19話

無印編（前書き）

中途半端です

第19話 無印編

「「「シンジャエ……………」」」

そんな言葉と共に振り下ろされる4本の紅蓮の剣。

最高潮まで達した恐怖のせいで僕はそれをただ震えて見ていることしかできなかった。

このままでは自分が死んでしまうのが明白なのに体が動かない。

少女達が剣を振り下ろす瞬間がスローモーションで見えた。

.....死にたくない

死にたくない！！

14年間しか生きていない自分にはまだやってみたい事も成し遂げたい事もたくさんある。

そう思うと涙が溢れてくる。



そんな風に願ったからだろうか？

気が付くと紅蓮の剣を持った少女達はその手を桜色と黄色のバインドで拘束されていた。

僕はその事を確認し、意識が薄れていくのを感じた。

安全である事を確認し、緊張状態が解除されたからだろうか？

助かった……

そう思ったのを最後に僕の意識はここで途切れた。

~~~~~

「…………フランちゃん…………」

「……………フラン……………」

「くっ！厄介だね…………」

ユーノ君が私達を起こしてくれた時には4人に増えたフランちゃんが黒髪の男の子にレーヴァティンを振り下ろそうとしていたところで、とっさに私とフェイトちゃんがバインドをフランちゃん達に使うことで阻止するができたの。

でも

「「「アハ「「「」

フランちゃんの狂気がそれで収まるはずもなく、今度は私達の方を見ているの……

「まずいね…… フランの狂気をなんとかしないと……」

アルフがそう言って私とフェイトちゃんを見る。

「……でも…… どうすればフランを止められるんだろう？」

フェイトちゃんがそう言って何か良い案がないか考え始めた。

とりあえず私はフェイトちゃん達が何か考えている間にフランちゃんがこの間に何かしてこないか見張っていると

「……………わふ！思い付いたのです！」

ハチが笑顔でそう言ってきた。

「ハチちゃん！どんなの思い付いたの！？」

私はハチちゃんに今の状況を打破できるのならと藁にも縋る気持ちで聞いてみると

「  
ますたーに”弾幕ごっこ”で勝負するのです!」

ハチちゃんがそう笑顔で答えるのを聞いて私は思わずディバインバスターを撃ちたくなっただのは秘密である。

隣を見るとフェイトちゃんとアルフも同じ事を考えていたようでフェイトちゃんはバルディッシュを持つ手が、アルフは握った拳がプルプルと震えていた。

そんな中で一人ユーノ君だけ

「流石ハチだよ！ナイスなアイデアだよ！！」

と言ってハチを褒めていた。

するとフェイトちゃんが

「じゃあユーノ？フランと弾幕ごっこしてきてね？」

背筋が凍りそうな優しい声でそう言った。

「僕！？無理だよ！！殺す気なの！？」

ユーノ君……ううん、色ボケたフェレットは即答したの。

「じゃあ言わない（でほしいの）（で）（でくれよ）！！」「」

全員からのツツコミにうなだれる色ボケ。

「駄目だったですか？」

涙目でそう言う八チに私は

「ううん、駄目なのはあそこの色ボケたフェレットなの」

笑顔でそう言ったら

「色ボケたフェレット……………」

なんだかorzのポーズをとってたの。

「……………アソンデクレルノ？」

色ボケたフェレットに気を取られていたら不意にそんな声が聞こえたの。



驚いて振り返ると4人のフランちゃんがいつの間にか一人になっていて、一枚のスペルカードを握っていた。

「「「.....オワタorz」」」

私とフェイトちゃん、アルフは同時にそう言ったの。

ハチちゃんは

「元気出すのですユーノ」

「ありがとう……………やっぱり君は僕のオアシスだよ!!」

色ボケたフェレットを慰めていました。

そんな事をしている間に

「…………ソレジャア弾幕ゴツコをハジメヨウ？」

そう言ってフランちゃんはスペルカードを掲げた。

「スぺルカード 秘弾『そして誰もいなくなるか?』」

その瞬間にフランちゃんがいなくなり、

大量の弾幕が私達を襲ってきた。

第20話 無印編

「スペルカード 秘弾『そして誰もいなくなるか?』」

フランちゃんが遂に8枚目のスペルカードを発動させてしまったの……

そのスペルカードは今までのスペルカードとは違ってどこか全体的に寂しく感じる雰囲気があって心が締め付けられるような気がしたの。

でもそう思ったのは一瞬の事で気が付くと私達の周りを囲むかのように大量の弾幕が迫ってきていた……

その結果……

全員で必死の気合い避け！！（笑）

[illegible][illegible]

「フエイトおおおおお！それやつちやダメえええええ  
！！ちょ！弾幕が！！うわあああああああああああ

あああああああああ！！！！」

「助けて欲しいのですユーノ！わふうふうふうふう  
うふうふうふうふうふうふうふうふうふうふう  
うふうふうふうふうふうふうふうふうふうふう  
うふうふうふうふうふうふうふうふうふうふう  
うふうふうふうふうふうふうふうふうふうふう」

「今行くよハチいいいいいいいいいいいいいい！つて僕だけな  
んか弾幕多いよ！？ちよ！やめ！アーーーーーッ！！」

ピチューン！！

「ユーノ!!! 死んじゃ駄目です!!! 目を覚ましてください!!!」

ハチちゃん は 迫り来る弾幕を避けながらユーノに呼び掛ける。

「ハチガクツ」

色ボケたフェレットは倒れたまま起き上がって来なかった。

「……ちよつとスカツとした（の）（ね）」

弾幕を避けながらハチ以外の全員が同時にそう言った。

ハチちゃんは泣きながら

「ユーノおおおおおお！せつかく……せつかく知り合いになれたのに……」

「グフウー！」

「……トドメを刺した（の）！？」

ユーノにトドメを刺したのだった。

「……うううううううう……ますたー……やり過ぎなのです……こうなったら……」

ハチちゃんは何やらポケットの中からカードを取り出した。

「あれは……スペルカード!?」

私達はハチちゃんがスペルカードを持っている事をまったく知らなかった。

そして



「ますたーには弾幕ごっこでは勝てないのは分かってるのです！！  
だから最初から行くです！！ラストスペル！ 禁断『戻りゆく世界』

┐

ハチちゃんがスペルカードを掲げて発動させる。

その瞬間

あれだけあつた弾幕が全て消え去り、崩れていたはずの建物が元に戻ったの！！

そしてあの最初に私達を攻撃した人の怪我が治ってフランちゃんが姿を現したの！

そして

「これで終わりです！！フル！バーストおおおおお！！」

ハチはフランちゃんを指差すとその指からスターライトプレイカー並みの赤色のレーザーがフランちゃんを飲み込んだ。

~~~~~

「……………まさかハチちゃんがスペルカードを使うなんて思わなかったの…………」

私は気絶したフランちゃんを介抱しながらハチちゃんを見る。

するとハチちゃんは

「わふ……言わなくてごめんなさいなのです……」

そう言つて落ち込んだの。

「にゃ！？違うよハチちゃん！私はそういう意味でいったんじゃないの！」

私は慌てて訂正するけどハチちゃんは落ち込んだままだったの。

「ハ、ハチ？ちょっと良いかな？さっきのスペルカードで建物とかあの管理局の人の怪我が治ったのはなんでなの？」

すかさずフェイトちゃんが話を変えてくれたの。

「わふ、そう言えば説明してなかったです！！」

ハチちゃんは慌てて私達に自分の使ったスペルカードの説明を始めた。

~~~~~

「つまりあのスペルカードはハチのレアスキルを使って作ったんだね？」

「わふ！そうなのです！！私の能力の”ありとあらゆる物を直す程度の能力”を使ってるのです！」

ハチちゃんはそう言ってフェイトちゃん、質問に答えたの。

ハチちゃんの説明を要約すればこういう事なの。

ハチちゃんにはレアスキルの”ありとあらゆる物を直す程度の能力”があり、あのスペルカードは相手の放つ弾幕……つまり魔力球を吸収してその魔力と同じ魔力で攻撃された物を全て直す事が出来るの。

しかもその過程で余った力を攻撃に転用出来るみたいで、さっきの最後の赤色のレーザーはフランちゃんの魔力を使った為に赤色だったという訳なの。

「なるほど、それであんなにすごい攻撃ができたんだね？」

「そうなのです！！」

ハチちゃんはフェイトちゃんの質問に答えて嬉しいようだったの。

『お話のところ悪いのだけど少しいいかしら?』

不意に何も無い空間に緑色の髪の女の人が映ったモニターがいきなり出てきたの。

「……………時空管理局」

フェイトちゃんは目を細めてその女の人を見ているの。

アルフも目尻を吊り上げて怒ってた。

「……………わふ……」

いつもは優しい笑顔を浮かべるハチちゃんですら怒りを露わにしている。

そういう私だって怒ってるの。

だって、あの黒髪の男の子が私達に攻撃しなければあんな事にはならなかったはずだもん。

『……………こちらの不手際については謝罪いたしますのでどうか話を聞かせていただきたいのでこちらの方まで来ていただいてもよろしいかしら?』

緑色の髪の女の人はそう言って私達に笑顔を見せる。

「なら私が行くわ」

「母さん!？」

不意に後ろから声をかけられて振り返るとプレシアさんがそこにいた。

「子供達をいきなり攻撃するような人達のところに親としては行かせたくはないもの」

そう言ってプレシアさんはモニターの女の人を見る。

『……………分かりました。では転送ポートでこちらまでおきりますので少々お待ちください』

そう言ってモニターは消えた。

その時プレシアさんは



すごく黒い笑顔を浮かべて

「……………ええ……………待ってるわ……………」

と言ってたの。



哀れユーノは愛しのハチのスペルカードの効果から何故か外されて  
しまつて黒こげの状態で見られた。

第21話 無印編（前書き）

プレシア無双だよ！

アンチ管理局注意！！

第21話 無印編

「こちらへどうぞ」

私プレスア・テストロッサは今、時空管理局の時空航行艦アースラの中にある艦長室へと局員に案内された所だ。

パシユ

「失礼するわ」

扉をくぐると品の欠片もない外人が勘違いして理解した日本の和室がそこにはあった。

そしてその奥に畳が引かれた場所があり、あの黒髪の子供の管理局員の母親であるという

この艦の艦長がいた。

「はい、どうぞ」

そう言っ て彼女は私に緑茶？を出す。

「……………」

私はそれを無言で受け取り口を付けるフリをした。

あんな風にフェイト達を傷つけるような真似のできる連中の事だからこのお茶にも何かの薬くらいは入っていてもおかしくはない。

「…………… それではまず先にお話の方を……………」

おもむろに口を開いて先に出てきたそんな言葉に私は怒りを通り返して呆れてしまった。

自分達に罪があるのに謝罪より先に話をしようとするなんて……………

「普通、謝罪の方が先ではないの？常識を疑うわね？」

つい私は皮肉を言ってしまった。

「も、申し訳ありません……………」

女性は恐縮しながら謝罪してきたが、それが私の怒りを再燃させる。

「呆れたものね？これが時空管理局って組織流の謝罪なのかしら？」

つい皮肉めいたことを言ってしまったが、後悔はしていない。

「……………」

女性は何も言わないが、握り締めた拳が震えているのを見ると……………  
……胸がスツとした。

だいたい時空管理局はいつもそうだ。

アリシアが一度死んだ時も私から研究していた新しいエネルギー発

生装置であるヒュドラを奪い、そしてそのヒュドラが安全管理を怠って事故を起こし、私からアリシアを奪ったのだ。

あの時も謝罪らしいものは一切無かったし、原因もあまり深くは調べてくれもしなかった。

思い出すだけでイライラしてくる。

「……………謝罪より先に話を進めようとして申し訳ありませんでした……………」

そう言っただけで彼女は頭を下げる。

「それで？あの子達にもちゃんと謝罪してくれるわよね？」

それを見た私はワザと高圧的にそう言う

「……………必ず謝罪させていただきます。」

感情を抑えた声で女性はそう言った。

謝罪の約束も取り付けたし”そろそろ始まるかしら？”

そんな事を考えつつ私は話を先に進めるように未だに感情を抑え続ける女性に促した。



~~~~~

「……………という訳でこの件に関しましてはこちらで預からせていただきます」

この女なにを言ってるのかしら？

そう思っても声に出さずに済んだ私は自分で自分を尊敬する。

要約すればこうである。

遅れてやって来た癖にこれからのジュエルシードの搜索は全て管理局の方ですからもう関わらなくてもいい、と言ってきたのだ。

だいたい遅れて来ていてそんな事を言われれば多分なのはさんやフランさん、それにハチちゃんも納得しないだろうし、自分から協力を申し出るだろう。

そうなれば万年人手不足の彼らの思惑通りとなってしまう。

フェイトやアリシアの友達である彼女達にそんな事をさせたくはない。

「ふざけないでほしいわね？」

気が付くとそう言っていた。

「はい？」

女性……リンディ・ハラウンは首を傾げていた。

理解できていないのかしら？

「ふざけた事を言わないで………と言ったのだけど聞こえなかったのかしら？」

私は怒りを隠そうとせずにそう言った。

だいたい今まで何もしてこなかった人達がそんな事を言える資格は無い。

あの色ボケ淫獣がこの世界にジュエルシードと共にやって来てどれだけの時間が経ったと思っているのだ！

まあそのおかげでなのはさんやフランさんがフェイトに出会い、私がフェイトを愛しく思う気持ちに気が付く事が出来たり、アリシア

を生き返らせる事が出来るきっかけにはなったのだけど……

しかしそれは個人的な事だ。

もしジュエルシードが暴走してその場に封印する者がおらず、そのまま次元震が起きたら彼らはどうしただろうか？

恐らくここは管理外世界だからそのまま秘匿されて誰も知らないままに事件を揉み消されるだろう。

それができるのが管理局という組織なのだ。

しかもここは管理外世界なのだから管理局の権限など無いに等しい。

それが分かっているはずなのに彼女は管理局で引き受けると言ったのだ。

横暴にもほどがある。

まさしくそれは昔の私にされたなと同じ………今までのなのはさん達の功績を横から掠め盗る行為に等しい。

私の怒りにまるで身に覚えがないかのような表情のリンディに今度は声を低くして話す。

「聞こえなかったのならもう一度言うけれど、ふざけるのはやめなさい。だいたい今まで放置してた癖に今になってこちらで引き受ける？馬鹿馬鹿しい！もしジュエルシードをなのはさん達が封印していかなかったらどうなっていたかと思っっているの？次元震が起きてこの世界は崩壊していたかもしれないのよ？それにあなた達がしよう

としているのはここまで頑張って集めたのはさん達の功績を横から掠め盗るような行為なのを自覚しているのかしら？どうせあなたの事だから賞状程度の物を渡して終わりにするつもりなのでしょうけどね」

一気にそこまで言うとしンディは慌てたように

「そ、それは違います！」

と反論しようとするが私は付け入る隙を与えない。

「どうせ卑怯なあなた達の事だからこの会話もどこかで録音しているでしょう？それにその壁の観測システムで私の事を調べてるみたいだけど？勝手に人の事を調べるなんて本当にいい趣味をしているわね？」

今度こそリンディは沈黙した。

私は軽く鼻で笑い、侮蔑の目で彼女を見ると

「……………ではお聞きしますがあね赤い服を着た七色の羽を持つ少女は何なのですか？あの子の力は明らかに生体ロストロギアとして指定しても良いものだと思いますが？」

リンディはそう言うてきた。

その瞬間私は

掛かった！

心の中でそうほくそ笑んだ。

「あの保有魔力の高さに加えて危険なレアスキルの保持、そして当

の本人は情緒不安定………あまりにも危険過ぎる存在だと思いがすが？」

リンディは少し持ち直したのか饒舌にそう言うてくる。

しかし

「どこにそんな証拠が？」

私は平然とそう言う。

「なっ！」

そんな私の態度にリンディは驚いていた。

それはそうだろう。

恐らくあの戦闘の映像記録などを撮っていた事をリンディが匂わせたのに、私が平然としているからだ。

そんなリンディの表情がおかしくて私は思わず笑ってしまった。

「くっ、証拠なら………エイミィ！」

リンディは私を睨みながら空間にモニターを出してオペレーターらしき少女を呼び出した。

「何ですか艦長？」

そのエイミィと呼ばれた少女は焦った様子のリンディを見て驚いたようだがしつかりと用件を聞いてくる。

「さっきの戦闘記録を出してちょうだい」

リンディは真剣なようにエイミィにそう指示を出す。

「分かりました。少し待ってください……………え？」

リンディの指示を受けてエイミィが記録を出そうとするが何やら様子がおかしい。

「エイミィ？どうしたの？」

リンディは様子がおかしいエイミィにそう問い掛けると

「艦長!!.....記録が.....記録がありません!!」

エイミィはモニターの向こう側でそう叫んでいた。

「なんですって!？」

リンディは驚愕の表情を浮かべる。

「フフ.....アツハハハハハハハハ!!」

私は笑いが止まらない。

「あなた!!...いったい何をしたの!？」



リンディは私にそう叫んでいるが私はただ笑い続ける。

「答えなさい!!」

リンディはそう言って詰め寄ってくる。

あまりにも必死なその様子を見た私は

「私は何もしていないわ。ただあなた達のその慌てる様子がおかし  
くてしょうがないのよ」

もちろん嘘だ。

私がしたこと……それは……

私がこの次元航行艦アースラに転送されると同時にアリシアをなのはさん達のところに来るようにしておき、”ある伝言”をフランさんに伝えるようにしておいたのだ。

その伝言とは……………

”管理局が持っているのはさんやフランさん、そしてハチちゃんやフェイト達の情報を全て破壊する事”

どうやらうまくいったようだ。

モニターの向こうからは混乱した様子が手に取るように分かる。

「まったく、管理局という組織は記録の管理すら出来ないのによくロストログアの封印や保管ができるわね？正直言って安心して任せられないわ」

私はリンディにそう言って軽蔑した視線を送る。

「……………あなたがやったのではないのですか!？」

リンディが私にそう言ってくるが私はわざとらしく知らないふりを決め込む。

「さあ？少なくとも私がやったという証拠は無いわ。勝手に決め付けなくてもいいわね？」

そう言うところリンディは不服そうな表情をしたが問い詰めるだけの証拠が無いのか大人しく引き下がる。

ここが落としどころだと感じた私は

「そんな風に不手際ばかり見せられては安心できないから」あなた達管理局が私達に協力してくれて、私達の事を調べず上にも報告しない”のならジュエルシードの搜索をしてあげてもいいわよ？」

こちらを睨むリンディに対してそう言った。

「なっ！いったい何を言っ………」

リンディは突然の私からの提案に驚いて反論をしようとするがそれをさせない。

「あら？不満なのかしら？あの黒髪の執務官……あれがこの艦の保有する最高戦力じゃないのかしら？恐らく万年人手不足の管理局

の事だからランクの高い魔導師は彼しかない……と私は推理するけれど何か間違っているかしら？」

ここまで言われたリンディは何も言えずに唇を噛み締める。

まさに詰んだという表現はこの為にあるのではないかという状況だ。

重苦しい空気が部屋を満たす。

リンディはとても悩んでいる様子だが答えはすでに出たも当然だ。

そして

「……………分かりました。そちらの条件を呑んだ上で協力させていただきます……………」

計画通り

そんな言葉が私の中で響いた。

「ええ、期待させてもらうわ」

そう言って私は部屋をあとにする。

フェイトやアリシアの為とはいえ危ない橋を渡ったものだ。

しかし後悔はしていない。

「……………帰ったらフェイトとアリシアは褒めてくれるかしら？…  
……………いいえ、絶対褒めてくれるわ！そして家族水入らずでお風呂に  
……………カメラの準備をしておかないとね」

帰った後の愛しの愛娘達の反応を楽しみにしつつ私はアースラの転送ポートに入る。

「……………そうだわ！なのはさんやフランさん達も誘わなきゃね  
そうすればフランさんの気を引こうとするフェイトの可愛い表情  
や仕種が……………ジュルリ」

最後の最後でまったく絞まらないプレシアだった。



番外編  
1

幻想郷

それは外界から隔絶され忘れられた土地

しかしその本質は全てを受け入れ容認するといつこの世の最後の楽園

だがそれを以上に美しくも残酷な世界でもある。

この世界には忘れられる事によって消え去る運命にあった”ものが集まり共存しているのだ。

幻想郷はその忘れられた”ものをえり好みせずに全て受け入れる。

それがどんなに危険な存在であつたとしても……………

この幻想郷には人々から忘れられた”妖怪”と呼ばれる存在と人、そして神と呼ばれる存在が共存している。

しかも”弾幕ごっこ”と呼ばれている決闘によって勝負を行い、敗者は勝者の言うことを聞かなければならないというルールの下、治安が守られている。

そんな美しくも残酷な弱肉強食の世界の中で一際異彩を放つ建物がある。

その建物の名前は”紅魔館” かつて館の主が異変を起こし、異変解決に乗り出した幻想郷の異変解決のプロフェッショナルたる博麗の巫女と魔法の森に住む自称 普通の魔法使いが共闘し、激しい戦闘が行われた場所でもある。

その紅魔館で今、幻想郷の有力者とも言えるそうそうたるメンバーが集まり会議を始める。

それは紅魔館で起きた新たな異変を解決するための会議

この会議に参加するメンバーは

博麗の巫女

博麗 霊夢

自称 普通の魔法使い

霧雨 魔理沙

通称 歩く図書館

パチュリー・ノーレッジ

その使い魔

小悪魔

白玉楼の主であり冥界の管理人

西行寺 幽々子

白玉楼の庭師兼従者

魂魄 妖夢

幻想郷の管理者 妖怪の賢者

八雲 紫

その式

八雲 藍

完全で瀟洒な紅魔館のメイド長

十六夜 咲夜

そしてこの会議を召集した紅魔館の主

永遠幼い紅い月

レミリア・スカーレット

今ここに幻想郷史上初めて前代未聞の大事件を解決するための会議が始まった。

~~~~~

「……………今回皆さんを呼んだのは他でもない、この幻想郷始まって以来の重大事件を解決する為です」

食堂の椅子に座るメンバーを見渡しながらそう言うのは紅魔館の主たるレミリア・スカーレット

「いったいどうしたのよ？私だって暇じゃないのよ？手短かに説明してちょうだい」

そう言うのは博麗の巫女 博麗 霊夢

「そうだぜ！いきなり呼ばれて来たから洗濯物干したままだぜ？」

自称 普通の魔法使いの霧雨 魔理沙もそう言ってレミリアを見る。

「二人とも黙って話を聞きなさい。これは本当に幻想郷始まって以来の重大事件なのだから」

妖怪の賢者 八雲 紫はいつもの怪しい笑みを浮かべる事なく真剣な表情で二人を注意する。

「……………珍しいわね、紫がそこまで言うなんて」

おっとりとした口調で驚いた様子の白玉楼の主 西行寺 幽々子

「それだけ重要な話なのよ」

いつもならどんな時でも本を読んでいるはずの歩く図書館 パチュ  
リー・ノーレッジ

は本を閉じて真剣な様子で霊夢と魔理沙を見ている。

「悪かったわ……で？その重要な話ってなんなの？」

肩をすくめて霊夢が謝罪して話を先へと促した。

魔理沙もため息を吐きながら話を聞こうとする。

それを見たレミリアが話し始める。

「……………手短かに話させてもらつと……………フランがさ  
らわれたわ」

その瞬間霊夢をはじめとした紫を除く内容を知っているメンバー以  
外の表情が変わった。

そんな驚愕の表情を浮かべるメンバーに紫がさらなる爆弾を投下す  
る。



「犯人はすでに分かっているわ……犯人は

” 時空管理局 ” と呼ばれる外界とはまた違う世界の組織よ」

この幻想郷で行われる会議が後々に起きる事件に重要な役割を担う  
事になるとはまだこの時は誰も知る事はなかった……………

第22話 無印編

今現在私達がいるのは時の庭園で管理局局員の三人と顔合わせをしている。

「……………という訳で協力させていただきます。管理局時空航行艦の艦長 リンディ・ハラウンです」

「執務官のクロノ・ハラウンだ」

「オペレーターのエイミィ・リエッタです!」

「「「よろしくお願いします」」」

そう言つて頭を下げる管理局局員三人

「「……………よろしくお願いします」」

それに対してなのはとフェイトはどこかきこちなく挨拶を返す。

「よろしくね」

私は特に何もなかったので普通にそう言つと

「わふ！よろしく願いしますのです！」

ハチも元気よく挨拶を返した。

「ああ…ハチ！挨拶する姿も可愛いよ！……………ん？管理局？ああ、よろしく。ああ…ハチ、君は…（以下略）」

色ボケはいつも通り、アルフは

「グルルルルル！今度フェイトになんかしたらガブツといくからね！！」

三人を警戒してた。

「管理局か……………正直あんまりいい思い出ないなあ……………」

そう呟くのはアリシア

「じゃあ潰しましょう 愛しい愛娘の為ならなんでもできるわ！！」

さらっと問題発言をするプレシアはすでにモニターを呼び出して操作を始めている。

「「「ちょ！？」」「」」

管理局組の三人は慌てているけどいつもの事だから誰もプレシアを止めようとはしない。

その間にもプレシアは

「くくく……核に水素爆弾……どっちがいいかしら？本当にこの世界の質量兵器は最高だわ……アッハハハハハハハハハハ！

すごい楽しそうに目を輝かせていた。

[illegible]

管理局組絕叫

「……………母さん！母さんには犯罪者になんてなってほしくないよ！」  
フェイトが涙目でそう言つと

「分かったわフェイト！…ああ……………なんて優しい子なの……………こんな羽虫以下の連中相手に犯罪を犯す必要はないわ！…」

プレシアはそう言つてモニターを消した。

「……………は、羽虫以下……………」

三人はorzのポーズをとつてた。

なんでだろう？

……………

あのカオスの後ちようどおやつの時間になつたのでみんなでショートケーキを食べてる。



「はむはむ、このケーキ美味しいの！！まるでお母さんが作ったケーキみたいなの！！」

なのははそう言ってケーキを食べる。

「本当だ……美味しい……」

フェイトは上品にケーキを口に運びながらそう言っていた。

「すごい美味しいよママ！！」

アリシアは少し早食い気味に食べる。

「こんなに甘いケーキを食ったのは初めてだよ！！」

アルフはケーキを一口で食べたあとそう言ってた。

「あれ？僕の分は？」

色ボケはそう言ってキョロキョロしている。

「あら？本当に美味しいわ！」

リンディは素直に驚き

「美味しい〜 あ！クロノ君の苺もーらい」

エイミィはあまりの美味しさからクロノから苺を強奪した。

「ちょー！エイミー！その母は最後に食べる為にとっておいたんだぞ！……はあ」

クロノはエイミーに怒っていたが諦めてため息を吐く。

「ふふふ 気に入ってもらえたみたいね？」

プレシアはそう言って微笑む。

そんなどこかゆったりとした時間が流れる中、ハチの一言が騒ぎを巻き起こす。

「わふゝ、流石はますたーが作ったケーキなのです！」

「「「「「「え！？」「」「」「」」

「……………僕の分が無い」

驚く七人の反応を見た私は嬉しくなつて

「えへへ」

そう言つて笑つた。

「フランちゃんいつの間にそんな事できるようになつたの？」

なのはは驚いた様子で私にそう言ってくる。

「フランが料理できるなんて知らなかったよ……」

フェイトも目を丸くして私を見ている。

「えへへ 実はね？なのは達が塾に行つてる間に桃子にお願いしてお料理の勉強してたんだ」

私は胸を張つてなのは達にそう言つと

「ますたーはなのは達に美味しいって言ってもらえるように頑張ってたのです!」

ハチが言ってほしくない事をなのは達にバラした。

「ハチい……言っちゃダメだよ…… / / /」

私は恥ずかしくなってそう言ったら

「「「全然恥ずかしい事じゃない(の)(よ)!!」」「」」

なのは達は笑顔で私にそう言ってくれた。

「あうううううう……恥ずかしいよ…… / / /」

私は顔を真っ赤にしながら体を縮こませた。

~~~~~

少し離れたところでその微笑ましい光景を見ていた私　リンディ・ハラオウンは何故あのプレシア・テスタロッサがあそこまで強引に取引を進めていた理由を知る事ができた。

子を持つ親なら誰だってこの光景を見たら守りたくなるはずだ。

隣で穏やかに微笑むプレシアを見ながら私は心の中で負けを認めた。だってあんなに楽しそうにしているあの子達を引き裂くようなマネは私には出来ない。

隣でケーキを食べるエイミィもあの子達がやっている微笑ましい行動に目が釘付けた。

クロノは……ん？あのフランと呼ばれてる子を見てるわね……少し熱っぽい感じが……まさかとは思うけどクロノはああいう子が好きなのかしら？確かに可愛くて優しくて頑張り屋な子だし料理もできる……考えてみればかなりの優良物件ね……

まあ……クロノの恋路を邪魔する気はないわ……からかいはするけどね

ふふ　これから短い間になるとは思うけどこれなら大丈夫ね……

出会いは最悪だったがこれからの関係を良くしていけばいい  
そう思いながら私はケーキを食べる。

本当に美味しいわね……………クロノのお嫁さんに来てくれないかしら？

そんな平和な時間がゆっくりと流れていく幸せな時だった。

## 第23話 無印編

「「ジュエルシード！封印！！」」

高らかに響くそんなのはとフェイト声

桜色と黄色の閃光が辺りを包み込む。

その光景を時の庭園で私はモニターを通しに厨房でお菓子を作りながら見ていた。

「わふ！やっぱりなのはとフェイトはすごいのです！」

ハチは私の隣でモニターを見ながら私の手伝いをしている。

「そつだね……………うううううう…私も行きたいのになあ……………」

お菓子を作る手を止めることなく私がそう言うと

「わふ！ダメなのです！ますたーは最後の切り札だから戦っちゃダメなのです！プレシアが言ってたです、

”もし管理局が敵対してきた時に多分真っ先に狙われるのはますたーだから力を温存しておいてほしい”って」

ハチはそう言って怒った。

そう、今私が戦っていないのはプレシアからの指示があったからなのだ。

本当はなのは達とジュエルシードを集めたいのだけど、どうもプレシアは管理局が信用ならぬらしい。

それにあのクロノ？だったっけ？

あの人がやたらと私に話かけてきた。

その時にしきりに自分の部屋に誘ってきたのを覚えてる。

しかもそれと一緒にリンディ？で良かったよね？が話に加わって将来の夢とか料理のレパートリーとか聞いてくるのだ。

その目がなにか調べているような感じで、少し居心地が悪く感じたし、なんか獲物を狩る狩人の目だった。

まあそれに気が付いてくれたプレシアが間に入ってくれたんだけど

.....

その時にプレシアが



「フランさんはフェイトのお嫁さんよ!!」

なんて言っただから”しゅらば”で良かったよね?っていうのにな  
っちゃって何を思ったのかなのはが

「フランちゃんはお嫁さんなの!!たとえフェイトちゃんやク  
ロノ君には渡さない!!デイベインバスター!!」

ドン!

そう言って砲撃を始めたのがきっかけで第一回フランドール争奪戦

が始まった。

結果はみんなが疲れて動けなくなっているところに私の”ひさつしようせつてい”で放ったスターボウブレイクで撃墜して私の一人勝ちだった。

それを見たプレシアとアリシアとリンディ、それにエイミイがため息を吐いてハチは

「わふ！流石ますたーなのです！」

と言って喜んでた。

なんでプレシア達はため息を吐いてたんだろ？

そんな謎が深まる一日だった。

「これでよしと……ハチ！そっちはどう？」

私はクッキーをオーブンに入れて焼きはじめながらハチを呼ぶと

「ばっちりなのですよましたー！」

そう言ってハチは紅茶の入ったポットを持ちあげる。

それな後はクッキーが焼き上がるのを待つだけだ。

私とハチはプレシアから指示があつてからずっとなのは達が帰って来るのに合わせてお菓子を作っている。

それは一緒に搜索に行けない私からのほんの少しのお手伝い。

疲れているのは達の癒しになればという気持ち

いつも頑張っているのは達への感謝の気持ち

その二つの気持ちを込めてお菓子を作る。

チーン！

どうやらクッキーが焼けたみたいだ。

「戻りましたー！」

「ただいま母さん！アリシア！」

なのは達も戻ってきたみたいだ。

「行こうかハチ」

「はいなのですますたー！」

私達は二人を迎えに行く。

できるだけ暖かく迎えに行くのだ。

こんな楽しい日々が毎日続くように祈って

## 番外編 2

「なんでそんな大事なことを今まで黙っていたのよ！」

霊夢はそう言って椅子から立ち上がる。

「そうだぜ！もっと早く私達を呼べばそんな連中に連れ去られたフランをもっと早くに助け出せたはずだぜ！？」

魔理沙もそう言ってレミリアを睨む。

「だいたい紫！あんたこの幻想郷の管理者なんでしょ！？何得体のしれない連中に侵入を許してるのよ！……確かに幻想郷は来るものを拒まずに受け入れる世界だけど、幻想郷の存在を脅かすような存在は管理者であるあんたが排除しなきゃいけないでしょう！？」

霊夢は紫を睨みながらそう問い詰める。

しかし紫は小さなため息を吐いて

「……………そうね……………確かに侵入を探知したわ……………でもまさか

直接フランドールの部屋に侵入して来るとは思わなかったわ」

そう言った。

それを聞いた霊夢や魔理沙は何も言えなくなる。

それもそのはず、フランの部屋に直接侵入するなどフランの事を知る者ならそれ自体が自殺行為と同じ事なので普通なら侵入されても気にも止めないだろう。

しかし、今回はそれが裏目に出てしまったらしい。

現にフランは連れ去られてしまったのだ。

それからフランが連れ去られた話を詳しく紅魔館組から聞いてみる  
ところである。

いつも通りにメイドとしての職務を全うしていた咲夜は紅魔館に侵入してくる存在を感知してその事を主であるレミリアに報告、しかしレミリアは侵入された場所がフランの部屋であつた為すぐに鎮圧されるだろうと考えて無干渉を咲夜に命じた。

それからしばらくしてまだ侵入者の存在をフランの部屋から感じた為、不審に思った咲夜はフランドールの部屋に行くとそこには光の輪に体を縛られてもがくフランの姿と不思議な格好をした侵入者達四名があり、それを見た咲夜は咄嗟にナイフで侵入者二名を仕留めたものの能力を使う前に残りの二人によってフランを連れ去られ



てしまった……………というのが詳しく聞いた事件の概要である。

「……………私が知っているのはここまでよ」

そう言ってレミリアは話し続けて喉が渴いたのか紅茶を飲む。

「……………完全にフランを一人にしていたのが裏目に出てるわね……………」

霊夢は齒噛みしなから俯く。

「……………フラン……………」

魔理沙もいつもの元気は無く顔を俯かせる。

部屋の中に気まずい空気が包む。

「……………ちょっと待ってもらっていいかしら？」

おっとりとした口調で沈黙を破ったのは幽々子だ。

「何かしら？」

レミリアは紅茶を飲むのをやめて幽々子を見る。

「……………さっきの話を聞いてて思ったのだけど……………その”時空管理局”という組織の犯行だと何故分かったのか聞かせていただいて

もよろしいかしら？」

そう言って幽々子はレミリアを見る。

確かにそうである。

確かにそのフランを連れ去った不審者達が時空管理局の者であるという証拠が話の中でまったく出てきていない。

それなのに犯人は時空管理局であると八雲 紫が断言しているのだ。

これは明らかにおかしい。

その事がはつきりしなければもしかすると紅魔館組と八雲 紫が仕掛けたたち悪いイタスラの可能性を考えてられるのだ。

「紫達を疑う訳では無いのだけど証拠が無ければ信じる事ができないわ」

幽々子はそう言っ扇子で顔を半分隠して紫を見る。

しかしその目はまるで見る相手を射抜くような視線を向けている。

「……………証拠ならこちらにございます」

痛いくらいの沈黙の中、澄んだ声が部屋に響いた。

どうやら声の主は紫の後ろにいるらしい。

ゆっくりとこちらに近づいて来る足音が響く。

蝋燭の明かりに照らされて見える声の主は茶色の髪の上に小さくて尖った三角の耳がありとても美しい20代くらいの女性だった。

紫が怪しく微笑むと

「……………遅いわよ……………みんなに疑われちゃったじゃないの

”リニス”  
「

その女性をそう呼んだ。

第24話 無印編

それは管理局がこの世界に来てしばらくした時の事だった。

きっかけは

「……………という訳でプールに行きましょう」

というプレシアの言葉からだった。

「「「「え?」「」「」」

「わふ?」

私達は訳が分からずに首を傾げているとプレシアが説明してくれた。

なんでも最近ジュエルシードの探索をずっと行ってきた私達のご褒

美に明日一日管理局が探索を引き継ぐのでその間を休みにするとい  
うものだった。

「それでなんでプールなの？」

私は疑問に思いプレシアに理由を聞くと

「それはもちろんフェイトとアリシアのかわいい水着姿を写真に収  
める為に……！」

そう言ってプレシアはどこからかカメラを取り出す。

親バカ降臨

そんな考えが全員の頭を過ぎる……………



「.....ん？アースラのメールだね.....なにになに.....」  
誠に残念な事ですがジュエルシード探索を一日引き受け

るにあたり現在状況等が知りたいのでプレシア女史とユーノ・スクライアの二名に明日一日の協力をお願いしたい”だってさプレシア、色ボケ」

アルフが通信用のモニターにあったメールを読み上げる。

「却下の方で」

笑顔でプレシア即答

「僕もきよ……………」

「そう！スクライア君が私の代わりに行ってくれるのね？ありがとう  
う それじゃあアースラにいつてらっしゃい」

哀れユーノは声を遮られてプレシアの転移魔法で無理矢理アースラへと送られてしまった。

「……………」

「頑張れなのですユーノ！」

急な展開にア然とする私達をよそに一人八チだけはユーノに対して

エールを送っていた。

~~~~~

「……………ユーノの犠牲は無駄にはしないのです！」

「まだ死んでないよハチ……………」

私は遠い目をするハチにツツコミつつ自分の着る水着を選ぶ。

現在私はなのは達とデパートで明日着る水着を選んでいる。

何故なら”すくーる水着”しか持っていない私はプールにもそれで行こうと考えていたのだが……………

「それじゃ駄目なのフランちゃん！フランちゃんはもっと可愛い水着を着るの！」

となのはからの強い要望があつた為に新しい水着を買う事になったのだ。

別に”すくーる水着”でもいいのに………

ちなみに桃子からお金をもらったのだけと後ろで士郎が

「……………お小遣いが……………」

って言つてorz こんなポーズを取つてたのも追記しておくね？

「わふ？ますたー？どうしたですか？」

いつの間にか水着を選ぶ手が止まっていたようだ。

ハチが私の顔を覗き込んでいる。

「うっん、なんでもないよハチ」

私はそう言つて水着を選ぶ。

ハチの水着はすでに購入し終えている。

全体に茶色の子犬の絵がプリントされているすくーる水着みたいな水着でハチらしくてかなり似合っている。

プレシアに見せたら

「……………あの色ボケをアースラに送っておいて良かったわ……………」

「って言うくらいに」そっち方面」の人に人気者になれるらしい。

”そっち方面”ってなんだろう？

なのはは真っ白な百合がプリントされた水着でフェイトは黒いビキニ？だったよね？

アリシアは普通に黄色の水着でアルフはオレンジ色のちょっと布の少ない水着

プレシアは……………

かなり布の部分が少ない紫色の水着。

うん、最後のは無かった事にしよう。

そうした方がなんか良いと思う。

みんなの選んだ水着を思い出して自分の水着選びの参考にしようと思ったのだけど全然良いのが見つからない。

「……………やっぱりすくーる水着で良いかも……………」

そんな考えが私の頭を過ぎる。

だいたい良さそうな水着を見つけても………



きついのだ……………胸が

多分前になのはがジュエルシードを使って私の成長を願ってからと  
いうもの、少しずつだが胸が少しずつ大きくなってきているのだ。

身長の方はあんまし伸びないのに……………

成長するのは嬉しいのだけど着れる水着が無いのは嬉しくない。

「はぁ……………どうしよう……………」

気分が落ち込みながらも着れそうな水着を捜す。

「やっぱり無いなぁ……………」

みんな決まっているのに私だけ決まっていな。

そろそろ家に帰る時間が迫っている。

「う〜〜〜」

だんだん焦ってきた。

そんな時だった。

「……………ん？これって……………」

私はそれを見た瞬間一目で気に入った。

「サイズもピッタリだ……………よし！」

私はそれをレジに持って行き誰にも見られないうちに買った。

少し背伸びした水着なのだが大丈夫だろう。

みんなの驚く顔が目に見えかぶ。

「えへへ」

私は上機嫌でみんなの所に向かう。

明日が楽しみだ！



第25話 無印編

「……………ついに……………ついに来たわ」

プレシアは歡喜に震えていた。

その視線の先には水着を着て水と戯れる愛娘達

「……………最高だわ……………失われた都アルハザードはここにあったのね……………」

感極まったプレシアは鼻からは赤い忠誠心が蛇口を捻って出した水の如く流れ出ていた。

「…………だからってプレシア…………貧血で倒れる事はないじゃないか…………」

ため息を吐きながら横で頭に白いタオルを被せながら気絶しているプレシアにアルフはそう言った。

タオルをめくるとそこには幸せそうな表情のまま気絶したプレシアの顔がある。

「…………やれやれだね…………」

肩を竦めながらアルフはプールで遊んでいるなのは達を見る。

なのはとフェイト、それにアリシアとハチが楽しそうに泳いでいる。

その中にフランの姿は無い。

「……………しかしまあ遅いねえフランは……………かなり気合いが入ってみたいんだけど……………」

そう、フランはみんなをびくりさせると言ってなのは達に先に行くように言ったのだ。

もしかすると威勢良く言った為に逆に出不くくなっているのかもしれない。

「……………少し様子を見に行くかね……………」

アルフは少し苦笑しながら更衣室に行こうとした時だった。

「……………ん？なんか騒がしいね？」

どうも更衣室の入口辺りが騒がしい。

耳を澄ませるとその声のほとんどが男の声だ。

「いったいなんの騒ぎだい？……………なんか嫌な予感がするのなんでかねえ……………」

アルフはそう言いながら騒ぎの中心へと向かう。

そこには……………



美少女がいた。

その髪はまるで輝く黄金のような金髪でアクセサリー類は何も付けずにストレート

その肢体を覆う水着は真つ赤な薔薇を思わせるような真紅のビキニ若干膨らんだ成長中の胸を水着のデザイン的に強調しているのだが着ている本人の雰囲気によってまったくもっていやらしくない。

逆に本人の活発な様子が見てとれる。

しかしそれが逆にスポーツをしている女の子のような爽やかな色気を醸し出している。

顔も可愛いくてその紅い瞳はまるでルビーの最高峰のピジョンブラッドのように美しい。

それでいて若干内股気味でしかも少し頬を赤く染め俯いているのだ。

多分彼女が本気になったら男に不自由しないだろう。

そんな少女が現れたのだから男達が黙っている訳がない。

先程からアルフが見ているだけでも7、8人の男が少女にナンパしている。

中にはお前年考えんかい！とツツコミたくなるような年齢の男ですら声をかけている。

まるで魅了<sup>チャーム</sup>の魔法に掛かったかのようなうた。

そんな中少女がアルフを見た。

その顔には助けると言っているのが読み取れる。

アルフはどうしてこんな事になったのか考えてため息を吐きつつその少女……………フランを助けるべく歩き出すのだった。

~~~~~

「……………助かったよアルフ」

私は助けてくれたアルフにお礼を言いながらジュースを飲む。

「それにしてもしつこい連中だったねえ……………あゝゆづのを口リ  
コンっていうのかねえ……………」

アルフは辺りを警戒しつつ買ってきたヤキソバを食べている。

時刻はちょうど1時を過ぎたくらいだ。

なのは達はお昼を済ませたらまた泳ぎ始めた。

なんだか置いてけぼりみたいで寂しいがしかたがない。

私が泳ぐと水の中から私を眺めてくる人がいたり一人になると声を  
かけてくる男の人が大勢いるのだ。

それだけならまだなんとか我慢できるのだけどなんかハアハア言いながら柱の陰とかから見つめる人とかがいるから一人じゃ怖くて行動できないのだ。

「はぁ……………せっかくプールに来たのに泳げないなんて……………やっぱり”すくーる水着”で来たほうが良かったかなぁ……………」

そんな呟きをぽつりと漏らすと

「何言ってるんだい……………そんな格好してたら多分逆に人が寄ってくるに決まってるよ……………あのハアハア言ってる連中がね……………」

アルフはそう言って肩を竦める。

それは嫌だ。

ただでさえ今の状況が嫌なのにそんなの耐えられない。

あのハアハア言っている人達の中には

「……………ロリ巨乳になるね……………ハアハアハア！」

とか

「……………お兄ちゃんとイイ事しよう……………お小遣いあげるよ？気持ち良いよ？」

なんて言う人達がいたけどアルフがプールのスタッフを呼んで退場

させている。

本当に助かったよ……………

そんな異常事態に唯一の大人であるプレシアは気絶してて役に立たない。

頼みの綱はアルフだけだ。

そんな感じで貴重な丸一日の休みを私はプールサイドで過ごす事になった。

~~~~~

「お疲れ様なのですますたー！」

そんな劳いの言葉が八チからかけられた。

「……………なんかつまらなかったよ……………」

私は肩を落としてため息を吐いた。

「にやはは……………災難だったねフランちゃん」

なのはは苦笑いをしながらそう言うてくる。

「それにしても母さんはなんでずっと寝てたの？」

フェイトはプレシアに不思議そうに問い掛ける。

「そうだよママ！フランが大変な時にずっと寝てるなんて！」

アリシアはプレシアに対して怒るようにそう言うつと

「……………一枚も撮れなかった……………写真なら……………」

プレシアは真っ白に燃え尽きてしまっていた。

「はぁ……………しっかりしなよプレシア！まったく……………写真なら一枚だけでも撮っておいたからそんなに落ち込む事ないよ」

アルフはそう言ってプレシアを慰める。

「それは本当なのアルフ！？」

それを聞いたプレシアの立ち直りは早かった。

その様子にアルフはドン引きしているがプレシアには関係ないよう

だ。

「……………それじゃあここで別れだね」

なのはフェイト達にそう言つと

「うん、それじゃまた明日」

「バイバイ」

「どうなのアルフ！？答えないと今晚の食事は無くなるわよ！」

「ってプレシア！そりゃないよお！ちゃんとあるからそれだけは勘弁してくれよお！」

フェイトとアリシアからは別れの挨拶が返ってきて……………プレシアとアルフはまだ続けていた。

「それじゃあまたね」

「また明日なのです！」

私とハチも挨拶を返した。

実はフェイト達はなのは家の近くに家を買っているので時の庭園に戻る事は無い。

しかも桃子さんからの勧めでフェイト達を私やなのはと同じ学校に入学出来るように手配しているらしい。

最近士郎が目の下に大きなクマを作っている事も追記しておくね

そして私達は家に入って

「「「ただいま（なのです）！」「」」

と家で待っていた家族にそう言うのだった。



「ただいま〜！今戻ったよ〜！………ハチ〜？みんな？  
帰ってきたよ〜！………みんなどこ行ったのかな………」

一日仕事を終えたユーノは帰ってきた………

時の庭園に

もちろん全員海鳴市にいたので答える人はいない。

そうとは知らないユーノは次の日時の庭園に来たプレシア達に見つかるまで時の庭園の中でフラン達を探していたのだという……………



第26話 無印編

「へーそんな事があつたんやねえ…………それはフランちゃんも災難やわ」

はやてはそう言つて笑う。

「笑い事じゃないよはやて……………すごく辛かつたんだからね？」  
そう言つて私ははやてを睨む。

「あはははは！！ごめんなフランちゃん」

はやては笑いながらもちゃんと謝ってくれたので私は許してあげる事にした。

今私がいるのは市立図書館で前にここで友達になつた車椅子に乗る足が不自由な女の子の八神 はやてと先日プールでの出来事を話している。

最初に出会つた時ははやてが

「ほえ……………外人さんや……………えと……………えくすきゅーずみー？」

慣れない英語で私に話掛けてきた事が一番記憶に残っている。

私は笑いながらも

「日本語で大丈夫だよ？」

と言ったら

「ほえ？え？……日本語喋れんの？」

はやてがすごく慌ててたのがすごく面白かったのは私だけの秘密。

それから二人で話をして仲良くなったのだ。

「フランちゃん、今から私の家に行かんへん？また新しいゲーム買ったんやで！」

はやては笑顔でそう言って私を見る。

私は今日がなのはの塾の日であり、フェイト達も用事がある為にいないのでジュエルシード集めをしない日である事を思い出し

「いいよ それじゃあはやての家に行こう!」

そう答えてはやての車椅子を押した。

「フランちゃんには負けへんよ」

はやてはそう言って力こぶを作る。

「あはは それじゃあ勝負だよはやて?」

私も車椅子にはやてを覗き込みそう言う。

私達は互いに笑い合いながらはやての家に歩いて行った。

~~~~~

「んなあああああ！！なんでそんなに強いん！？一回も勝てなんてどんなチートや！？」

はやては頭を掻きむしりながら悶える。

「えへへ また勝っちゃった」

私は得意げに勝利のVサインをはやてに向かって決める。

今はやてと一緒にやっているゲームは『東〇〇想天』だ。

ちなみに私の使うキャラは『弹幕はパワーDAZE！！』なんて言っている白黒の魔女っ娘で、なんか極太レーザーがなのはの攻撃に似てたから使ってる。

……………なのはに言ったら怒られそうだからなのはには黙っておこう。

「なんで勝てんのや……………それならこのキャラで勝負や！！」

はやてはそう言って脇の大きく開いた紅白の巫女を選択する。

「今度こそ勝つでえええええええ！！」

はやてはそう言ってコントローラを握り締める。

「あはは 頑張れ」

私はそう言ってコントローラを握る。





## 結果

「また私の勝ち」

そう笑顔ではやてに言つと

「不幸やあああああああああああああああああああああ  
ああ！！！」

はやては大声でそう叫んでいた。

ゲームって面白い

「……………そろそろ遅くなってきたから帰るね？」

窓の外を見ると太陽が沈み始めていた。

「あ……………そうやね……………外も暗くなってきたもんなあ……………」

私が帰る事を知るとはやては目に見えて落ち込んだ。

はやてには家族がない。

その事ではやてはかなり寂しい思いをしているのを私は知っている。

私としてはここにお泊りしてもいいのだけど多分なのはとフェイトが許してくれない。

なんでか分からないけどそんな気がする。

「それじゃあまたねはやて！！また遊ぼうよ！！」

私は玄関で笑顔でそう言うとはやても

「うん！ほなまた遊ぼうな？」

そう言って手を振ってくれた。

私も手を振り返してそのまま扉を開けて外へ出た。

「……………これ以上八神　はやてに関わるな」

それは突然の事だった。

「……………あなたは誰!？」

仮面を付けた背の高い男がいきなり目の前に現れ私にそう言ったのだ。

しかも

「……………結界!？」

私は素早くスペルカードを取り出して構える。

それを見た男はゆっくりと拳を握った。

嫌な空気が辺りを包む。

正体不明の相手がどう仕掛けてくるのか……………それによって対策を考えなくては勝てる戦いも勝てない。

この考え方はごく最近なのは達と弾幕ごっこをしている時にプレシアから教わった事であり、最近の私の戦い方に大きく関わっている。ただ弾幕を放つだけではなく、相手の戦い方や状況の判断にその戦っている相手の心理状態まで考えて作戦を立てる事が勝つ為の条件になってくるのだ。

もちろん自分の状態をよく理解した上でその作戦を立てなくてはならない。

それを踏まえた上で今現在の状況を手早く確認する。

私の前には拳を構えた正体不明の男が一人、しかも結界が張られている。

私の能力を使えば結界は破壊出来るけどその前に男が襲ってくる可能性が高い。

かといってここでスペルカードを使い、正体不明の相手に自分の切り札を見せたくはない。

ならば

「通常弾幕で倒す！！」

私は通常弾を大量に放ち仮面の男と距離を取る。

「ちっ！」

男は舌打ちをして後ろに下がって弾幕を避ける。

その間に私は誘導弾を通常弾に混ぜて放ちさらに距離を取る。

「この程度！！」

男は逃げる私を追いかけようと弾幕を避けながら前に出てくる。

かかった！！

そう心の中で喜ぶ私とは反対に仮面の男からは焦りが感じられた。

「この！！逃げるな！！」

仮面の男はまだ私の策に気が付いていないようで弾幕の中を追いかけてくる。

私は逃げるのをやめて弾幕を放ち続ける。

そろそろいい感じになってきた。

私は仮面の男に

「鬼さんこちら 手のなる方へ」

笑顔でそう言つと

「ふざけるなああああああー!!」

仮面の男は怒つたようでそう叫びながら前進しようとしてきた。

しかし私は先程とは比べものにならないくらいの弾幕を放ちそれを阻止する。

「なんだと!?!」

仮面の男は驚いて後ろに下がろうとするが

「なっ!?!後ろからも!?!」

男の後ろ側からも弾幕が迫ってくる。

男は焦つたように上を見るがそこにも大量の弾幕が迫っていた。

その光景はまさに弾幕でできた檻

「最初から……………これを狙ってたのか……………」

今さら気が付いたようだがもう遅い。

「……………ブレイク」

その私の声に反応して檻を作っていた弾幕が一斉に仮面の男を目標として突っ込んでいき爆発する。

「……………ふう……………うまくいったぁ……………」

私はため息を吐きながらいまだに爆発を続ける弾幕の檻を見る。

相手が拳を握った瞬間に相手がフェイトと同じ接近戦をするタイプなのだと見抜いてからこの作戦を立てて実行したのだが……………

「……………やり過ぎちゃったかな……………」

爆発はまだ止まらない。

一応” ひさっしょうせってい” なのだが明らかにオーバーキルだ。

とりあえずあんまりやり過ぎると仮面の男が死んでしまうので弾幕を能力で消して仮面の男を助けると

[illegible]

土下座して謝ってきた。

「……やり過ぎちゃった……」

とりあえず謝る男に私は

「えい！」

バキッ！

一発殴つて氣絶させた。

「確かアルフが言っていたもんね……」  
「壊れた物は殴ると元に戻る」

それを信じて殴ってみたのだが……



「……………」

仮面の男は倒れたまま動かない。

「あれ？……………力加減間違えたのかな？」

私は顎に手を当てて考える。

起こすにはどうすればいいんだろう？

「うーん……………そうだ！もう一回殴れば起きるかも！」

そう考えた私は仮面の男を仰向けに寝かせて馬乗りになる。

そして拳を振り上げて……………

[illegible]

いきなり飛び出してきたもう一人の仮面の男に止められた。

仮面を付けるのが流行ってるのかな？

「申し訳ありませんでした！お願いですからトドメを刺さないでください！！お願いします！」

そう言つて土下座する仮面の男

なんだかわいそうになつてきたので馬乗りしていた男から離れると

「ありがとうございます！ありがとうございます！」

頭を下げながら仮面の男は倒れている男を起こしてどこかに転移していった。

男が転移すると私を閉じ込めていた結界が解け、太陽を見るともうほとんど沈んでいたのだから私は急いで帰る事にした。

いつたいあの人は何がしたかったんだろう？

そんな謎を私に残して……………

## おまけ 1 (前書き)

これはKY執務官と接触する少し前のお話

修正しました

## おまけ 1

「……………ふふ……ふふふふ……アッハハハハハハハハハハハ！……ついに……ついに完成したわ………フェイトの思いを成就させる為の最高傑作が……！」

きっかけはこのH E N T A Iなマッドサイエンティストのはた迷惑な発明品だった。

「これさえあれば……………アッハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

「ママうるさい！！今何時だと思ってるの！？まだ朝の3時だよ！？」

「ご、ごめんなさいアリシア！」

はた迷惑な高笑いのせいで娘のアリシアを起こしてしまい怒られた。

「まったく……………ママはいつもそうやって寝らずに研究ばかりしているから病気になっちゃうんだよ！！ほら早く寝るよママ！！一緒に寝よ？」

「アリシア……………一緒に寝てくれるの？ならばこんな事をしている

暇は無いわ！いざ行かん！エデン（アリシアのいる寝室）の地へ！  
」

プレシアはそう言うとアリシアとともに寝室へと入って行った。

娘に説教されなんとも絞まらないこのマッドサイエンティストの発  
明品が今回の騒動のきっかけとなるとは誰も知らぬままに……………

~~~~~

ピンポーン！

「はい！今行きます！」

インターホンの鳴る音が聞こえた私は玄関へ向かい扉を開けるとそ  
こには白い箱を持ったフェイトと笑顔を浮かべるアリシアがいた。

「こんにちはフラン」

「やつほーフラン 遊びに来たよお」

今日はジュエルシード集めを休んでみんなで遊ぶ事になっているので私は二人に

「うん それじゃあ中に入って？」

と言って家に招き入れる。

「「お邪魔します！」」

二人は元気よくそう言って家の中に入っていた。

「ねえフェイト？その白い箱は何なの？」

なのはの部屋に行く途中に私はついフェイトの持っている物が何なのか聞くと

「ああこれ？ママがなのは達と遊ぶなら持っていきなさいって玄関

で渡されたんだよ」

聞いたフェイトのかわりにアリシアがそう答えてフェイトも頷く。

「ふうん……………それじゃあ中身はお菓子かなあ？」

白い箱は翠屋のケーキを包む箱に似ているのであながち間違いではないと思う。

「まあ開けた時のお楽しみって事でいいんじゃないかな？」

フェイトはそう言って苦笑する。

「そうだね……………あ！ここが私達の部屋だよ？」

気が付くと自分達の部屋を危つく通り過ぎるところだった。

「……………私達””？……………ねえフラン？”私達””って……………もしかしてフランはなのとは一緒の部屋で寝起きしてるのかな？」

そう言ったフェイトの口調は前に時の庭園ではやての事を喋った時みたいに優しいけどどこことなく恐怖を感じさせるものだった。

「……………フェイト怖い……………」

アリシアは引き攣りながらそう呟くとフェイトがハツとした顔になって元に戻った。

……………またあんな風になるのはいやだなあ……………



そう思いながら部屋の扉を開けてフェイト達の中に入れると

「いらっしゃいフェイトちゃん!! アリシアちゃん!!」

「いらっしゃいなのです二人とも!!」

なのはとハチが元気よく二人を迎えた。

「うん 遊びにきたよハチ……………なのはもね」

「あはは……………」

フェイトの雰囲気怖い。

アリシアも苦笑いしっぱなしだ。

そんな中なのはが

「どうしたのフェイトちゃん?……………もしかして私とフランちゃん  
の愛の巣(部屋)に嫉妬しちゃったの?」

そんな事を言ってフェイトを挑発した。

「ふふ……………どういう意味なのかな?なのは、詳しくO H A  
N A S I したいんだけど?」

フェイトはさっきよりも怖くなった。

「ふふふふ……………望むところだよフェイトちゃん」

なのはもあの時と同じオーラを放ち始める。

二人は笑いながらデバイスを取り出し臨戦体制に入る。

二人とも怖い。

ここで二人に喧嘩してほしくなかった私は

「……………喧嘩するなら二人とも嫌いになっちゃうよ?」

少し怖くて涙目になり声が震えてしまったがそう言った。

「なのは! 私達は友達だよね?」

「そうなのフェイトちゃん! 私達は友達なの!」

すると今までの雰囲気嘘のように二人は互いに握手していた。

「……………今さっきのは何なんだろうねハチ……………」

「……………わふ……………」

おいてけぼりを喰らったアリシアとハチはなんだか哀愁漂う雰囲気

を纏いながらそんな事を言っていた。

~~~~~

「……………ふう……………どうなるかと思ったよ……………」

私はみんなの飲み物を持ってくる為に一人部屋を出た。

あのフェイトの持ってきた白い箱の中身はやはりお菓子で、美味しそうなアップルパイのような物だった。

何故ような物なんて表現な仕方をしたのかというとパイの中に入っていた具材が毒々しいまでの紫色だったからだ。

確かに紫色の食べ物はあるのだけど紫色の”果物”を私はブルーベリーやぶどうくらいしか知らないけどその果物はそのどちらにも当て嵌まらないのだ。

だからアップルパイのような物という表現をする事になったのだが

.....

「.....なのは達大丈夫かな？先に食べてていいって私が言っちゃったんだけど.....」

私は今になって後悔している。

多分プレシアの用意した物だから毒物では無いとは思っただけで嫌な予感がする。

.....この予感の良い事に関してはほとんど当たらないのに悪い事にはかなりの確率で当たる。

そんな悪い方への考えを振り払うように私は首を振り部屋の扉を開ける。

「……………フランちゃん 食べていい？」

ゾクウ！！

耳元でいきなりそう囁かれた私の背筋が寒くなった。

囁かれた方を見るとどこか焦点の合っていない目で私を見るのはがいた。

「……………ダメだよなのは フランは私が美味しく食べるんだからね」

反対側からなのはと同じ状態のフェイトが現れて……

「ひゃう！フェ、フェイト！？耳を噛まないで……」

いきなり耳たぶを軽く噛まれた。

「わふ………ますたーが美味しそうに見えるのです」

ハチが後ろから抱き着いて

「わひゃあ！くすぐつたいようハチい……」

首筋を舐められた。

パタン！

「……………え？」

首だけで振り返るとアリシアが扉を閉めていた。

「ア、アリシア？」

私は驚いてアリシアに声をかけると

「……………ふふ……………逃げさないよフラン？」

やっぱりみんなと同じ状態のアリシアがそこにはいた。

ガシャーン！

あまりの事に私は手に持っていた飲み物を入れていたコップを落としてしまったが



「ますたーが怪我したらいけないのです」

とハチが全部直してしまった。

そしてそのまま私はなのはとフェイトに両脇を挟まれてベッドへと運ばれてしまった。



あの時の事は私以外覚えていない人はいない。

恐らくあのパイにはプレシアの作った何かが入っていたのだろう……

しかし今となっては知る事は出来ない。

しかし私に大きな黒歴史を残してくれたその事件は同時に素晴らしい教訓を私に残してくれた。

その教訓とは……………

” プレシアのする事には注意する事また、絶対にプレシアから物を貰わないこと……………特に食べ物類”

あれ以来この教訓を守って行動するとあのような事件には巻き込まれなくなった。

ちなみにあの時ユーノはみんなにバインドで養虫のように固められて外に捨てられていたらしい。

「……………僕って存在する意味無いよね」

そう言いながら首を吊ろうとしたのは今でも覚えてる。

ドンマイユーノ



第27話 無印編

「……………もう見つからないわね」

きっかけはプレシアのそんな一言だった。

ここ最近、なんとか12個までジュエルシードを集めることに成功した私達は新たなジュエルシードの反応を探していたのだけど……

……

「やっぱりもう無いのかなあ？」

アリシアもプレシアの操作するモニターを覗き込みながらそう言う。

そう、ジュエルシードがぱったりと見つからなくなってしまったのだ。

ジュエルシードは全部で21個あるのだけどその内3個は私の能力によって願いを叶える石に変えてしまい、砕け散ってしまった。

なので残り6個のジュエルシードを探しているのだけど……………

「うーん……どこにあるんだろう……」

プレシアやアリシアの声を聞いていたフェイトも考え込んだ。

その様子を見ていたアルフは

「別の世界にあるのかもしれないねえ………」

そんな事を言う。

「それじゃあ探しようが無いの………」

なのははそんなアルフの言葉を鵜呑みにしたのかそんな事を言っている。

みんな気が付いてないのかな？

まだ探していない場所があるのを………



「……………わふ？海は探したのですか？」

「……あ！」「」「」「」

ハチのそんな何気ない質問にみんなが今気が付いたかのような声を上げた。

「……………やっぱり気が付いてなかったんだ……………」

私はそんなみんなの様子を見ながらため息を吐いた。

……………

「……………という訳で海に来ただけ……………なんでこうなってるの……………」

黒い暗雲立ち込める現場の中で目の前に広がるのは水でできた竜巻

に鳴り響く雷鳴。

そして……

[illegible]

そう言いながら水でできた竜巻に巻き込まれている管理局の執務官の人と

「ハチいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！愛  
してるよおおおおおおおおおおお！！………つて  
雷危な！？なんか僕狙われて…………ぎやあああああああああ  
あああああああああああああ！！」

雷に打たれる金髪に緑眼の妙に暑苦しさを覚える少年の姿だった。

「……………なのは…フェイト……………」

私が二人の名前を言うと二人は私に綺麗な笑顔を見せて

「スターライトおおおおおおおおブレイカあああああ  
あああああああああああああああ!!」

「フォトンランサあああああああああああああ  
アランクスシフトおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおお!!」

大技でまとめて吹き飛ばした。

戦う二人ごと……………

「ちょ!待ってく」……………」

「ハチいいいいいいいいいいいいいいいい!!愛  
して」……………」

ジュ！

そんな音が聞こえたような気がしたけど気にしない

二人の魔法はそのまま竜巻や雷に直撃してあっという間に6個のジュエルシールドが封印状態で浮かび上がった。

「お疲れ様 帰ろ？」

私は二人にそう言うと二人は頷いてジュエルシールドをRHとBDに格納してフェイトの転移魔法で時の庭園に帰った。

最初にいた二人をそのままにして……

多分生きてると思うよ？

多分……………

~~~~~

「お疲れ様なのですますたーなのは、フェイト！」

時の庭園に帰ると笑顔のハチに出迎えられた。

今回私は何もしなかったけど……………

私も攻撃した方がよかったかな？

いや、あれで良かったはずだ。

あれだけでオーバーキルなのに私の攻撃が加わったら多分二人は死んでたと思う。

.....それにしてもあの金髪の男の子は誰なんだろう.....

最近よく見かけるんだけど.....

ハチの名前を叫んでたからハチが知っているのかと思ったけど知らないって言ってたし.....

うーん.....誰なんだろうか.....

それにしても最近ユーノの姿を見ないんだよね.....

最近じゃ時の庭園にすら入れてもらえなくなってるし.....

あれ？

ユーノって最近家で見たかなあ？



.....帰ってきたらお菓子あげよう.....

そしてハチに遊んでもらえば満足するはずだ。

こうして私達のジュエルシード事件は終わりを告げた。

ユーノが行方不明なまま………

第28話

A・S編（前書き）

妹様無双注意！！

## 第28話

## A・S編

「罪と罰、今ここに交わりてすべてを穿ち薙ぎ払わん……」

集まりし力は沈黙をもってすべてを示し暴虐の限りを尽くす……

禁忌……

『アポカリプスブレイカー』

詠唱が終わり大きく展開した魔法陣に膨れ上がった膨大な量の魔力が赤黒い閃光を放つ。

私だけの新しい殲滅砲撃魔法 禁忌『アポカリプスブレイカー』

その力はなのは達を傷付けた”彼ら”を葬り去るには過剰過ぎる威力だ。

「ますたー！！ダメなのです！！アポカリプスブレイカーはまだ……  
…………”非殺傷設定”になってないのです！！」

ハチはそう言って私を止めようとする。

そんなの関係ない……………



んだ。

~~~~~

〈 10 分前 〉

「ますたー……………なのは達帰って来るのが遅いです……………お  
腹すいたのです……………」

ハチがタレた感じでそう私に言ってくる。

「うーん……………確かに遅いなあ……………何してるんだろうなのは達……………」

外はもう暗くなっており私も段々心配になってきた。

今日はフェイト達が家に来る日なのだが、なのはがフェイト達と一緒に魔法の練習しに公園の方まで行ってしまったのだ。

「少し様子を見に行った方がいいかなあ？」

外の様子を見ながら私がそう言うのとハチは不満そうに

「わふ～～～迎えに行くですかましたー？」

頬を膨らませながらそう言うてくる。

「ふふふ　そう言わずに一緒に行こう？」

そう言うてハチに手を差し延べると

「わふ……………分かったですましたー……………」

不満そうだけどハチは私の手を握り立ち上がって私と一緒に外に出た。



「……………ますたー……………これ結界なのです……………」

なのは達を迎えに行くために公園に行こうと住宅街に入ったのだけ  
どそこには巨大な結界が張ってあった。

「なんでこんなのがここにあるのかな？」

その結界から感じるのは知らない魔力だ。

いったい誰がこんな物を張ったのか分からない。

私は首を傾げながらも結界に近づいてみると中から魔力を僅かだが  
戦っている感じを取る事ができた。

……………なのは達の魔力が

「ッ！？なのは！？」

突然のそんな私の叫び声にハチは驚き近づいてくる。

「どうしたですかましたー！？」

ハチは訳が分からずに混乱しているようだがそんなの構っていられない。

恐らくなのは達はこの結界の中に閉じ込められているのだ。

「スペルカード！禁忌『レーヴァテイン』」

私はレーヴァテインを呼び出して結界斬った。

「うああああああー！！」

ザクッ！！

レーヴァテインで斬った場所に穴があき、私は勢いよく中に入った。

そこで私が見たのは……………

「あああああああああああああああああああああ  
！！」

胸から手が生えて苦しむのはと

ドガッ！

「あつっ！つううううう………」

地面に叩き付けられたボロボロのフェイトに

「痛いよ……………助けて……………ママぁ……………」

泣きながら胸を押さえるアリシア……………

そして

ドガンッ！

「かはぁ！……………ま、まだだ……………まだ戦える……………フェイト達を……………守らない……………と……………」

ボロボロになり地面に倒れながらも立ち上がろうとするアルフの姿だった。

「む？新手か！？」

フェイトと戦っていたピンク色の女剣士が私を見る。

「お！こいつスゲー魔力だ！あの白い奴なんか目じゃねえ量だぜ！？」

ハンマーを構えた赤い服を纏った私達と変わらないくらいの少女がそんな事を言ってくる。

「……………恨みは無いがこれも主の為だ……………蒐集させてもらっ

筋肉質の男はそう言って拳を構えた。

「…………ふざけるな」

彼らの言葉に私の心が感じたものは…………

怒りだった。

「ふざけるなああああああああああああああ……！」

私は怒りのままに彼らに斬りかかろうとしたその瞬間

ズブツ！

「……………え？」

自分の胸を見ると先程のなのと同じように手が生えていた。

それを見た私は……………

「はあああああああああああ！！！」

その腕をレーヴァテインで斬り払った。

「あああああああああああああああああああああ！！！」

遠いところで悲鳴が上がる。

咄嗟に私は自分の目の前に落ちているレーヴァテインで斬り払った  
その腕をレーヴァテインの炎で焼き払い消滅させた。

「シャマル！？くっ！！蒐集失敗だ！！！」

女剣士は剣を構えて警戒する。



「な、なんて野郎だ……………蒐集中のシャルムの腕を切り落とすなんて……………」

ハンマーを持つ少女は私のした事に驚き

「……………はぁ！」

筋肉質の男は拳を振り上げて私に殴り掛かってきた。

私は翼を広げて空を飛ぶことで回避すると男は追撃してきた。

その追撃をすべてかわして男の腹部を蹴り飛ばす。

「ぐぉぁー!!」

そんな声をあげながら男が近くの建物に突っ込むがすぐに立ち上がってこっちに来ようとする。

その様子を見ながら私は考えた。

あいつを沈めるにはどうすればいいのか……………

目を閉じると浮かんでくるのは紅い月を背景にしながら優雅に微笑む少女の姿。

その手にあるのは深紅の神槍

目を開ければ男がこちらに迫って来る。

それを見た私は

レーヴァテインを右手に握り投擲の構えを取る。

男は目を見開き驚愕の表情を浮かべる。

「……………」　　”　　こんなに月も紅いから……………　　本気で殺すわ”　　」

そう言っ　て私は微笑む。

「なっ！」

男は急いでプロテクションらしきものを張るけども遅い。

私は全力で投げ付ける。

ドガン！

「があああああああああああ！！！」

……………命中

どうやらプロテクションらしきものをレーヴァテインは突き破りその後ろにいた男の腹部を貫いたらしい。

男は苦痛の叫び声をあげながら地面に落ちていった。

「ザフィーラ！貴様あああああ！！！」

あの女剣士が剣を振りかぶって接近してくる。

私はそれを

右手の爪で受け止めた。

「なんだと！？私のレヴァンティンを爪で受け止めた！？」

吸血鬼である私の爪はレーヴァティンほどではないけど頑丈だ。

それこそそこら辺にある金属の刃物よりも切れ味はいい。

そんなことよりも気になる事があった。

この女剣士の持つ剣も私と同じ魔剣の名を冠しているらしい。

「……………同じ名前の剣は二つもない!!」

私はそう言っで爪で受け止めていた剣を左手で握り……………そのまま潰した。

「レヴァンティンが!!」

女剣士は驚いているようだが私はその隙を逃さない。

「吹き飛ばし!!」

自由になった右手に素早く魔力を集中させて威力を高めた魔力球を叩き付けた。

ズガン!

「うああああああああああ!!」

女剣士も地面に落ちていった。

「シグナム!? 畜生! やりやがったな!!……………アイゼン! ギガントフォルムだ! カートリッジロード! 轟天爆砕! ギガントシューターク!!」



「……………弱いよ」

私は驚愕の表情を見せる少女にそう言い放ちレーヴァテインでそのハンマーを切り裂く。

「ア、アイゼンが……………」

自分の武器を破壊されたのがよほどショックだったのか少女は呆然としている。

私はその様子を気にする事なくレーヴァテインでさらに斬り飛ばした。

「うわあああああああああ！！！」

咄嗟にプロテクションを張ったみたいだけどそのまま少女は地面に叩き付けられた。

下を見るとあの男も女剣士も少女もまだ少し動いていた。

彼らはまだ生きている。

だったら殺してやればいい。



だって私の大切な友達のなのは達を傷付けたのだから……………

「罪と罰、今ここに交わりてすべてを穿ち薙ぎ払わん……………」

集まりし力は沈黙をもってすべてを示し暴虐の限りを尽くす……………

禁忌……………

『アポカリプスブレイカー』



破滅をもたらす黙示録の名を冠した私だけの砲撃魔法を……

## 第29話 A・S編（前書き）

前に活動報告でOPとEDを募集していて今回決定したので載せときます。

無印編

OP

G r i p & B r e a k d o w n ! !

ED

o r b i t a l r i n g

A・S編

OP

S c a r l e t t W a l t z

ED

W h o K i l l e d U・N・O w e n

狂気暴走時

これが私の妹様

まあこんなところですかね……

それでは本編をどうぞ（＾o＾）／

他にこっちの方があつてよ！

とかいうのがあつたら感想の方で教えてください（ゝゝゞ

第29話 A・S編

「『アポカリプスブレイカー』！！」

赤黒い閃光が私の敵に向かってまっすぐ伸びていく。

その大きさはなのはのスターライトブレイカーよりも遥かに大きい。前に模擬戦でなのはがフェイトにスターライトブレイカーを撃ったのを見て私も同じような砲撃魔法が使いたくなり、教えてもらったのだ。

完成した時になのはの顔が引き攣ってたのを覚えている。

今その砲撃があいつらを葬り去ろうとしている。

”ひさっしょうせつてい”なんて関係ない！

あいつらはなのは達を傷付けたんだ！

なのは達の魔法には”ひさっしょうせつてい”が付いているはずなのにあいつらの魔法は………特にあの蒐集？とかいうやつは明らか



ズガー————ン!!!!!!!!!!

着弾

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

爆発による凄まじい強さの爆風が私を襲う。

なのは達を見るとハチが結界を張って防いでいる。

あまりの威力に当たったわけでもないのにハチの張っていた結界にヒビがいくつも入っていた。

辺りを覆っていた結界には私があらかじめ強化しておいたので壊れてなかったが着弾した場所ば大きなクレーターに変わってしまったて底が見えない。

しかし……………



外した。

それが今の私の感じた事

アポカリプスブレイカーが着弾するほんの少し前にあいっらはどこかに転移してしまった。

あのギリギリの場面で外したのだ。

気配を探って見れば異物が紛れ込んでいるのが分かる。

「この感じ……………仮面の人？なんで？」

その気配の主はあの時の仮面の男のものだった。

恐らくあの仮面の男があいつらを転移して逃がしたのだろう。

許せない……………許せない！！

最初に現れた時にははやてに近づくななんて意味の分からない事を言っ  
て私から友達を引き離そうとしたし、今回はなのは達を傷付けたあいつ  
らを逃がした。

いったいどれだけ私の邪魔をすればいいのか!?

だったら………

『……………ハチ、ハチの能力でみんなとこの穴を元に戻しておいて？それに自分勝手な事してごめんね？』

私はハチに念話でそう言っでその場を離れる。

『ますたー？どうしたですか？』

やはりハチは優秀な使い魔だ。

こんな感情に任せて行動する私の事を呆れもせず心配してくれる。

私には勿体ないくらいだ……………

『うつん、ちょっとした用事がね……………』

私は何気なくスペルカードを手に持つ

そのカードは

『ネズミを狩ろうかと思ってね』

禁忌 『カゴメカゴメ』

手の中でカードが消えて発動する。

ドカガガガガガガガーーーーン！！

命中

感覚で分かる。

今のは確実に当たった。

それでもスペルカードの発動をやめない。

別に邪魔するんならそれでもいい。

ただし……………

それ相応の報いは受けてもらっけどね。

そう心の中で思っていると急に仮面の男の気配が消えた。

「……………逃げた？ううん、他にも仲間がいるのかもしれない……………  
……………注意しとかないと……………」

私は小さくそう呟きながら八チから治療を受けているのは達の下  
に向かった。

これからまた戦いの日々が来る予感を感じながら……

~~~~~

「救援に来たぞ!!」

「ハチいいいい!! 君の王子様が助けに来たよおおおお!!」

クロノとユーノ到着。



フラン達が帰った後に……

「……………こんな役ばかりしてる気がするのは何故だ……………」

天を仰ぎ見ながら必死に何かを堪えるクロノ

「ハチいいいい！！君への愛はこんな事じゃ消えないよおおおお  
お！！！」

それとは対照的に叫ぶユーノ

このあと近隣住民に二人が怒られたのはいうまでもない……………

第30話 A・S編

「心配かけてごめんなさいなの……………」

「……………まったく歯が立たなかった……………」

「くううう……………もっと……………もっと私が強ければ……………」

ハチのおかげで回復したなのは達は口々にそんな事を言っているけど……………」

「……………」

アリシアだけはずっと無言だった。

実はあの正体不明のあいつらの攻撃……………蒐集を一番最初に受けたのはアリシアだったのだ。

あの痛みを戦った事の無いアリシアが耐えられるはずもない。

「大丈夫アリシア？痛いところはない？」

私がそう聞くとアリシアは曖昧な笑みを浮かべて頷くだけ……

どうやらあの出来事は戦闘経験の無いアリシアの心に傷を付けたようだ。

「……………アリシア……………」

ギュー！

私はアリシアを抱きしめる。

守れなかった……………

私には力があるのに大切な友達を守れなかった……………

その事実が悔しくて堪らない。

「ごめんねアリシア……………守れなくてごめんね……………もっと早く私  
が来てればアリシアもなのは達もあんなに傷付かなかったのに……………  
……………」

視界が滲む。

涙が溢れて止まらない。

声を殺して泣く。

身体の傷は癒せるけれど心の傷は治せない。

アリシアに一生消えない傷を付けさせてしまった。

そんな後悔が私の心を掻き乱す。

なのは達も話をやめて私といまだに放心状態のアリシアを見る。

絶対に……………

絶対に許さない！！

絶対にあいつらを捕まえてアリシアの目の前に引きずり出して謝らせる！

たとえどんな事情があろうとも！！

そんな誓いを私は泣きながら立てる。

アリシアの小さな震えを抱きしめる腕の中で感じながら……………

……………

「……………ザフィーラ、大丈夫か？」

息も絶え絶えに私は一番重傷を負ったザフィーラの容態が気になり  
聞くと

「……………なんとか動ける……………」

そんな痛みを押し隠したような声でザフィーラは答えた。



それもそのはず、ザフィーラはあの戦いで腹部を貫かれたのだ。

痛くないはずがない。

しかしザフィーラは気丈にもいつもの獣モードに移行して傷を隠す。

体毛のおかげで傷はなんとか隠れている。

「それよりシグナム……………シャルは……………」

ヴィータが暗い表情で私を見る。

「……………くっ！烈火の将たる私が戦う相手と引き際を見誤ったか……………」

そう、あの時の蒐集失敗。

あの時の予想外の攻撃によりシャルは右手を肘から先を失った。

確かに私達ヴォルケンリッターは守護騎士プログラム……………つまりはプログラムなので魔力さえあればなんとかなるのだがそれには主の負担増加と時間がかかる。

それはすなわち主の残り少ない時間をさらに削り取る事になる。

それにそんな事をすれば主に私達のしている事を気付かれてしまう。

それだけはなんとしても阻止しなくてはならない……………

「……………仕方ない……………」

私は”書”を取りシャルの下に向かう。

「まさかシグナム……………」書”を使うのか！？せっかく苦勞してページを埋めたのに！？」

「主に気付かせる訳にはいくまい？……………1と2ページの消費ならまた頑張ればいい」

私に縋り付くヴィータにそう言ってシャルの下に向かう。

そう、すべては敬愛する我らが主……………

八神 はやての為に.....



第31話 A・S編（前書き）

少し修正しました

第31話 A・S編

「これが私専用のデバイス？」

目の前にあるカードのような物を手にとりプレシアにそう聞くと

「ええそうよ？ 箆手型のアームデバイスでフランさん専用の物よ？」

そう言つて微笑んだ。

何故いまさら私専用のデバイスを作るようにしたのかという私の戦い方であるスペルカード方式ではあまりにも威力があり過ぎて”ひさっしょうせつてい”にしにくい為、新たにプレシアに頼んでミットチルダ式とスペルカード式を融合させた”ひさっしょうせつてい”にしやすいデバイスを作ってもらったのだ。

「まだそのデバイスには名前が無いからフランさんが付けてあげる  
といいわ」

プレシアはそう言って私の肩を軽く叩く。

「それじゃああなたの名前は……………」

” ヘル ”

夜を統べる女王の名前をあなたにあげる  
「

私がそう言つと名称を設定し終えたのか頭の中にヘルの起動の仕方が入ってきた。

「我大いなる力を使いし者なり



契約の下にすべてを守護し薙ぎ払わん

月を空に、闇を手に

そして慈しむ心は

この胸に!!

この手に力を!!

ヘルセットアップ!!」

《スタンバイレディ セットアップ》

ヘルをセットアップするとどこか物静かな女の人を思わせるような

音声が届いて紅い光に包まれた。

私は自分の想像するB Jをヘルに伝えたとヘルはすぐにそのB Jを作りあげてくれた。

どこかドレスに似たそのB Jの色は深紅でフリルがたくさんついた服であり、袖の方は手首まである。

それでも機能性を考えてスカートの部分を膝より少し上くらいまで短く動きやすくなっていた。

腰のところにはピンクの大きなリボンが付いており、背中は大きく開いて羽が出しやすくなってるのが分かる。

足には私が普段履いているような靴に白色のニーソックス

最後に黒く鉤爪のような爪が付いており、まるでリボルバーの弾倉が手首の部分にくっついたような形のガントレットが私の左手に装着された。

「えへへ 成功だね」

特に異常もなく嬉しくなり笑顔でプレシアにそう言つと

「どうやら成功のようね？」

プレシアは私のB Jを見ながら笑顔でそう言ってきた。

そして

[illegible]

いきなり発狂した。

「……禁忌 クランベリートランプ」

私がそう言いつと

ガシユン！ガシユン！

そんな音とともに空の薬莢がガントレットの回転するリボルバーの部分から排出されて一枚のカードが左手に現れる。

この間に私が消費した魔力は普段スペルカードを使う時の70分の1  
凄く魔力運用の効率がいい。

そしていまだに発狂したままのプレシアに向けてスペルカードを発  
動する。

ズガガガガガガガガガ――ン！！

とりあえず威力はかなり落ちたけどちゃんと”ひさっしょうせつてい”になっている。

その実験の為に黒焦げになり気絶してもらったプレシアを私は担ぎ上げて寝室へ運ぶ。

ちょっとだけ罪悪感が湧いたのは私だけの秘密

……………後でフェイトとアリシアにプレシアと一緒に寝てもらうようにお願いしようかな？

そんな事を考えながらヘルの試験運用の為に模擬戦をしてもらう相手を考える。

「……………なのはやフェイトはまだデバイスが直ってないし……………  
……………アルフに付き合ってもらおうかな？……………ふふふ  
……………久しぶりに全力出しちゃおう……………」

その約30分後に訓練室から凄まじい悲鳴が聞こえ、その2時間後には黒焦げの塊が残されたという。

それを最初に発見したフエイトは

「あ、アルフ……なの？ねえ……アルフ……返事してよ……アル  
フ……アルフ……う……う……う……う……う……う……う……う……  
う……う……う……！！」

そう叫んだらしい……



デバイス設定「フラン専用アームデバイス&quot;ヘル&quot;」

「名称」

ヘル

形式

スペルカード式、ミッドチルダ式、ベルカ式の混合デバイス

B J 形状

ドレスに似たB Jで色は深紅

フリルをふんだんに使ったどこかゴスロリ調なB Jで袖の方は手首まであるが機能性を考えてスカートの部分を膝より少し上くらいまで短く動きやすくなっている。

製作者の意図的なものなのか少々胸元が強調されており、今後の成長しだいではかなり色っぽい事になる可能性がある

腰のところにはピンクの大きなリボンが付いており可愛さをアピールしている。

背中は大きく開いて羽が出しやすくなっており、足には普段フランが履いているような靴に白色のニーソックスが装着される

(二一ソは重要www)

デバイス形状

待機状態

見た目は漆黒のカード

銀色のラインで幾何学的な模様が描かれている。

起動状態

黒色の鈎爪のような爪が付いており、まるでリボルバーの弾倉が手首の部分にくっついたような形のガントレットがフランの左手に装着される。

イメージとしてはStrikersのスバルのデバイス マッハキヤリバーに鈎爪が付いており、回転するジャイロ部分がリボルバーに変わっている感じ

カートリッジの装填口はデバイス本体の左側に付いており、斜めに差し込むオートマチックタイプ

排出口は腕の裏側に付いており下に向けて排出される。

最大装填数は6発だがフランの力を最大限に発揮するためにカートリッジオーバードと呼ばれるシステムが搭載されている。  
(カートリッジオーバードについては性能の部分に参照)

性能

フランが使用しているスペルカードがすべてデータとしてインプットされており、使用時は僅かな魔力でバインドやプロテクションを発動できる為かなり魔力運用が良い。

しかし一方で攻撃時のフランの魔力があまりにも強大過ぎてそのまま魔力を使う事ができない。

その為少しずつしかフランの魔力を使えないのでスペルカード使用時には足りない魔力をカートリッジで補っている。

なのでカートリッジの消費はかなり激しい。

（殲滅砲撃魔法の禁忌『アポカリプスブレイカー』を放つ際には本来の威力から10分の1程度にしてもカートリッジをフルロードするほど）

使用時はミッド式とベルカ式を融合させたデバイスなのでフランが使えなかったバインドやプロテクションを使用可能となる

魔力球もデバイスを介して作る事で非殺傷設定にすることができる。  
（ただし威力を完全には抑えられないので込める魔力を抑えないと当たった時に激痛が走る）

カートリッジオーバーロード

カートリッジオーバーロードとはカートリッジをフルロードした状態でさらにカートリッジを任意の回数ロードするシステム

ただしデバイスの負担がかなり大きい為、最大でもフルロード1回分とその半分が限界である。

ロストログア封印用のシーリング機能も付いている。

音声

物静かな感じの女性の声

第32話 A・S編

それは突然の事だった。

「……………え！？アラート！？まさか……………」

突如鳴り響くアラートに驚きつつも解析に入るエイミィ

そして画面上に映り込む映像には二人の人影……………

一人は赤い髪に赤い服、ウサギの飾りが付いている帽子を被ったフ  
ラン達と同じくらいの少女

そしてもう一人は筋肉質の身体にケモノ耳と尻尾を生やした長身の男

「この二人……………もしかして……………」

エイミィは先程聞かされた話を思い出していた。

なのは達が襲撃されてなのはとアリシアのリンカーコアが奪われたという話を……………

「た、大変！すぐに艦長に知らせないと！」

エイミィはすぐに艦長であるリンディに連絡を取り、武装局員達へその指示を伝える。

それはプレシア・テストロッサからなのは達襲撃事件の連絡を受けて現場に到着、再び民間協力者としての協力関係を築いたすぐ後の事だった。

「……………とりあえずこれでよし……………後はフランちゃん達が現場に来てくれるのを待っただけね……………」

緊張したままモニターを見つめるエイミー

そこにはあの二人を囲むように布陣した武装局員達がいた。

二人はその囲みの中で警戒しつつ背中合わせになって武装局員達を睨みつけている。

結界もすでに張っており逃走はできないはずだ……………

艦長からの新たな指令によりクロノ君が上空から不意打ちに近い攻撃を放った。

筋肉質の男がプロテクションのような物を張り、その攻撃を防ぐが爆発が起きる。

……………というかクロノ君張り切り過ぎだよ……………

確かに”闇の書”はクロノ君やリンディ艦長にとって因縁の存在なのかもしれないけど……………肩で息をするほど魔力を消費するような魔法をいきなり使うのはどうかと思うよ？

相手には他にも仲間がいるって分かっているのにあんな事するんだか

ら……………

………確かアースラじゃ動きにくいからって艦長がなのはちゃん達の家の近くに臨時本部を置くって言った時も真っ先にあの色ボケなユーノ君と一緒に賛成してたし、よほどフランちゃんにいい所を見せたいのかな？

そんな事を考えているとゆっくりと爆煙が晴れてくる……………

やっぱりダメだった。

クロノ君の攻撃で魔力で作った刃が三本ほどが防御した男の左腕に刺さっているが本人はダメージを受けた様子はない。



.....でも、その間に強力な.....ううん！超強力な助っ人達を送れた。

これで負ける事はない。

むしろ勝てる！

モニターの画面の先.....結界の中にあるビルの上に立つ三人の少女達.....

その手にはデバイスが握られており、それぞれの目には強い意志が感じられる。

さあ頑張つて.....あなた達が伝えたい事を伝えるんだよ.....

モニターの先に映る三人にそんな事を思いながら見つめた……………

~~~~~

「『セツトアップ！』」

私達は声高らかにそれぞれのデバイス天に掲げて起動した。

なのはには桜色の閃光が……

フェイトには黄色の閃光が……

そして私には真紅の閃光が身体を包み込む。

身体を包み込むBJを身に纏い、私達は己のデバイスの名前を呼ぶ。

「レイジングハート エクセリオン!!」

「バルディッシュ アサルト!!」

「ヘル!!」

なのは達が自分のデバイスを握り絞めるとカートリッジシステムの部分がゆつくりとスライドする。

私もヘルが装着されている左腕を前に出して握り拳を作るとヘルが勢いよくリボルバーを回転させて急に止める。

デバイスの調子も良好のようだ。

私達のデバイスを見たあの二人は驚きを隠せないようだった。

それもそのはず、このカートリッジシステムは本来ベルカ式と呼ばれる過去に本来なのは達が使っていたミッドチルダ式と二大勢力とまで言われた方式で、強力ではあるものの使い手を選ぶようなシステムだった。なので今ではあまり見かける事のない物だとリンディ達から聞いている。

前回のなのは達はその強力なシステム……カートリッジシステム

の前に敗北した。

しかし今回は違う。

私もなのは達もそのベルカ式のカートリッジシステムを取り入れた  
デバイスを持っている。

ならばこの戦いに重要なのは己自身の力と技術のみ！

ズガンー！！

突如結界を破ってあのピンク色の髪的女剣士が現れた。

そして私を睨み剣を構える。

「……………狙いは私……………」

そう私が呟くと

「その通りだ……………あの時の借りを返させてもらおう」

私の呟きが聞こえていたのか剣士はそう言って殺気を私に飛ばしてくる。

「ふえ！？ちよつと待ってフランちゃん！？その前になんで闇の書を完成させようとしてるのか教えてもらわないと……………」

そんな私達の様子を見ていたなのはが慌ててそう言うが

「あのさあ…ベルカの諺にこういのがあんだよ」

不意に赤い服を着た女の子が口を開いた。

「な、何？」

なのはは警戒しつつ話を先に促すと

「和平の使者なら槍は持たない……………つまり話し合いをしようってのに武器を持ってくるやつがいるかバカって意味だよー！」

女の子はそう言ってデバイスをなのはに向けた。

「……………ちなみにその話は諺ではなくただの小話のオチだ」

女の子が話したあとに男の人がそう訂正する。

「だぁー……！……！どうだっていいじゃねえかザフィーラ……！……！……！とにかく！つまりはそういう事だ！」

女の子は強引に話を終わらせて再び私達にデバイスを向ける。

まあある程度は予想が付いていた事だった。

ならば……………

「力づくで話を聞かせてもらいます……………」

フェイトはバルディッシュを構え直してそう宣言する。

「……………」

向こうは何も言わずに攻撃体制に入り私達を睨む。

私達も自分のデバイスを構えて向こうを睨みつけた。

そして……………」

[illegible]

戦いが始まった。



第33話 A・S編

「はあ！」

ガキーン！

「くう！……てりゃ！」

ピンク髪の女剣士の振り下ろす剣をヘルの爪で受け止めて弾き返す。

こんなやり取りが何回続いたのだろうか……

単純な……それでいて気の抜けない戦いは久しぶりな気がする。

それでも私もあの人はまだ本気で戦ってはいない。

再びあの方は剣を構える。

「……」

私達は互いに何か話す訳でもなくただ無心に己の武器をぶつけ合い、相手の出方を伺う。

そんな永遠とも思えるぶつかり合いを繰り返していく最中……

「……………できればこんな形で戦いたくはなかったな……………」

急にあの人が剣を下ろして口を開く。

私も警戒しつつ話に耳を傾ける。

「お前ほどの強者と戦えるのは心が躍る……………できれば名前を教えていたきたい……………私の名はシグナム……………そしてこの剣の名はレヴァンティン」

そう言われて名乗られたら私も名乗り返すしかない。

そう思った私は

「……………私の名前はフランドール・スカーレット……………こっちはデバイスのヘル……………そして……………カートリッジロード！禁忌！『レーヴァテイン』……！」

《カートリッジロード！レーヴァテイン！》

ガシュン！ガシュン！

ゴォー！

カートリッジをロードしてレーヴァテインを呼び出して右手で握った。

「これが私の剣……………レーヴァテインだよ」

レーヴァテインはまるで相手を威嚇するように紅蓮の炎を撒き散らす。

「……………同じ剣の名を冠しているとはいえ、私のレヴァンティンが見劣りするほどの凄まじい剣だな……………」

シグナムは目を細めてレーヴァテインを見つめる。

「しかし私は烈火の将！ベルカの騎士だ！！相手がどれほど強くとも負けは許されん！」

そして己の剣、レヴァンティンを構えて私を見据える。

その姿はまさに相手を恐れぬ騎士そのもの。

だからこそ………

だからこそ聞きたかった………

威力が落ちるのが分かっていながらわざわざプレシアに”ひさつしようせつてい”がしやすいデバイスを作ってもらい、彼らを殺してしまいたい衝動を抑えつけ彼らを殺さないようにしてまで私は聞きたかった。

「……………なんで……………なんでそんな正々堂々として  
いるのに……………なんであの場所にいた一般人のアリシアを襲った  
んだー!」

そんな血を吐くような私の叫びは剣を構え続けるシグナムの表情を凍りつかせた。

「そ、それは……………くうっ……………」

シグナムは狼狽した様子で私を見つける。

そんなシグナムの目を睨みつけたまま私は

「……………シグナムはさっき自分の事を騎士だつて言つたよね？なら答えて……………何故アリシアは襲われなければならなかったのかを！！……………答える！！シグナム！！」

そう言い放った。

「くっ……………わ、私は……………私……………達は……………」

シグナムは完全に崩れた。

狼狽し、剣をまともに構えられていない。

さっきまでの威勢のいい正々堂々としたシグナムはもういない。

ここにいるのはただ果然と私の言つた言葉に動揺するシグナムという存在だけだ。

私はそんなシグナムの様子を見つめて考えていた。

それは前回シグナムと戦っていたフェイトの話を聞いてみて疑問に

思っていた事だった。

最初こそ不意打ちに近い攻撃を仕掛けてきたとはいえ、正々堂々とした騎士の名に恥じない戦いをするシグナムが何故アリシアを真つ先に襲う事を良しとしたのか。

普通それだけ誇り高いの人物が無抵抗の一般人を標的にするなんて周りが提案してもそれを取下げはらずだし、絶対にしようなんて考えないはずだ。

なのに何故アリシアは襲われたのか？

その真実を知りたい。

だからこそシグナムに聞いてみたのだが……………

「……………私は……………しかしこのままでは！！……………つつ……………」

シグナムは苦しそうに独り言を繰り返している。

なにがそこまでシグナムを駆り立てているのか……………それが知りたかった。

ズガーーーーー！

「な！？……何……あれ……」

突然の鳴り響く轟音に驚いて空を見上げると大きな漆黒の雷が境界を撃ち破ろうとしていた。

「ッー！シャマルか……ここは助かったと言っべきか……スカーレットー！ここは一時預けた！」

「あ！待ってー！」

シグナムはそう言って離脱してしまった。



「……………あともう少しだったのに……………とりあえずプロテクションで守りを……………ッ！この気配……………またあの仮面の人？なんでここに……………近くには……………クロノ？……………あ！飛ばされた！？もしかして攻撃を受けてるの！？」

私は気配だけで仮面の人とクロノの位置を確認するとその方角に向けて全速力で飛んだ。

もうじき結界が崩壊する。

ならばその瞬間がチャンス！

前は逃げられたけど今回は逃がさない……………

[illegible]

私は力いっぱいレーヴァティンを投擲する。

そして全力でプロテクションを張って漆黒の雷の爆風を防ぐ。

「ううっ!!」  
ふう  
なんとかあったみたいだね  
……  
向こうも命中したみたいだし  
……」

視線の先には地面に向かって落ちていく仮面の人。

それをクロノがバインドで捕まえる。

「……………シグナム達は逃がしちゃったけどあの仮面の人は捕まえて良かったよ……………次もまた邪魔されたら嫌だもん……………」

次こそはお話聞かせてもらうんだからねシグナム……………」

そう私は呟いてなのは達と合流する為に翼を広げて空を翔けた。



第34話 A・S編

シグナム達との戦闘終了後捕まえた仮面の人を臨時の本部の方で尋問していたんだけど……

「……………それで？何か言い訳する事はあるの？」

私はバインドで拘束されたままの仮面の人を睨みつけながらそう聞いてみる。

「……………（ガクガクブルブル）」

仮面の方は震えたままこっちを見ているだけで何も喋らない。

「黙ってちゃ何も分からないの！何をしてたのかをちゃんと話して！」

痺れを切らしたなのはがそう言って詰め寄るが仮面の方は何も喋ろうとしない。

「困ったなあ……………このままだと何の情報も得られない……………」

フェイトは顎の下に手を置いて考える。

「なんとか言ったらどうなんだ!？」

クロノは何も答えない仮面の人に少し苛立った様子で問い詰める声が大きくなっている。

「……………」

仮面の方はそれでも喋らない。

「わふ……………喋ってほしいのです」

ハチは耳を伏せて聞いているがそれじゃあ多分逆に話してくれないと思う。

「まったく……………なんであんな連中に協力してんだか……………」

アルフは何も話さない仮面の方の様子に呆れていた。

「……………こうなったら奥の手だよ……………ねえクロノ?この人

をこのまま時の庭園に連れて行こうよ」

そんないきなりの私の提案にクロノは首を傾げながら

「どうして時の庭園に連れていくんだ？尋問なら別にここでもできるだろう？」

不思議がっているが私には考えがあった。

「えつとねクロノ？この人簡単に話してくれそうにないみたいだから時の庭園の………訓練室で尋問してみるのが一番良いと思うんだけど………」

その言葉を聞いた瞬間にクロノは怒ったような表情を浮かべたけど私が仮面の人に分からないようにクロノにウィンクしたのを見ると納得したのか

「そうだな……………少し荒つばいが今は少しでも早く情報が欲しい  
……………フラン、壊さない程度で頼むぞ?」

真剣な表情を浮かべてそう言った。

「!!!!!!!!!!!!!!?」

私の話にくろノが折れた様子を見た仮面の人は声にならない叫び声をあげている。

「まあ仕方ないよね?話してくれないんだもん……………」

私は仮面の人に見えないように振り返ってなのは達に笑いかけると

「!?!……………そうなの!!仕方がないの!!」

最初は驚いたようだけど私達がしたい事が分かったのかなのは声を大きくしてそう言った。

「なら私はバルディッシュの新しい形態を試してみたいな」

フェイトはバルディッシュを取り出して仮面の人に怪しげな笑みを向ける。

「な、何を言つて……………それにそんな事許されるはずが……………」

とうとう抑えきれなくなつたのか口を開き始めた。

だから私は

「バレなきゃいいの えへへ 今度はヘルがあるからスペルカードを全部試してみようかな」

トドメを刺してみた。

ತನ್ನ

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい！は、話す！  
いや話しますからそれだけはやめてくださいいいいいいい  
いいいいいい！！」

あつさり陥落



仮面の方はガタガタと震えながら話しはじめた。

「私はただ監視してただけだ……………闇の書が完成するのを……………」

「それはなんの為に？誰の指令で？」

私は息を尽かせる間もなく仮面の人を問い詰める。

「そ、それは……………」

仮面の方は口ごもるが

「答えて！！……………下手な嘘はすぐに分かるよ……………」

ガシュン！ガシュン！

《カートリッジロード！レーヴァテイン！》

私はそう言っただけヘルを使いレーヴァテインを呼び出すと

「こ、答えますー！！……………私に指示を出したのはグレアム……………  
…ギル・グレアム……………です……………」

そう答えた。

「な！？グレアム提督だ！？それは本当なのか！？」

その名前に反応したのはクロノ。

「……………本当だよクロノ……………とうとうバレちゃったね……………」

そんなクロノの様子を見ながらどこか諦めた様子の仮面の人はどこかクロノに親しげな口調で話し始めた。

それに対してクロノは訝しげな表情を浮かべる。

「どういう事だ？ 僕はお前に会った事はないはずだ……………待てよ……………  
グレアム提督の指示？……………まさか！？」

そしてクロノは何かに気が付いたのか目を見開き仮面の人を見つめる。

「そうだよクロノ……………私はお父様の使い魔のアリアだよ……………それにロッテも私と一緒に行動してる」

そう言っつて仮面の人……………アリアは変身魔法と仮面を外した。

「何故だ……………何故グレアム提督とアリア達が彼らに協力しているんだ！？」

クロノは少し興奮した様子でそう叫ぶ。

その様子を見ていたアリアは俯いたままゆっくりと話し始めた。

アリアいわく闇の書のせいでクライド……クロノのお父さんが死んだ時にグレアムは二度とこんな悲劇を繰り返さない為にも闇の書を完全に封印する事を決意し、闇の書を捜し続けついに闇の書の転生先を突き止める事に成功。

闇の書は再生機能や転生機能があるので完全破壊は不可能の為、闇の書が完成して完全に暴走する前に現在制作中のデバイス デュランダルの氷結封印で封印する計画だったらしい。

そしてその為闇の書を完成させようと邪魔が入らないようにアリア達が監視していた。

そこまで話したアリアは一度話すのを止めた。

「……………そうだったのか……………グレアム提督はまだあの時の事を……………」

話を聞いていたクロノは落ち着きを取り戻したのか俯いていた。

「クロノ君……………」

「クロノ……………」

なのはとフェイトは心配そうにクロノを見るがクロノは首を振って顔を上げて

「大丈夫だ……………この事は管理局の局員である僕がなんとかする」

力強く頷く。

「それじゃそっちはお願いね？」

私はクロノにそう言っただけでお願いする。

「ああ！任せてくれ！」

私のお願いにクロノは胸を張って答えた。

その様子を見ていたアリアはクロノの事をどこか眩しそうに見詰めて

「大きくなったわね……………クロノ……………」

そう言っていた。

「それじゃあ闇の書の主について教えてもらおうか」

これからの事について話終わったクロノはアリアに闇の書の主について聞いた。

すると

「……………フランドールだったっけ？多分聞かない方が良いと思うよ？」

アリアはいきなり私にそう言ってきた。

「ど、どういう事？私に何か関係あるの？」

私は急に話を振ってきたアリアに驚きながら聞くと

「……………覚えてないかい？最初に会った時に言った事……………」

アリアはゆっくりと私の目を見ながら話す。

「最初に言った事？……………確か……………ッ！？」

……………ま、まさか……………う、嘘だよね！？まさかそんなはずは……………  
……………」

私は最初にアリアに言われた事を思い出して頭が真っ白になった。

もし今私が思っている事が本当だったら……………

でも彼女は足が不自由なだけでとっても優しくて明るい子……………

そんな彼女が闇の書の主なんて……………

「……………残念だけど今考えている事は正しいよ……………彼女が  
闇の書の主だ……………」

アリアはそんな私の目を見ながら悲しそうにそう告げた。

「そ、そんな……………はやて……………」

それは胸が引き裂かれる思いがした……………

.....八神 はやてが闇の書の主だなんて.....

「フランちゃん!？」

「フラン!？」

「ますたー!!！」

みんなの声が聞こえる。

「あ.....れ.....?」

いつの間にか視界いっぱいには床が見える。

その視界も歪んで見える。

私……………どうしたんだろう……………

そんな事を思いながら私の意識はゆっくりと薄れていった……………



第35話 A・S編

ほの暗く底の見えない闇の中……………

私は一人堕ちていく……………

ここがどこなのか……………

何故こんな所にいるのか……………

分からないままに……………

「……………私は……………」

何も考えられず、ただ痛む胸を抱きしめて堕ちていく……………

暗く、心乱されるこの壊れた世界を懐かしく思いながら……………

.....いつそこなに胸が痛むのなら.....

友達なんて.....

心なんて.....

無くなってしまうばいいのに……………

「……………ダツタナクシテアゲヨウカ？」

何も見えない闇の中、そんな声が聞こえてくる。

そして誰かが私の背中に抱き着いてゆつくりと私を抱きしめる。

私を抱きしめてくれるその存在は私にとって懐かしく、どこか落ち着くような感じがした。

「アナタハワタシヲワスレテタケド、ワタシハアナタヲズットマツ  
テタ……………」

「どうやら”それ”は私がここに来るのを待っていたらしい。」

「……………待たせてしまつてごめんね……………」

私は謝る。

私が忘れてしまつていた”それ”に痛む胸を抱えたまま……………

「……………イイヨ？ ダツテアナタハココニキテクレタ……………  
ソレダケデイマハイイヨ」

”それ”は優しく私を抱きしめる。

心の隙間にゆっくりとナニが入ってくる……………

私が忘れていた”それ”は私を侵食していく……………

もっと温かくなりたい……………

そう思い私は自分を抱きしめる手を強く握る。

「ダイジョウブ…………アナタノソバニハワタシガイルヨ？」

”それ”の言葉は甘い悪魔の囁き…………

その毒を私は…………

「「ダッテ…………アナタハワタシデ、ワタシハアナタダモノ」」

受け入れた……………



心優しき幼く紅い吸血鬼は願いを叶える奇跡の青き宝石で自分の中  
に封じた”忌むべきモノ”と再び一つとなる……………

その幼く紅い吸血鬼を蝕む”忌むべきモノ”の面前……………

人はそれを『狂気』と呼ぶ……

[illegible]

狂う少女は全ての破壊を望む……………

その目から一筋の涙を流しながら……………

第36話 A・S編

「ガフツ……………く……………あ、主……………お逃げ……………ください……………」

身に纏う服はボロボロでいつも素振りをしていた愛剣は半ばから碎け散り、腹部から血を流す私の騎士であり家族でもあるシグナム

「う、嘘や……………なんで……………なんで……………」

目の前の光景が信じられない……………

「う……………う……………」

声のする方を見ればシャマルが血まみれになり壁に埋まって呻いていた。

「……………シ、シャマル……………ッ！？ヴィータとザフィーラは！？」

私はこの場にはいない二人を捜すと

「……………アノワンチャントアカイコニハニゲラレチャッタ」

不意に私の後ろから聞いた事のある声が聞こえた。

だ<sup>が</sup>ど私の知<sup>ら</sup>つて<sup>る</sup>その声はも<sup>っ</sup>と優<sup>し</sup>く明<sup>る</sup>く<sup>て</sup>何<sup>よ</sup>り

こんなに寒気のするような喋り方はしない……………

「フランちゃん」

私は車椅子ごと後ろを向くとそこにはいつも着ている赤い服をさらに赤く染めて微笑を浮かべるフランちゃんがそこにはいた。

ソボアソボアソボアソボアソボアソボアソボアソボアソボア  
ソボアソボアソボアソボ……」

フランちゃんはまだで傷が付いて何度も同じ部分を再生するCDみたいと同じ言葉を繰り返す。

それはまるで……

フランチゃんが壊れてしまったかのように……



「…………どうして…………どうしてこんな事に……………」

思わずそんな呟きが私の口から漏れてしまった。

私はただ大好きな家族と一緒に毎日を過ごし、  
友達のレストランちゃんと一緒に遊びたかっただけなのに…………

「どうしてこんな事になるんや!!」

この理不尽な状況に思わず泣きながらそう叫んでしまった。

なんでこんな事になったのか……………

その理由も分からずに……………

「……………禁忌……………」『レーヴァテイン』」

そんな言葉とともにフランちゃんの手には紅蓮の炎を撒き散らす剣が現れた。

「フ、フランちゃん……………」

その剣をゆつくりと振りかぶり顔を俯かせながらフランちゃんは私に近づいてくる。

「……………」「ワレチャエ……………」

「え？」

それは本当に小さな呟きだった。

「.....トモダチモ.....」  
.....ココロモ.....  
「.....タイセツナモノハミンナ.....」

私の目の前まで来るとフランちゃんは顔を上げて



顔は悲しみに満ち溢れ、その綺麗な赤い瞳からは溢れる涙を流し続けて……………

炎の魔剣が私に迫る。

でも……………

それほど恐怖を感じる事なく………

ただ、苦しむフランちゃん顔をみつめながら………

ただ私はその時を待った。

しかし、フランちゃんの剣が私に届く事はなかった。

ギシッ！！

「ッ！？」

フランちゃんの体には凄まじい数の光の鎖が巻き付いて、身動きがとれなくなっていた。

「……………間に合ったの」



「フラン……………」

「それだけはやっちゃダメなのですますたー!!」

そんな私と変わらないくらいの女の子の声が聞こえる。

「無事かはやて!？」

「……………シグナムにシャマル……………遅くなつてすまない」

ヴィータとザフィーラは彼女達に助けを求めに行き連れて来てくれたみたいや。

どうやら私は助かったようやね……………

でも……………

バキン！

フランちゃんを拘束する光の鎖が一つちぎれた。

「ウウウウウウ……」

フランちゃんは低く唸りながらさらに鎖を壊していく。

「……………ミナコワレチャエ……………」

フランちゃんは止まらない……………

「トモダチモココロモ……………ミナ……………ミナコワレチャエ！」

その目に悲しみと狂気を宿したまま……………



第37話 A・S編

ドガン！

巨大な結界が張られた空間の中でそんな爆発がある一軒の家から響き渡る。

暴走状態のフランちゃんからはやてちゃんを間一髪のところでは助けた後、私達はフランちゃんの攻撃を室内で避けて戦うのは無理だと判断し、私のディバインバスターでフランちゃんを牽制しつつディバインバスターによって開いた穴から脱出した。

その時に人間形態になったザフィーラさんがシグナムさんとシャマルさんをヴィータちゃんがはやてちゃんを抱き抱えて脱出したのだけれど……………

「フッフ ドコニイクノ？」

一時撤退しようとして空を飛んでいたらフランちゃんに先回りされてしまった。

どうしよう……

「……………なのは達は先に行くのです……………ここはハチがますたーの相手をするのです」

不意にハチちゃんがそう言ってスペルカードを構えた。

「ハチちゃん!?!」

「ダメだよハチー!!」

私とフェイトちゃんはそんな無謀な真似をしてほしくなくてハチちゃんを止めようとしたけど……………

「わふ……………今は怪我してる人や動けない人がいっぱいいてみんな戦いづらいのです……………だからハチがますたーを足止めしてる間に急いで怪我してる人達を結界の外に置いてくるです……………そして結界を張ってくれたアルフやユーノも連れてハチを助けに来てほしいのです」

ハチちゃんはそう言ってフランちゃんを見つめたまま動こうとしないでくれない。

「……………確かにその娘の言う通りだな……………出来るだけ早く戻る……………行くぞヴィータ」

今まで黙っていたザフィーラさんがいきなりそう言っただけでその場を離れた。

「……………死ぬなよ……………」

「ヴィータ！？ちょっと待ち……………」

ヴィータちゃんも何か言いかけていたはやてちゃんを連れて離脱した。

「なのは達も早く行くのです！！あの二人は怪我してる人達を抱えたりしてるから無防備なのです！！」

ハチちゃんは私達に二人を護衛するように言う。

「……………必ず……………必ず戻って来るの！！」

「死んじゃダメだからねハチ！！」



私達はそう言ってその場をハチちゃんに任せて離脱した。

でも……………

本当にこれで良かったのかな？

~~~~~



だから………

恐怖のあまり溢れ出す涙を右手で拭い、こちらもスペルカードを掲げる。

「……………しょ、勝負なのですますたー!!」

震える声を抑え、大きな声でハチはますたーと戦う事を宣言したのです。

それを見たますたーはまるで頬が裂けるような笑顔を見せると……

……………

高密度の弾幕をいきなり放ってきた。

「ッ!?!」

咄嗟にますたーから習ったグレイズという方法で弾幕を回避する。

そのたびにジジジッと弾幕が掠る音がしてまた怖くなる。

それでも恐怖で溢れ出した涙で前が見えなくなりながらも必死にグレイズを繰り返してますたーに近づいていくと……………

「禁忌『クランベリートラップ』」

ますたーが早速一枚目のスペルカードを発動させた。

だけどここの弾幕は知っている……………

ますたーと一緒に弾幕ごっこをしていたからこのスペルカードのターンは知っているのです!!

そう思いながら向かって来る弾幕を回避していく。

ますたーと練習した時の事を思い出しながら……………

そして……………

「ここなのです！！棒苻『犬も歩けば棒に当たる』」

ますたーのスペルカードの限界時間を迎えた瞬間に最初のスペルカードを発動させた。

すると周囲に入り込めない程の弾幕が展開されますたーが後ろに下がっていく。

しかし近寄らず、ますたーが離れると左右から弾幕が襲い掛かってきた。

「ッ！？」

それを驚きながらも回避しますたーは





「射符『犬潜り狙い撃ち』」

スperlカードが発動するとある程度隙間のある弾幕が現れた。

しかしますたーはその隙間を縫うようにこっちに向かって来る。

うまくいったのです！

その隙間を潜ってきたますたーに高火力の弾幕を大量に放った。

それを見たますたーはすぐに回避しようとするが最初に空いていた隙間が無くなって逃げ場を失っていた。

仕方なくますたーはその場でグレイズして避けていく……………

「これで決めるのですー!!」

早く終わらせたい……………

そんな思いで弾幕の密度を高めてさらに放つ。

しかし

「フフ 禁忌『恋の迷路』」

ますたーは笑いながら色とりどりの弾幕を自分を中心にして、円状に放ってきた。

「わ、わふ!!」

急な反撃に驚きながらも回避する。

しかし

ドガッ！

「あうっ！！」

一発の弾幕が 그레이ズ仕切れずに右腕に命中した。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！

当たったのはたった一発でそれほど傷は深くないのにすごく痛くて怖くて……………

逃げ出したくなった……………

「……………あ……………ああ……………」

抑えていた恐怖が心を満たしていく。

体が震えて動けなくなる。

ますたーはあの怖い笑みを浮かべながらこっちを見ている。

「..... 負けないのです」

「？」

ますたーは小さく呟いたわたしの言葉に首を捻る。

だから.....

「負けないのです!! 絶対にますたーを元に戻してみせるのです!!  
!.....一度は失ったこの命.....ますたーの為に使う  
のなら惜しくは無いのです!!」

そう言って新たなスペルカードを構えた。

なのは達はまだ戻らない。

いつまで持つか分からない苦しい戦いは続く.....



第38話 A・S編

「虚符『犬の遠吠』」

そう宣言してスペルカードを発動させると速度の遅い、大量の巨大な弾幕が展開した。

「……………」

ますたーは危険だと判断したのか後方に下がり一旦距離を開ける。

うまくいったのです……………

ますたーが後方に下がるのを確認してすぐに新たなスペルカードを構えた。

しかしその一連の行動を不信に思ったのか、ますたーは通常弾幕をハチが展開した弾幕にぶつけてくる。

すると普通なら小さい方の弾幕が威力が高いはずの大きい弾幕に負けるはずなのに、小さい方の弾幕に当たった大きな弾幕はどんどん消えていってしまった。

何故そんな事が起きたのか……………

その理由として虚符『犬の遠吠』は逃走用のスペルカードである事があげられる。

元々虚符『犬の遠吠』は偽りの弾幕を展開して相手から逃げる為の

スペルカード……………

だから普通初見なら必ず引っ掛かってくれるはずであると信じて使ったのだが……………

もう少し時間が稼げると思ってたのに……………

「禁忌『フォーオブアカインド』」

またーは自分を四人に増やして虚符『犬の遠吠』の弾幕を消し去っていく。

その様子を見ていて決意したのです……………

ハチは……………

負けるかもしれない賭けをする事にしたのです……………

「……………これは……………ますたーとの絆なのです!!修災」  
「難去ってまた一難」

ますたーが最後の弾幕を破壊した瞬間にそう宣言してスペルカードを発動させた。

そのスペルカードは最初に円の弾幕を打ち、その後に通り返したと思ったらまた戻って来る……………

そんな効果を持つ弾幕だった。

そしてそれはあるスペルカードの弾幕によく似ている。

「この弾幕はますたーの弾幕をモチーフにして作ったスペルカード  
……ハチとますたーの絆の証なのです!!」

ハチはそう宣言し自らも弾幕を放つ。

フランは自分の分身達とともに回避しようとしたが間に合わず分身  
二体が弾幕に巻き込まれ消滅してしまう。

そしてフランは気が付いた。

この弾幕は……………

自分のラストスペルの……………

Q E D 『495年の波紋』

に似ている事に……………



ズキッ

「ッ!？」

そんな声にならない言葉とともに不意にますたーの顔が歪んだ。

そして頭を抱えて苦しみだした。

「思い出すのですますたー!!あの優しくて温かくて.....いい

つもみんなの事を思ってくれていた思いやりに満ちたあの暖かい心を！！」

ますたーに向かって手を伸ばす。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ああああアアあああああああああああああゝ！！」

ますたーの目に涙が浮かび苦しみ続ける。

しかし、その声は確かに元のますたーの心が感じられた。

そんなましたーに近づこうとスペルカードを解除して手をさらに伸ばす……

「……………サセナイ……………禁弾『スターボウブレイク』」

ドガガガガガガン！

「きゃううううう！！」

それは突然だった。

ますたーのスペルカード 禁忌『フォーオブアカインド』で現れた  
最後の分身からの突然の攻撃……………

それを回避する事も出来ずに連続で被弾した。

激痛が全身に走り、何も考えられなくなる……………

「……………つ…つ…つ…つわう……………」

痛みのあまり地面に落ちないよう意識を集中して空中にとどまった。

「ダメだよ？ワタシヲワタシカラヒキハナソウナンテ……………ソ  
ンナコトサセナイヨ？」

突如攻撃してきた存在……………

それはますたーを蝕む”狂気”だった。

狂気はあの冷たい笑みを浮かべてこちらを見る……………

「……………なんで……………なんでこんな事をするのですか!?!」

後少しですたーを元に戻せた……………

あとほんの少しだったのに……………

そんな悔しさを滲ませながら叫んだ。

すると狂気は笑いながら

「……………ダッテソレジャアツマラナイモン」

そう言って新たなスペルカードを取り出す。

「ッ!？」

そのスペルカードには見覚えがあった。

そのスペルカードはますたーの使うスペルカードの中で最悪に近い存在……………

前回は万全の状態の自分が放ったラストスペル 禁断『戻りゆく世

界』でスペルブレイクすることができた……………

だが今は……………

修災『一難去つてまた一難』を放った後で、ラストスペルはおろか、通常弾を放つのも難しい……………



「……………ワタシヲワタシカラヒキハナソウトスルイケナイツ  
カイマハ……………コワサナキヤ……………秘弾『そして誰もい  
なくなるか?』」

そう宣言した瞬間……………



あまりの衝撃と激痛に意識が明滅を繰り返す。

全身ボロボロになり、所々血が噴き出して左手は変な方向に折れ曲がっていた。

「……………ヒュー……………ヒュー……………」

息をするのがやっとの状態になった八チを見た狂気は

「クルシソウダネ?……………ワタシヲワタシカラヒキハナソウトス  
ルカライケナインダヨ……………コレデソンザイソノモノヲケシテ  
アゲル

罪と罰、今ここに交わりてすべてを穿ち薙ぎ払わん……………

集まりし力は沈黙をもってすべてを示し暴虐の限りを尽くす……………

禁忌……………

『アポカリプスブレイカー』

狂気はフランが編み出した殲滅砲撃魔法を咏唱する。

巨大な魔法陣が展開し、赤黒い閃光を放つ。

「……ます……たー……」

ハチは自身の血に染まった震える右手を狂気の方に伸ばす……



第39話 A・S編

フランちゃんが巨大な魔法陣を展開してとんでもない魔力を込めているのが見えた。

その照準の先にはボロボロになったハチが……………

「まずい！！僕の心のオアシスであるハチが危ない！！」

そんな欲望まみれな発言をするのはユーノ君……………うつん色ボケた知らない男の子

というか知り合いですらあってほしくないの。

「……………だがこの小僧の言う通りだ……………あの可愛いロリケモノ……………ゴホン！あの娘を助け出さねば……………」

.....ザフィーラさんが同類だったなんて.....

「世界はこんなはずじゃなかった事ばかりなの.....」

私は思わずそう呟いた。

「.....ってそれは僕のセリフだ!..」

クロノ君はそう言って怒っているけどなんで怒っているのか分からないの。

「そんな事よりなのは!..このままじゃハチが!..」



「そうだよ!! あの子がフランに殺されちゃうよ!!」

フェイトちゃんとアルフがそう言って先を急ぐ。

しかしここからでは間に合わない。

このままじゃハチちゃんが……

最悪の考えが頭を過ぎる……

「……………待ちな! 私にいい考えがある」

速度をさらにあげようとした私達に追走していたヴィータちゃんが声をかけた。

「いい考え？」

「ヴィータ！早く教えて！！」

その言葉に私は首を傾げフェイトちゃんはヴィータちゃんを問い詰める。

「お、落ち着けよ！……………いいか？このままじゃ間に合わないのは確かだ……………だからコイツを使う」

ヴィータちゃんがそう言って私達に自分のデバイス グラフアイゼンを見せる。

「アイゼン？なんの為に使うのさ？」

「何か便利な機能が付いてるのか？」

アルフとクロノ君が首を傾げてアイゼンを見つめる。

そんな中ヴィータちゃんはユー……………色ボケた知らない男の子に

「おい！ケモノになれ！！」

そう言って首を掴む。

「ぐえ！！い、いきなり何するんだ！！僕はハチを早く助けなきゃ……………」

そんな風に怒って何か言いかける y……………色ボケた知らない男の子にヴィータちゃんは

「ケモノになればあのハチって奴を助けられるぞ？」

ニツコリ笑いながらそう言った。

「きゅう」

すると色ボケた知らない男の子は色ボケたフェレットに一瞬で変身した。

「……………愛の為ならなんでもできるあのケモノは凄いの……………尊敬はしたくないけど……………」

それを見ていた私がそう言つとみんなが頷いた。

「むう…………ロリケモノにフラグを立てる気だな!?…………羨まし  
い…………」

若干一人変な事を言っているみたいだけど…………

「それで…………どうするつもりなの?」

準備が整った所でヴィータちゃんにそう聞くと…………

「じつちのちゅー！アイゼン！ー！」

# 《ギガントフォルム》

ヴィータちゃんがグラーファイゼンに合図するとグラーファイゼンがとんでもなく大きくなった。

[illegible]

色ボケたフェレットは自分はどうなるのか理解したのか叫び暴れる。

「うるせえ！！逝っけええええええええええ！！カート  
リッジロード！轟天爆碎！ギガントシューラーク！！」

そんなフェレットをヴィータちゃんは問答無用でぶっ飛ばした。

「字が違…………ぎゃあああああ  
ああああああああああああああ  
ああああああああああああ！！」



「今行くよおおおおおおおおおおおおお  
！！マイハニイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイ！！」

ケモノは開き直ったのかそんな事を叫びながらハチちゃんの下にす  
っ飛んでいく。

聞くに耐えない叫び声だが今は我慢する。

今はハチちゃんの救出が先だ。

後少しでハチちゃんの下にケモノが届く。





そしてフェレットは驚愕の声をあげながら地面に叩きつけられる。

「『アポカリプスブレイカー』」

さらに赤黒い閃光がフェレットを包み込んだ。

「ハチ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
」

命中

ズッ  
ガーーーーー  
ン！！

色ボケは滅んだ……………

まあそんな事はどうでもいい。

それよりも今はハチちゃんを助け出したあの赤い”ナニ”かを見つめる。

「……………嘘……………あれはまさか……………」

フランちゃん!?!」

アポカリプスブレイカーによって生じた爆煙で見えにくいけどあの七色に光る宝石の付いた羽は見間違う事はない。

「……………よく頑張ったねハチ……………もう大丈夫だよ？」

フランちゃんはボロボロになったハチちゃんを抱き抱えて優しい声をかける。

「……………ますたー……………ハチは……………頑張ったの……………です……………」

ハチちゃんは泣きながら動く右手でフランちゃんを弱々しく抱きしめる。

「うん……………聞こえたよ？ハチの声はちゃんと聞こえてた……………私を呼び戻してくれてありがとねハチ？」

フランちゃんは涙を流しながらハチちゃんの頭を撫でた。

「……………フラン（ちゃん）……………」

私達がフランちゃんの下に集まると

「ハチをお願い……………」

フランちゃんはハチちゃんをアルフに預けた。

その時に

「何故だ……………何故我ではない……………」

ザフィーラが血涙を流していたのだが気にする人はいない。

「誰も手を出さないで」

フランちゃんはそう言って私達に背を向ける。

「そんなの無理なの!！」

「そつだよフラン!一緒に戦うよ!！」

「君の為なら戦える!！」

「まあ私もあいつに借りがあるからな」

若干一人変な事を言っているけど私達はデバイスを構えてフランチ  
やんの隣に並んだ。

でも

「.....ありがとう.....でもね？これは.....」

私の問題だから……」

そう言って翼を広げてこちらを睨みつけるもう一人の自分の下に飛んでいった。

第40話 A・S編（前書き）

オリジナル設定注意



第40話 A・S編

「……………待った？ごめんね？」

私は自分を睨みつけるもう一人の自分に親しみを込めてそう言つと

「……………なぜ？……………アナタハワタシデワタシハアナタナノ  
二……………ドウシテウラギッタノ？」

絶望したような表情を浮かべたワタシが私にそう聞いてきた。

私は笑顔を浮かべて

「裏切つてないよ？私はね……………」

あなたを迎えに来たんだ」

私はワタシに手を伸ばす。

「?.....ムカエニキタ?」

ワタシは私の言葉に首を傾げる。

「そうだよ?.....」 狂気” という名のもう一人のワタシ」

私は手を伸ばしたままワタシに近づいた。  
しかし

「ウソダ！アナタハワタシヲウラギッタンダ！！コワレチャエ！！」

ワタシはそう言って魔力球を私に向かって放った。

《プロテクション》

ガキユン！

「ありがとうヘル」

ワタシの放った魔力球は私に届く前にヘルが張ってくれたプロテクションの前に弾かれた。

私は次々に向かってくる魔力球をヘルが張ってくれたプロテクションで弾きながら前に進む。

[illegible]

そんな私を見たワタシはまるで私の事を恐れるかのように魔力球を放つ。

でも私はワタシを見つめ、手を伸ばして進み続けた。

やがてワタシは涙を流して魔力球を放つのをやめた。

そんなワタシを見た私はヘルにプロテクションを解除するように指示を出す。

《……イエスマスター》

ヘルは少し迷ったようだが私の指示に従ってプロテクションを解除した。

主人思いのいいデバイス…………ハチと一緒に私には勿体ない…………

- 
- 
- 
- 
- 
- 
- 
- 
- 

そんな事を考えながら私はワタシの下に進む。

そして……………

ぎゅ

そのまま抱きしめた。

「……………アタタカイ……………」

もう一人のワタシはそう言ってされるがままになる。

そんなワタシに私は

「……………あの時……………」『フォーオブアカインド』であなたと別れる  
までの間……………あなたと一つになっっている時に気が付いたんだ  
……………本当は寂しかったただけなんだよね？いつも一人で寂し  
くて怖くて辛くて誰かに構ってもらいたくて……………でも  
それが叶う事もなく、いつも何かを壊していく事でそれを覆い隠し  
てた……………それが昔の”私達”……………

今の私にはその時の記憶は無いよ？

でもね？

あなたと一つになった時にそれを感じとる事ができたんだ.....

だから分かる.....

そんな事を繰り返していたら心はいつか壊れちゃうって.....

.....長い時の中で繰り返し何かを壊し続けた”私達”はいつの間にか自分の中で二つに別れてしまった.....だから.....  
.....私の中で別れてしまったもう一人の自分.....それがあなた」

ワタシの耳元でそう呟いた。

もう一人のワタシ驚いて私の顔を見る。

そんなワタシに私は笑いかけて

「私はあなたを受け入れる……………だからあなたも私を受け入れて？……………また一つになるう？壊れてしまう前の私達に帰ろう？」

もう一度、今度は強く抱きしめた。

「……………ホントウニ……………モドッテイイノ？……………ツ



ラクナイ？クルシクナイ？イタクナイ？コワクナイ？カナシクナイ？」

ワタシは私にそう問い掛ける。

私はワタシに微笑みかけて

「大丈夫………私には………ううん私達には辛い時や苦しい時や痛い時や怖い時や悲しい時に………支えてくれる友達がいるから」

そう言って後ろの方で心配そうに見守るのは達をワタシに見せる。

「もちろん私もいるよ？ね？だから……………戻っておいで？」

いつの間にか涙を流すワタシに私はそう言った。

「……………でモワタシはハチャミンナに悪いコトしちゃったンダヨ？……………ソレでモ……………」

ワタシは涙を流しながら私にそう訴えてくる。

「……………そんなの謝ればいいの！！！」

「ッ！？」

突然響き渡るなのはの声に驚くワタシ。

「そうだよ!!悪いと思ったんなら謝ればいいんだよ!!」

フェイトも大きな声を出してそう言うてくる。

他にもアルフにクロノ、ヴィータや重症のはずのハチまで笑顔でこっちを見ていた。

「……………ふむ……………手負いのロリケモノの眩しい笑顔が  
実に素晴らしい」

ザフィーラには消えてほしかった……………

「ね?みんな許してくれるって」

私がワタシにそう言つと

「……………ゴメンナサイ……………ゴメンナサイ……………グスツ  
……………ゴメンナサイ……………ごめんナサイ……………ひつく……………ひつく……………ごめん  
なさい……………ごめんなさい……………」

ワタシは泣きながら謝り、その目から狂気が消え去った。

そして泣きながら謝り続けたワタシは私の方を向いて

「……………ありがとう……………そして”ただいま”」

笑顔でそう言っ  
て私の中に吸い込まれていった……………

私は心の中が暖かくなるのを感じながら

「……………うん……………」 お帰り」

笑顔でワタシを迎え入れてあげたのだった。

~~~~~

くその後のザッフィーく

「……………これほどのロリケモノがいたとは……………YESロリ  
ータNOタツチの精神を守る紳士（変態）でなければこのまま交b  
……………」

「言わせねえよ！！アイゼン！！カートリッジロード！轟天爆碎！

ギガントシューラーク!!」

ドガン!

「ぐおお!!.....口、ロリケモノ.....最高.....かはあ  
!!」

ドサア!!

「.....ふっ.....またつまらねえモンを潰しちゃったぜ.....  
.....」

く完く





桃源郷だった。

「…………あう…………は、はやてえ…………そんなに…………んう…………激しく…………あふあ…………しないでえ……………」

頬を赤く上気させる全裸のフランちゃんはどこか色っぽくて、背徳感に満ちていた…………

「まったく……………同い年なのにこんなイイモノが育ってるなんて隅にも置けんなあフランちゃん　ここがええのか？ええのか？ほれほれほれ」

対するはやてちゃんは怪しい笑顔と手つきでフランちゃんを攻め立てる。

「……………ゴクリッ……………ハッ！じゃなくて何してるのはやてちゃん！！」

私は慌ててはやてちゃんからフランちゃんを引き離す。

「……………ブハッ！……………ダバダバダバダハ！！」

ボタン！

フェイトちゃんは刺激に耐え切れずに戦死してしまった。

「くっ！なんて強力な攻撃なの……………フェイトちゃんがやられちゃったの……………」

私は涙目でまだ色気漂うフランちゃんを自分の後ろに隠して、はやてちゃんから距離を置こうとしたのだけど……………

「今やリンフォース!!」

「ムツハアー! 幼女最高おおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおお!! しかも希少価値のある口リ  
巨乳の原石をGETおおおおおおお!! ヒヤッハー!!」

「きゃ!?!」

後ろから現れたリンフォースにフランちゃんを盗られちゃった!!

「しまった!?! レイジングハート!!」

《スタンバイレディ セットアップ》

私はレイジングハートを素早くセットアップするとリンフォース（変態）の後を追った。

「デイバイ〜〜ンバスター!!!」

はやてちゃんに制裁を加えて

「ちょ！？待っ……………アーツ！！」

黒焦げでアフロになる全裸のはやてちゃんをそのままに私はフランちゃんをさらったリインフォースを捜す為に念話をヴィータちゃんとシグナムさんに繋ぐ。

『ヴィータちゃん！！シグナムさん！！緊急事態なの！！』

するとすぐに

『事情は既に分かっている』

シグナムさんからどこか疲れたような口調の念話が返ってきた。

『ふえ！？？どういう事なの！？？』

私は混乱しながらシグナムさんに事情を聞こうとしたのだけど……

……………

『……………うちの恥知らずな主と管理人格のやりそうな事くらいすぐに分かる……………はあ……………』

なんかシグナムさんは苦労人なの……………

『……………今度翠屋のケーキを持ってきます……………』

かわいそうに思った私はそんな苦労人のシグナムさんにそう提案すると

『ならばショートケーキを所望する』

シグナムさんが真剣な雰囲気<sup>マシ</sup>を滲ませてそう返してきた。

『ラジャー  
了解』

その雰囲気<sup>マシ</sup>があまりにも真剣過ぎて思わず私は思わずそう返した。

『よし！そうと決まればさっさと変態<sup>ラインフォース</sup>を仕留める（捕まえる）ぞ！  
』

なんだか言ってる事と思ってる事が反転してるけど気にしない事にするの。

『あゝ…………盛り上がってる所悪いんだけど……………リインフォース変態なら私が叩き潰したぞ?』

それは今まで返事すらしなかったヴィータちゃんからだった。

『何!? ヴィータ!? お前は私の唯一の楽しみである翠屋のショートケーキを奪うつもりなのか!?』

……………シグナムさんがショートケーキが食べたいのは分かったから少し自重してほしいの……………

『ち、違うぞシグナム!?……………一人で眠っていたハチにハアハアいいながら添い寝しようとした駄犬がいたんでアイゼンでしつけ(制裁)してたんだ……………そしたら血走った目をした変態が全裸リインフォースのフランを抱えてこっちにきたからギガントシユラークで叩き潰しちゃった……………ただそれだけの事さ』

『……………』

……………ザフィーラは消えた方が良かったと思うの……………

なんでこんな事になったのか……………

そう思いつつ激しい戦いのあった昨日の事を思い出していた。

~~~~~



「……………というわけで闇の書……………いや、夜天の書はバグの影響でこんなとんでもない魔導書になったって訳なんだ」

戦いの後にアリアさんが書を手に持ちながら闇の書……………夜天の書について説明してくれた。

それを聞いたフランちゃんは

「へえーそうなんだ……………ならそのバグを壊しちゃえばいいんだ……………キュとしてドカーン！」

手の平に集まったナニかを握り潰した。

「……………「ゑ！？」……………」

「わふ！流石ますたーなのです！！」

「うむ、喜ぶロリケモノもいいものだ」

驚く私達をよそに自分のレアスキルで傷を癒し、フランちゃんのだ事に素直に喜ぶハチとそれを見て喜ぶザフィーラ……………と  
　　うか駄犬

……………できればバグと一緒に消えてほしかったの……………

「多分これでもう大丈夫だと思うよ？」

フランちゃんはそう言って夜天の書を茫然自失なアリアさんから受け取り、はやてちゃんに渡した。

「あ、ありがとうなフランちゃん……………えと……………管理人格召喚！ 汝に新たな名を……………祝福の風 リンフォース！！」

はやてちゃんは夜天の書を開くとそう言った。

するとはやてちゃんのすぐ目の前に魔法陣が現れて銀髪の女の人ひざまずいていた。

そして

「召喚を確認しました……………汝に問おう……………あなたは私のマスターか？」

いきなりそう言った……………って

「それは物語が違うのー！！」

バグは取り除けたけどツツコミ所満載の管理人格……………リインフォースが召喚された。

もうツツコミ入るのが疲れたの……………

その後リインフォースは幼女LOVEな精神でフランちゃんに突撃をかけようとして私のエクセリオンモードのスターライトブレイカーとフェイトちゃんのプラズマザンバーのターゲットになった。

そしてバグが完全に消滅した事を確認したアリアさんは帰っていつ

た……………

なんでも最近まで一緒にいたロツテさんが産気づいたとの事だった。

しかもそのお腹の子の父親がどうやらグレアムさんらしいのだ……

……

自分の使い魔と子供って……………

そう思う私達だったけどこれでもう8人目らしい。

「やっぱりこの世界はこんなはずじゃなかった事はっかりなの……」

そう呟くのは仕方ないことだと私は思う……………

「だからそれは僕のセリフだあああああああああああああああああああああああ  
あああああー!!」

クロノ君が怒ってたけど気にしない。

カルシウム取った方がいいよクロノ君？

そんな訳で回想終了

~~~~~

「はぁ……………ひどい目にあつたよ……………」

あの後服を着たフランちゃんは自分の胸を抱きしめながらそう言った。

その行為がかえってこちらの精神力をガリガリと削っている事に気が付いてほしい。

今日は戦いも終わり、夜天の書の事も終わったのではやてちゃんの家にお泊りする事になっている。

「わふう〜ますた〜……………一緒にお昼寝なのですよ〜」

ハチちゃんがそう言ってフランちゃんを誘った。

「あふぁ……………うん……………そうだね……………ハチを見てたら私も眠たくなってきたよ……………」

フランちゃんは欠伸をしながらハチの寝ているソファに横になる。  
すると

「ますたー……………えへへへ……………ZZZZZZZ」

ハチちゃんはフランちゃんの胸に頭を埋めながら眠ってしまった。

正直羨ましい……………

「……………おやすみ……………ハチ」

続いてフランちゃんも眠ってしまった。



気持ちいい晴れ渡った天気の中で家の中では穏やかな時間が流れていたのだった。

番外編 3

「罪と罰、今ここに交わりてすべてを穿ち薙ぎ払わん……」

集まりし力は沈黙をもってすべてを示し暴虐の限りを尽くす……

禁忌……

『アポカリプスブレイカー』

巨大な魔法陣に大量の魔力が収束し、赤黒い閃光が辺りを照らす。

そしてその威力は凄まじく直撃した地面は吹き飛びクレーターができ、その爆風だけでも張られた結界ですらヒビを入れるほどだ。

そんなとんでもない砲撃を放つのは七色の宝石が付いた翼を持つ少女…………… フランドール・スカーレット

その瞳にはあるはずの狂気は見られず、ただ静かに爆心地を見ている。

その姿はまさに夜の覇者。

誰もがその姿に息を飲み、畏怖した。

それは大きなテーブルの上にリニスによって置かれた”デバイス”と呼ばれるカードのような機械に映し出された映像だった。

「……………これがフラン？かなり強くなってるじゃないの！？」

「ありえないんだぜ……………」

霊夢は焦ったように叫び、魔理沙は驚愕の表情を浮かべてそう呟く。それもそのはず紅魔の異変の際に霊夢はフランと一度戦っており、495年間閉じ込められていたとは思えないその強さに苦戦したのを今でも覚えているからだ。

そして魔理沙はちよくちよくフランの遊び相手として弾幕ごっこをしていた経験があり、その時のフランと今のフランの変化に驚きを覚えていた。

「……………別の世界でフランドールが成長し、強くなっているのは事実よ」

二人の言葉を聞いてそう答えたのは紫。

その表情にはどこか達観したような雰囲気を感じられる。

その言葉にこの場にいる全員が沈黙した。

「待つて紫。まだ管理局がフランドールをさらった犯人であると断定した事について説明していないわ」

沈黙の中そう紫に質問したのは幽々子。

確かにそうだ。

何故管理局がフランドールをさらった犯人であるのか……………

それを紫に幽々子が質問しその説明の為にリニスが出てきたのだが、そんな映像を見せられただけ。

これでは納得できないというのが幽々子の主張だ。

しかし紫は表情を変える事なくこう答える。

「……………この映像は管理局が保管していたものよ。ついでに言っておくけどその”デバイス”も管理局から拝借してきた物だわ……………さらに言わせてもらえば、そこにいるメイドの十六夜咲夜が仕留めたという下手人も調べたら”デバイス”から管理局所属の特殊部隊……………日陰者に関する資料が大量に出てきた……………これでもまだ納得がいかない？」

ここまで証拠が残っていると流石に幽々子も何も言えない。

「とりあえず今言えるのは時空管理局なんて大層な名前の連中がこ  
っちに喧嘩を売ってきたと言うことよ……………だつたら教えてあ  
げなければならぬわ！誰に喧嘩を売ったのかを！！」

そう宣言するのは今まで沈黙していたレミリア

従者である咲夜は表情こそポーカーフェイスだが握り絞める拳には  
血が滴っている。

その悔しさは誰が見ていても明らかだ。

「そうね……………異変を起こすバカどもを懲らしめるのが樂園の巫  
女の役目だわ」

霊夢は眉をしかめながらレミリアの意見に賛成する。

「……………私もやるぜ！人の友人をさらった事を後悔させて  
やる！！」



魔理沙は立ち上がっていつもの不敵な笑みを浮かべた。

「……………妖夢」

幽々子は静かに自身の従者を呼ぶ。

「はい!!」

妖夢はすでにやる気十分だ。

「ふふ それじゃあ異変解決の協力をお願いね？」

少し苦笑しながらも幽々子は妖夢に命じた。

「ああ、一つだけ言い忘れた事があったわ」

その言葉はその場にいた全員がやる気を出していた時だった。

「この映像は                      だから」

紫はそう言って怪しげに笑う。

「「「「「「「え!?!」「」「」「」「」

議会はさらに混乱し、その様子を見た紫はさらに笑みを深くするの  
だった……………

おまけ 2 (前書き)

これは闇の書事件から少し経った頃のお話

## おまけ 2

「出番が少ない……………」

そう言つて家の隅で体育座りをしているのはシャル

第三者から見れば金髪女性の幽霊が八神家に現れたのかと思えるほどにかなり暗い。

「最近じゃみんなに話かけられる回数もめつきり減つた気もする……………」

自分で言つた事にさらに凹んだのかシャルがいる場所だけ得体の知れないキノコなんかが生えてきそうな雰囲気になる。

「……………私って知らない子なのかな……………」

シャルはその目に涙を浮かべてそう呟いた。

「…………どうしたのシャマル？どこか痛いのか？」  
そんな自分を心配してくれる声に顔を上げると、そこには…………

七色の羽を持つ天使…………フランがいた。

「シャマル？どこが悪い…………わぁ！？びっくりした…………いきな

りどうしたのシャル？」

シャルは自分に話し掛けてくれたフランに思わず抱き着いてしまったがフランは驚いただけで引き離そうともせず、ただ泣いていたシャルの頭を撫でて優しい声をかける。

シャルは思い切って今自分が感じている事や思っている事を全部、泣きながらフランに話した。

フランは嫌な顔一つせず、黙ってシャルの話を全部聞いたところで

「……………そっかぁ……………シャルはみんなに構ってもらえなくて寂しかったんだね？……………でも、もう大丈夫だよ？今私がここにいてシャルとお話してる……………それに私はシャルにはここに居てほしいよ　　いらない子なんて思いもしてほしくないもん」

そう優しく答えてシャルを抱きしめた。

シャルは自分を認めてくれるフ란の存在が嬉しくて泣いた。

それはもう声を隠す事なく泣いた。

フ란はそんなシャルに優しく微笑みかけ、抱きしめ続ける。

そしてのちにシャルは語った。



あれが自分を変えるきっかけだったと……

「……………最近シャルルの雰囲気変わったように感じるんやけど？何かあったん？」

ある日はやてはいつもと雰囲気の違う感じがしたシャルルにそう声をかけた。

しかし

「いいえ？何もありませんでしたけど？」

シャルルは笑顔ではやてにそう答える。

「うーん……………私の気のせいなんかなあ？」

はやては首を傾げながら自室に戻っていった。

それを見送ったシャルルは……………

「……………クリアルヴィント」

自身のデバイスを起動してモニターを呼び出す。

そのモニターには公園で遊んでいるフラン達の映像が映っていた。

シャルはそれとは別のモニターを呼び出すとそこには、その公園の近くでケモノ形態になりハチを狙うザフィーラがの姿が……………

「ふふふ　そうはさせませんよ盾の守護獣？」

シャルは楽しげにもう一つのモニターを呼び出して何やら操作を始めた。

その間にもザフィーラはハチを狙って少しずつ接近していく……………

「……………チェックメイト あなたの負けですよザフィーラ」  
「？」

シャルはそんな楽しげな声で最後の仕掛けを施した。

その口には笑みが浮かんでいる。

モニターではザフィーラが一人離れた場所に移動してしまったハチに今まさに襲い掛かろうとしていた。



『…………轟天爆碎！ギガントシュラク！！』

ズガン！

『キャイン！』

モニター上でザフィーラを巨大なハンマーが押し潰している。

そして

『……………こちらヴィータ、駄犬の暴走を阻止した……………これより帰還する』

そんな通信がシャルの下に届いた。

さらに別のモニターにはフランを襲おうとしていたリインフォースがシグナムに斬り捨てられており、

『こちらも任務完了だ』

シグナムからもそんな通信が入る。

「ええ、ご苦労様」

シャルは笑みを浮かべたままそう答えてフランの映るモニターの  
みを残してすべてのモニターを消した。

「すべては我が策の内……………ふふふ……………私のすべてをあ  
なたに……………」

モニターに映るフランを愛しげに撫でるとシャルは恍惚の笑みを  
浮かべてそう呟いていた。





### おまけ 3 (前書き)

これはシャルマルがフランに忠誠?を誓った後の話

とあるニコ動の動画を見てて書きたくなった作者の駄文です。

### おまけ 3

「……………デバイスの性能実験？」

「そうなんよ……………できれば協力してほしいんやけど……………」

きっかけは、はやてからのそんなお願いだった。

実はあの事件以来、はやてのデバイスとしてリインフォースがいたのだけ……………」

「……………リインフォースがおらんかったら私無防備やん」

という主張があった為に新たなデバイスをプレシアがそれはもう大喜びで制作して3日で完成。

そして今に至るという訳である。

はやてから今はリハビリを順調に進みゆっくりとなら歩く事ができるようになっており、デバイスの補助があれば走る事も可能だと聞かされていた。

あの事件からまだそんなに月日は経っていないのにはやての頑張り

はすごい。

そう思っているよ

「……………自分の足で歩いてフランちゃん達の所に行って乳を揉む為に頑張ってるんや!!」

はやては胸を張ってそう言った。

私の感動を返して欲しい。

~~~~~

「……………という訳でやって来ました時の庭園!!」

「誰に言ってるのはやて?」

いきなりそんな事を言い出したはやてに聞くと

「分からん!でもなんか言わないかんような気がしたんや!!」

はやては爽やかな笑顔でそう言い切った。

「……………それでなんで私達も？」

そう言って首を傾げるのはなのは達……………なのは・フェイト・アル  
フ・ハチ・クロノ・ケモノとヴォルケンリッター達に変態  
リインフォース

「ちょっと待って！僕はケモノじゃなくてユーノだよー！！」

まあなんか言ってるけど気にしない。

「気にしてよ!!」

まだ喚いているケモノに

「うるさいですユー」

ハチが怒った。

「すみませんでしたあああああああああああああああ  
!!」

ケモノジャンピング土下座

だんだんハチもケモノの扱い方を覚えてきたようで、なかなかうまくなってきたようだ。

騒ぎが落ち着いた所ではやてから今回の実験についての説明があつ

た。

そして今からやるとある”ゲーム”についても……………

## ルール

？手にボールを触れさせてはいけない（キーパー以外）。

？魔法はバインド等による拘束以外使用可能（バインドはボールに使用するならOK）。

？魔法はプレイヤーに向けて放ってはならない。ただし、相手が自分から当たった場合はノーカウント。

？とにかく楽しめればOK。



まあはやてが何をやりたいのかというと単純に

”サッカー”です

「……………という訳で魔法を使ったサッカー……………名付けて第一回”魔導サッカー”を開催するで!!」

はやてはそう言って自分の新しいデバイス シュベルトクロイツと夜天の書をセツトアップする。

みんなは困惑した表情を浮かべていたが……………

「あ！ついでに言わせてもらっやけど………勝ったチームのメンバーには何か一つだけお願いを叶える事ができるんやけど………」

「………セットアップ！」

はやての一言でみんなの戦闘準備完了となった。

みんな何を願うんだろう？

そんな事を考えていたらシャルが

「このままじゃ一人余ってしまうみたいなので私は何かあった時の救護班として控えておきますね？」

そう言って抜けてしまった。

「……………いいの？」

私は自ら不参加を表明したシャルに聞くと

「はい、たぶん後でいっぱい働く事になりそうですから……………」

そう言って微笑んでいた。

そしてチーム分けは………

Aチーム

はやて

変態  
リインフォース

シグナム

ヴィータ

クロノ

キーパー・ザファイラ駄犬

Bチーム

フラン

なのは

フェイト

アルフ

ハチ

キーパー・ケモノ（ユーノ）

に決まった。

「あれ！？僕キーパー！？無理に決まっ……………」

キーパーになった事が不満なのかケモノが何か喚きそうになったけど……………」

「……………キーパーやる人はハチちゃんのカッコイイって言うたの」

すかさずなのはがそう言うて黙らせた。

……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……

「来いやあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ  
！！」

覚醒しました。

という訳でキックオフ！！

先攻はAチームから

はやてがボールに足をかけて……………

「リインフォース!!」

隣の変態に<sup>リインフォース</sup>パス!

だが、その瞬間既にチャージの終わっていたのはが

「デイバイ……ンバスター!!」

砲撃

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

Aチーム……………特に変態<sup>リンフォース</sup>が驚愕の表情を浮かべ……………

チュドーン！

変態くん吹っ飛んだああああああああああああ！！  
<sup>リンフォース</sup>

「リンフォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオス！！」

はやて絶叫

その間にボールは砲撃とともに早くもゴール前に……………



「やらせるかああああああああああああああああ！！力  
ートリツジロード！ラケーテンハンマアアアアアアアアア  
アアアアア！！」

ゴール寸前ヴィータのラケーテンハンマーでボールは再び中央に戻  
された。

「ふう……………危ねえとこだったぜ……………」

Aチームホッと一安心。

しかし今のブロックによりボールはBチームのフェイトの下に渡っ  
た。

「いくよフランー！！」

「うん！」

フランとフェイトは何やらコンビネーションを決めるようだ。

「せい！」

フェイトはバルディッシュで器用にボールを上空に打ち上げる。

「いくよヘル！！カートリッジロード！禁忌『レーヴァテイン』」

《カートリッジロード レーヴァテイン》

フランの右手に炎の魔剣が現れた。

そして



「……………ボールの回転速度が上がってる？」

その言葉にAチーム全員が気が付いた。

しかしもう遅い。

「フェイト今!!」

フランがそう言ってボールから離れると今度はフェイトが

「プラズマスマツシャー!!」

ドン!

ボールを砲撃で打ち出した。

そしてボールはそのままゴールに向かう。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおお!! □リケモノパワーアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

ザファイラ  
駄犬が何やら叫んでボールを拳で受け止めようとしているが……

拳に高速回転を続けるボールが当たった瞬間、気が付いた。

.....無理

「ぐばああああああああ！！！」

ザフィーラ  
駄犬くん吹っ飛んだあああああああああ！！！！

そしてそのままゴール！

Bチームが1点を先取！！

現在のところ0　1でBチームがリード

吹き飛ばされた駄犬ザファイラを見てヴィータの一言

「くっ……………役に立たねえ……………」

「いばあー…」

なかなかの毒舌だった。



駄犬が復活したところで試合再開

コート中央にあるボールをはやてが

「ヴィータ!!」

ヴィータにパス!

「でりやあああああああああ！！！」

ヴィータはなのはがまた砲撃を放とうとしているのを見て空に打ち上げた。

「しまった！！」

なのはは放つはずだったディバインバスターを中断してシューターを準備する。

しかし

上空には先客がいた。



「翔けよ！隼！シュツルムファルケン！！」

ガシュン！

弓にある二つのカートリッジシステムが作動する。

ドオン！！

放たれた矢は寸分変わらずボールに当たり、ケモノ（ユーノ）の守るゴールに向かう。

「あんなの無理だあああああ！！当たったら死ぬううううううう！！」

それを見ていたケモノ（ユーノ）はそう言ってゴールから逃げようとする。

「負けちゃダメなのですユーノ！！」

「来いやああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

ハチにそう言われてなんだかやけに気合い十分なケモノ（ユーノ）  
は……………

「あべしっ！！」

ケモノ（ユーノ）くん吹っ飛んだあああああああああああ！！！！

そしてそのままゴール！

Aチーム同点の1点を速攻で入れた。

現在のところ1　1の同点

吹っ飛んだケモノ（ユーノ）を見たハチから一言

「格好悪いのですユーノ……………」

「ウボアアアアアアアアアアアア！！」

ケモノ（ユーノ）の心は砕け散った。



現在前半戦を終えて1 1の同点……

後半戦は激しい戦いになりそうだ!!

(続く)

おまけ 4 (前書き)

後半戦です

## おまけ 4

1 1の同点で折り返しの後半戦

現在は最後にゴールを決められたBチームからの先攻。  
中央でボールに足をかけているのはアルフ

「フエイト!!」

ボールをフエイトにパス!

パスを受けたフエイトはそのままドリブルでピッチを走る。

しかし目の前にはDFのクロノが種馬<sup>グレアム</sup>からもらったデバイス デュランダルを構えて迎え撃つ。

「なのは!!」

しかしここでフェイトは斜め後ろにいた、なのはにパス!

「しまった」

クロノが焦ったようになのはの下に向かう。

「いくよレイジングハート!!.....エクセリオンモード!!」

《エクセリオンモード》

パスを受けたのはレイジングハートをエクセリオンモードにモードチェンジして照準をボールに向ける。

「カートリッジロード!エクセリオ~~~~ンバスター!!」

《エクセリオンバスター》

デイベインバスターとは比べものにならないくらい強力な桜色の砲撃がレイジングハートから放たれる。

「まだだ！まだ終われない！！デュランダル！！」

《OK ボス！》

そんな絶望的状态の中、クロノは諦めなかった。

「悠久なる凍土、凍てつく枢の地にて、永遠の眠りを与えよ！！エターナルコフィン！！」

ガシュン！





魔<sup>な</sup>王<sup>のは</sup>の砲撃は鬼畜だった。

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あ！！」

クロノくん吹っ飛んだあああああああああああああああああああああああ  
あ！！

しかしそのクロノ尊い犠牲のおかげで砲撃の威力がだいぶ落ちた。

「貴様の犠牲は無駄にはせん!!」

そう言っ  
て砲撃の前に立ち塞がるのはレーヴァティンを鞘に戻した  
シグナム

「いくぞレヴァンティン!! カートリッジロード!..... 飛竜一閃  
!」

技の名前を叫ぶシグナムは鞘から勢いよく連結刃になったレヴァンティンを引き抜き攻撃する。

ドーン!

だが……砲撃はまだ止まらなかった。

「……後は頼んだ」

シグナムはその一言を残し

「ぐはあああああああああああああああああああああ  
ああ！！！」

シグナムくん吹っ飛んだあああああああああああああああ  
ああ！！

「幼女の全力全壊を受け止めてみせる！！」

そう言うて立ちはだかるのは変態<sup>リインフォース</sup>

「闇に染まれ……………ディアボリック・エミッション！！」

<sup>リインフォース</sup>  
変態は球形の範囲内全てを純粹魔力攻撃する広域空間攻撃魔法を使

い砲撃と相對する。

激しい衝突の果て、遂に魔王<sup>なのは</sup>の全力全壊を止める事に成功した！

「……………ヴィータ（エターナルロリータ）！！」

変態はヴィータ<sup>リンフォース</sup>（エターナルロリータ）にパス！

「……………なんか凄く失礼な事言われた気がする……………はやて!!」

ヴィータ（エターナルロリータ）は不機嫌になりながらも上空で待機していたはやてにパスを繋ぐ。

待機していたはやては静かに正三角形の形をした魔法陣を自分の正面に展開すると三つの巨大な魔力球を作り出して

「響け終焉の笛！ラグナロク！！」

ダウン！

ボールに向かって放った。



[illegible]

そう叫び声をあげながら突撃をかけるのはアルフ

魔力弾を何発も叩き込む。

「手伝うのですアルフ!!」

それに合わせるようにハチも魔力弾をぶつける。

しかし

「くっ…………ダメか…………おりゃあああああ!!」

「わふうふうふうふうふう!!」

止めるのが不可能だと判断したアルフは八手を思いっきり投げ飛ばして…………

「……………少しは役に立てたかな……………」

どこか哀愁漂う雰囲気身を纏い目を閉じた。

「があああああああああああああああああああああああ  
ああ！！！」

アルフくん吹っ飛んだあああああああああああああああああ



そしてそのままゴール！

Aチーム2点目！！

現在2 - 1でAチームが逆転！

そして何も出来ずに吹っ飛んだケモノ（ユーノ）に八チから一言

「……………ユーノの事が嫌いになりそうなのです……………」

「のおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおお！！！」

ケモノ（ユーノ）撃沈。

ケモノ（ユーノ）は撃沈中だが試合再開

中央でボールに足を置くのはハチ

「パスなのですアルフ!!」

アルフにパス!





「……………準備完了なのですアルフ!!」

不意にハチからそんな声が聞こえた。

その声に反応したアルフは人間形態に戻り

「後は頼んだぞおおおおおおおおおおおおおお  
おおー！」

そう叫びながら上空へボールを蹴り上げる。

「任せ（て）（るの）」

そこには魔法陣を展開した三人……なのはとフェイト、それにフラインクの姿があった。

「全力全壊！スターライトおおおおおおおおおおおおおお  
おお！！」

桜色の魔力を収束させるのは

「雷光一閃！プラズマザンバああああああああああああああああああああああ！！！」

大剣形態にしたバルディッシュに稲妻を溜め込むフェイト

「カートリッジオーバーロード！禁忌 アポカリプス……………」

巨大な魔法陣に赤黒い閃光を生じさせたフラン

「っっブレイカああああああああああああああああああああ  
あああああ」

三人はその力を同時に解き放った。

ドゥン！ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

この光景を見ていたAチーム全員が

「 「 「 「 「  
オワタ……」

と思ったのは仕方がないと思う。

「『『『『ぎやあああああああああああああああああああああ  
 ああああああああああああああああああああああああああああ  
 ああああああああああああああああああああああああああああ  
 あああ！』『』『』『』」

Aチーム全員吹っ飛んだああああああああああああああああああああああああああああああ！！

そしてそのままゴール！

Bチーム試合を振り出しに戻す貴重な同点ゴールだ！

現在2 - 2の同点！

Aチーム全員が復活したところで試合再開

中央でボールに足を置くのはヴァイタ

「シグナム!!」

後ろにいたシグナムにパス!



「カートリッジロード！紫電一閃！！」

ガシュン！

ドゥン！

シグナムはそのままロングシュート！

「デイベイ~~~~ンバスター！」

しかしそれをなのはがブロックし、ボールは上空に浮き上がる……

「フランちゃん！！」

なのはは上空に待機していたフランに声をかける。

「カートリッジロード！禁忌『フォーオブアカインド』」

ガシュン！

フランは自分の分身を呼び出して大きな四角形の形に並んだ。

「「「カートリッジオーバーロード!」「」」」

四人となったフラン達のヘルが勢いよく空薬莖を排出していく。

そして魔法陣を他の自分達のものと同ね合わせていく。

「くくくくいくよ！！アポカリプスブレイカーのバリエーション……  
……」スクウェアブレイカー”！！」「」

フラン達はそう言って巨大な砲撃が放った。

その大きさは、もし宇宙戦艦ヤマトが実在したら波〇砲ってこんな感じなんだろうな〜といえるレベルである。

しかも通常デバイスであるヘルを通じて発動させるアポカリプスブレイカーはカートリッジオーバーロードを使用して本来の威力の25分の1。

……フランは四人でこの技を発動させた、つまり今のスクウェアブレイカーの威力はアポカリプスブレイカー本来の威力を非殺傷設定で備えているといっても過言ではない。

A  
チ  
ー  
ム  
メ  
ン  
バ  
ー  
絶  
望  
中

「  
「  
「  
「  
「  
.....  
無理  
「  
「  
「  
「  
「

キュッ  
ド――――ン!!

大  
爆  
発

そしてそのままゴール!

B  
チー  
ム  
3  
点  
目!

現在 2 - 3 で B チーム 逆転！

そのまま試合終了……………

というか A チーム は再起不能

この後 シャマル が A チーム のメンバー を治療しました。

結局勝負はBチームの勝利に終わった。

後日はやて達はフラン達のお願いを叶える為に奔走するのだがそれはまた別のお話

「……………このゲーム絶対流行るわ!!」

後で映像を見ていたリンディは興奮しながらそう言っていたらしい。



そしてミッドチルダで魔導サッカーが流行り、正式スポーツとなったのも別のお話



ジュルリ」

アルフはそう言っただけなのにヨダレが口から出てる。

まだ本当に料理を出された訳じゃないのに……………

まあアルフらしくていつか。

こうして私達はあの第一回 魔導サッカーの景品である”願い事を一つだけ叶えることができる権利”を行使していった。

実際、私達がはやてとリインフォースに願った事は本当にやめてほしい思っただけである。

はやては最近だんだん大きくなってきた私の胸をおじさんっぽい口調で話ながら的確に弱いところ狙ってしつこく揉んでくるし、リインフォースは前にははやての家に遊びに行った時の夜、ベットで寝ていた私の服を脱がして何かされそうになった。

……………あの時は寸前でヴィータの放ったギガントシュラクのおかげで助かったんだけど……………もう二度とはやての家に泊まりたくないと思わせる出来事だったよ……………

まあそういうのが積み重なっての今回のお願いなんだけどね。

あと願い事を言っていないのはハチとケモノだけ。

まあ二人の事だから無茶な願いはしないとは思っただけど……

……

「わふ！決めたのです……………」 負けたBチーム全員で明日と明後日の2日間で世界一周してくる”のです！！”」

「流石ハチ！ナイスアイデアだよ！！僕の願いもそれでいいよ！！」

まるで太陽を思わせるような笑顔でハチはそう言つて、ケモノもそれに賛同した。

[illegible]

そのお願いにBチーム全員が驚愕の表情を浮かべて叫び声をあげた。

「ふむ……ロリケモノの願いならば叶えなくてはならんな……」

そしてダメ過ぎる駄犬

「……意外に鬼畜なお願いなの……」

「……………お願いっていうか罰ゲームだよね？」

なのはとフェイトは口角をひくつかせながらそう言う。

私も流石にそれはかわいそうだと思い……………

「ねえハチ……………シグナムとヴィータはかわいそうだから外してあげて？」

ハチにそうお願いした。

「……なんでシグナムとヴィータだけ（なん）（なんだ）！？」「」

はやて達はそう言いながら私に詰め寄ってくるけど私がこう言うのには思い当たる節がたくさんあるはずだ。

だからあえて無視した。

その間にハチがケモノと一緒に考えたルールの説明を始める。

くルールく

？ 北極や南極に行つて一周しても世界一周した事にはならない。

？ 途中でこちらの指定したアイテムを入手する事。

？ 転移魔法や転移したりする装置は使用できない。

？ 時々こちらからの妨害があるが、抵抗してもよい。

？ 飛行機やヘリコプター等のものは使用禁止。

飛行魔法のみで世界一周すること。

？ もし世界一周できなかつたら罰ゲームを受けてもらう。

.....ハチはいつからこんな鬼畜になったのだろう.....

多分あのケモノとか駄犬のせいだと思っただけど.....今度からハチに近づかせないようにしようかな？

私はルールを聞いてそう思った。

「それで……………アイテムって何を手に入れなあかんの？」

はやては不安げな表情を浮かべながら八ちに聞くと八ちは

「わふ……………まずは金○日の毛髪にダ○イ・○マの教典と  
…あとはエリ○ベス女王の王冠にオ○マ大統領の命なのです」

笑顔でそう答える。



「あか~~~~~ん!! そんな事したら国際指名手配犯になってまう!! ..... というかそんなとんでもない事どうしたら思い付いたんや!!」

はやては先程よりも死にそうな表情になりながらもハチに問い掛けると

「わふ? この入手アイテムはユーノが考えたのです」

ハチは首を傾げてそう言った。

「ユーノ!? ユーノはどこ行ったん!？」

はやてはシュベルトクロイツを握り絞めて周りを見るがケモノの姿はどこにも見えない。

「あれ? さっきまでそこにいたのに.....」

「こんな無茶苦茶なアイテムはやめさせないと!!」

なのはとフェイトがそう言って辺りを見回すが見つからなかった。

「オワタ..... 私の人生オワタ.....」

はやては膝についてorzのポーズをとる。

ヴォルケンリッターのみんなも心配そうにはやての下に集まった。

私も友達を犯罪者にする訳にはいかないのでケモノを探そうと辺りの気配を探る為に目を閉じようとした時.....

「……………あ、見つけた」

ケモノはあっさり見つけた。

ハチの足下でフェレットになって上を見上げている。

その鼻からは赤い液体が滴ってた。

「……………ヘル、レーヴァテインを」

《イエス マスター レーヴァテイン》

《しばらくお待ちください》

「……………という訳で入手アイテムは中国でパンダの人形とドイツで生ハム、それとアメリカでその日の新聞だよ？ 覚えた？」

私のはやてにそう言うとはやては

「ありがとう…………グスッ…………本当にありがとうなフランちゃん」

泣きながら私にお礼を言っていた。

「それじゃあ入手アイテムも決まったし……………レイジングハート」  
それを見届けたのはは笑顔でレイジングハートをセットアップする。

「そうだね……………バルディシュ」

フェイトもバルディシュをセットアップした。

私とはやてもそれぞれ笑顔でセットアップしてバインドで蓑虫状態の”ソレ”を見る。

「僕が悪かった！！だから許して！！」

そう喚くソレは元々の顔がどんな形だったのか分からないほどに歪んでいた。

私達はソレの言葉を無視して自分のデバイスを構えた。

「全力全開！スターライトおおおおおおおおおお  
おお！！」

「雷光一闪！プラズマザンバああああああああああ  
ああ！！」

「終焉の笛！ラグナロクううううううううううう  
うう！！」

「カートリッジロード！禁忌『フォーオブアカインド』」

《カートリッジロード　フォーオブアカインド》

私は四人に増えて巨大な魔法陣を結ぶ。

「くくくいくよ！カートリッジオーバーロード！収束　スクウェア  
ああああああああああああああああ！！」  
「」「」

それぞれの魔力が高まり巨大な力となったその瞬間

「「「「「ブレイカあああああああああああああ  
あああああああああああああああああ！」「」「」」」」」

解き放った。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

凄まじいまでの砲撃が迫る。

「やめ……助け………」

そんな声が聞こえた気がしたけど気にしない

カツ！ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

なんだかすつきりした

みんなの顔もどこか輝いてる。

「よし、やる気が出てきた！！明日も頑張るでええええええええええええ！！」

はやてはやる気十分みたいでよかったよ。

次の日はやて達は笑顔で世界一周に行った。

このハチとケモノが企画した世界一周がその晴れやかな笑顔が消えるほどつらいとは知らずに……………





おまけ 6 (前書き)

罰ゲームスタート

## おまけ 6

「あか~~~~~ん! 寝過ごしたああああ  
ああああああああああああああああああ  
ああああああああああああ!」

八神家に響くそんな叫び声。

現在の時刻は午前2時

普通ならまだみんな寝ている時間帯だ。

「……………んう……………はやてうるさい……………ヘル……………禁忌……………『クランベ  
リートラップ』……………」

「ぶべば!」

眠かった私はヘルを起動させて喚くはやてを黙らせた。

「はふう……………お休……………み……………Z Z Z Z Z……………Z Z Z Z Z……………  
……………」

はやてを沈黙（強制的に）させた私は再び眠りに落ちる。

変な時間に起こさないでよねはやて……

結局私達が起きたのはそれから4時間後の事だった……

「オワタ……………もうオワタ……………」

目が覚めるとはやてがそんな事を言いながらorzのポーズをとっていた。

なんでだろう？

「もう間に合わへん……………というか元々無理やったんや……………」

なんだかどんどん沈んでるみたいだ。

なんでこんな事になっているのかよく分からないけど

「……………朝ごはん食べよ」

はやてを放置して私はリビングへ向かった。

「おはよ  
」

リビングに行くとなのはとヴィータとフェイトにシャマルが朝ごはんの準備をした。

私も手伝おうとキッチンに行くとそこには……………

「てやあああああああああああ！！」

ズバババッ！

フェイトが包丁を振り回して野菜を斬ってた………

空中で………

「「「危ない！？」「」」

その場にいたなのは達はフェイトのそばから急いで離れた。

「……………普通に切れないのかな？」

そんな疑問が頭を過ぎるが今は朝ごはんを作らないとね

「フエイトちゃん包丁こつちに向けないで!!」

「おわあああああ!!血!血が出たあああああああああ  
ああ!!」

「ヴィータちゃん大丈夫!?傷を見せて!!」

今日はなんだか騒がしいね

「にやあああああ!!」

「包丁がなのはに刺さったあああああああああ!!」

「なのはちやあああああああああん!!」

キッチンが火サスの殺人現場みたいになってるけど気にしない

この後フェイトはキッチンから追い出されました。

「「「「「「「「いただきます!」「「「「「「「

いろいろあつたけどようやく朝ごはん

今日のメニューは目玉焼きにウィンナー2本とサラダ、それとお味噌汁。

どれも美味しそう

特にサラダのドレッシングに使ってる赤いソースを見てるとなんだか妙に食欲をそそる……………

「……………ってサラダに血が付いてる!？」

アルフがなんか叫んでたけど気にしない

だってとても美味しいんだもん

「……………あの……………私のご飯は……………」

躊躇いがちにそう言っのははやて……………

というか……………



「まだいたの？」

私は首を傾げながらはやてにそう言った。

「へ？フ、フランチゃん？」

はやてはなんだか驚いたような表情をしているけどいつ気が付くのかな？

はやては困ったような表情を浮かべながらオロオロしてる……………

あまりいじめるのはかわいそうかな？

そう思った私ははやてに

「みんなもう世界一周しに行ったよ？」

笑顔でそう伝えてあげた。

それを聞いたはやては一瞬固まり……………

大絶叫

「はい」

.....うおおおおおおおおおお





映像が途切れた。

「……………」

映像を見たはやては沈黙したまま私を見る。

「行かないの？」

私は笑顔ではやてにそう言つと

「……………」罰ゲームを受けるから堪忍して？」

はやては泣きそうな表情でそう言ったのだった。

脱落者

八神 はやて

次回に続く

おまけ 7 (前書き)

続きます (^o^)/

## おまけ 7

「……………生きてるかザフィーラ」

草むらにボロボロの状態で仰向けに倒れていたクロノは同じくボロボロの状態で仰向けに倒れるザフィーラに声をかける。

「……………なんとかな」

声をかけられたザフィーラはやや辛そうにそう答えた。

時刻はすでに午後11時を過ぎている。

空には星が瞬き、幻想的な夜景が二人の視界に入っていた。

今日中にはこの世界で”ブータン王国”と呼ばれる国を脱出しておきたいのだがクロノもザフィーラも体が動かない。

だが彼らは知らなかった。

自分達がどれほど長い距離を短時間で飛んでいたのかを……………



ブータン王国は広いユーラシア大陸においてイスラム圏内とアジアの境目付近に位置する国なのである。

これはクロノ達が死ぬような思いをしながらフラン達の妨害から逃げ続けた結果なのだ。

しかもクロノ達は朝からなにも口にしていない。

正直空腹が一番辛かった。

「クロノ……………リンフォースは……………」

ザフィーラは限界に近い体を無理矢理起こして辺りを伺う。

「無理せずに寝てるんだザフィーラ……………それに……………リンフォースはもう……………」

クロノも相当体が辛いはずなのに起き上がってここにいないリンフォースの事を思い出して顔をしかめる。

そう、リンフォースはもういない。

それはクロノ達にとっては最大のピンチである事を意味していた。

何故ならこのデスマーチにおいてリンフォースの役割はフラン達

を退ける為の切り札的存在だったのである。

何故そのような表現の仕方になるのかというと……………それは

リインフォースの幼女命な性格にあるといっても過言ではない。

想像してみしてほしい。

フラン達が攻撃しようと無防備になった瞬間どうなるのかを……………

……………

パーセンテージにすれば100%中1000000000000000%の  
確率でリインフォースは彼女達を愛でようと突撃をかけて捕縛する  
だろう。

故に今回のデスマーチではリインフォースにそういう意味で頑張っ  
てもらいたかったのだが……………ここで予想外な事件が発生した。

プレシアの襲来である。

それは今回の為に幼女を触らせないようにして禁断症状出現間近な  
状態にしてきたリインフォースのやる気メーターをゼロどころかマ  
イナスにするには十分な威力だった……………

プレシアが出てきた瞬間リインフォースは

「よ、幼女じゃない……………だと……………？」

そう言った崩れ落ちた。

まさに予想外である。

しかしそのおかげで動かなくなったリインフォースを囿に使うてその場をなんとか離脱できたのは不幸中の幸いであつた。

クロノ達は空に浮かぶ星を見上げながらこう思っていた……………

流石に無理……………

クロノはプレシアの攻撃により破損し、修復中のデュランダルを取り出して現在の時刻を確認する。

「日本時間で23時……………29分か……………」

その小さな呟きは誰にも聞こえることもなく幻想的な美しさを誇る  
星空に吸い込まれていった。

……………

……………

不意に生き残ったデスマーチ組の様子をシャルルのデバイスである  
クラールヴィントのモニターを覗いていたらこんな場面だった。

なんか……………映画みたい……………

「わふ……………かわいそうな事しちゃったのです……………」

ハチは悲しそうに顔を伏せている。

今気が付いた風な感じなんだけど……………

もっと早く気が付こうよハチ……………

私はそう思いながらキッチンへ進む。

「フランちゃん？」

「フラン？」

なのはとフェイトが不思議そうに私を見つめる。

私はそんな二人に笑顔を向けてコンロに火を入れてフライパンに油

を引いた。

……こっちからの差し入れてOKだよね

そう思いながら私は材料を刻み始めた。

~~~~~

「腹減ったなあ……………」

今現在クロノとザフィーラは空腹と戦っている。

やはり時間を稼ぐ為に朝食のみを軽く取って出発したのは痛かった。当初の予定では道中キーアイテム買いながら食事を取るはずだったのだが、プレシアの襲来により食事を取る暇さえ与えられなかったのだ。

その上で連続した戦闘によって消耗している……………

できれば体力を回復させる為に何か食べられるものがほしい所だ。

「腹減った……………」

クロノとザフィーラは互いにピクリとも動かない。

このままだと力尽きるのは目に見えている。

なんとかこの状態を打破しようと考えるが栄養不足で回らない。

「……………痒……………ウマ……………」

とうとう空腹が限界を迎えて二人は電波を受信したようだ。

そして、それはこのままだと二人揃ってバイオな物語に発展しそうな状態になった時の事だった。

「ご飯持って来たよ」

突然そう言っで転移魔法を使っで現れたのはフラン

その手には様々な料理を載せた皿や簡易式の折りたたみテーブルを持っで来てくれている。

「マジ天使!!!」



さっきまでの雰囲気はどこにいったのかクロノとザフィーラは立ち上がり涙を流す。

「あはは……………うちのハチがごめんね？」

フランは苦笑いを浮かべながらテーブルの上に持って来た料理を並べていく。

クロノとザフィーラはそんなフランの言葉に涙を流し続けた。

そして

「「いただきます!!」」

クロノとザフィーラは耐え難い空腹を満たすように勢いよく食べ始める。

そんな二人を見ながらフランは笑顔のまま転移魔法で去って行った。

置き手紙を残して……………





この罰ゲームを受けた後はやてはフランを見つけるだけで頬を紅潮  
させてしまうようになったらしい。

おまけ 8 (前書き)

最後です ( ^ o ^ ) /

## おまけ 8

「ねえなのは、フェイト……………クロノ達間に合うかな？」

「にやはは……………それは分からないの」

「二人の事だから大丈夫だとは思っけど……………」

私達は今、ハチとケモノが考えた世界一周なんてとんでもない罰ゲームをしているはずのクロノ達をキーアイテムを手に入れるはずである場所……………ドイツ首都ベルリンのベルリンの壁跡地で待っている。

なぜそんな場所に私達がいるのかというと昨日私がクロノ達に食事と一緒に渡したあの置き手紙関係しているのだ。

その手紙の内容とは……………

『明日、日本時間午後4時までにドイツ首都ベルリンのベルリンの

壁跡地に来れたらこの罰ゲームは終了だよ」

というものだった。

これは私がハチを説得し、ケモノには……………拷問？……………じゃなくて調教……………でもなくて制裁……………まあどうでもいいか

とにかく私の説得でクロノ達は罰ゲームから解放される事となったのだ。

それを見たクロノ達が歓喜の叫び声をあげていたのをシャルルのクラーヴィントを介して私達は見ていたのだからクロノ達はこのチャンスは何がなんでも手にしたいはず……………

そう思いながら私は持ってきた紅茶と簡易テーブルと椅子に座って優雅に楽しむ。

なのは達も笑顔を浮かべてゆっくりと紅茶を飲んでいた。

テーブルに置いた目覚まし時計を確認すると日本時間午後3時45分。

「……………そろそろかな」

私はそう呟きながらお茶菓子として持ってきたワッフルを手にとって食べる。

ワッフルのほど良い甘さが口いっぱいに広がってつい笑みがこぼれ

た。

しかし紅茶を再び飲もうとカップに手を伸ばして……………止める。

先程ワッフルを持った手でカップを持てばカップが汚れてしまう。

私は少し悩んで……………

「……………はやて」

はやてを呼んでその手をテーブルの下に降ろした。

「はい フランちゃん ……………レロ／／／／／」

すると私の隣に膝立ちになり頬を赤く染めたはやてが恍惚の表情を浮かべて私の手に口を近づけ、その舌で舐めて綺麗にしていく。

「……………んん……………あふ……………チュル……………ぴちゃぴちゃ／／／／／」

なんだかかなりエロい……………



「 .....ゴクリ」

そんな私達の様子になのは達は唾を飲み込んでいる。

「ふふふ　うまくなつたねはやて」

私ははやてに優しく微笑むとはやては

「あ、ありがとうフランちゃん  
／／／／／」

最高のご褒美を与えられたような笑顔を浮かべていた。

その場に百合百合しい空間が形成される。

「着いたあああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああ！」「」

いきなりその空間をぶち壊すような大声がその場に響き渡った。

「あ！？クロノ達だ！おーい！」

私は手を舐めて綺麗にしていたはやてから離れてクロノ達に近寄りながら手を振る。

なのは達も少し遅れて私の後続いてクロノ達に近いてきた。

クロノ達は間に合った事に安堵したのか笑顔で近づいてくる。

しかし

「……………私のフランちゃんが……………シュベルトクロイツ……………」

フランに置いて行かれたはやてはそんなクロノ達を睨みつけ、シュベルトクロイツをセットアップした。

そして……………

「……………終焉の笛！ラグナロク！！」

正三角形の魔法陣に三つの巨大な魔力球が現れて……………クロノ達に向けて放たれる。

「「彘！？」」

クロノ達は驚愕の表情を浮かべて……………

キュッドーーーーーン！！

吹き飛ばされた。

「こ、こら！はやて！！何してるの！！」

私は吹き飛ばされたクロノ達の下に駆け寄り怒るとはやては

「だって……………フランちゃんに構ってほしかったんよ……………」

そう言って落ち込んだ。

その様子を見ていたなのは達の間で

「……………フェイトちゃん……………」

「何？なのは？」

「なんだかライバルが増えたの」

「……………そうだね……………」

そんな会話があったとか無かったとか……………

第42話 空白期編（前書き）

短いですよ（ノ　Ｔ）

## 第42話 空白期編

それは突然のことだった。

「ロストログアの護衛任務？」

あの事件……闇の書事件の後にリンディの推薦で管理局の依託魔導師として登録された私達にクロノから与えられた初めての任務だった。

「ああ、実はとある管理外世界で赤い宝石型のロストログアが見つかり、今回はその輸送の護衛をしてもらいたいんだ。もちろん本局の方からも応援要請している、だからそれほど長い距離を護衛する訳ではないから安心してほしい」

クロノはそう言ってモニターにロストログア”レリック”を映し出す。

「綺麗なの……」

「本当だね……………」

なのはとフェイトはモニターに映るレリックを物珍しそうに見つめる。

しかし

「何を言ってるんやなのはちゃんにフェイトちゃん……………フランちゃんのルビーのように紅い瞳の方が百億倍綺麗に決まっとるやろ？」

そう言うとはやては私のそばに擦り寄って来た。

そして私の前で恍惚の笑みを浮かべる……………

それはまるでいい事をしたから褒めて？と尻尾をちぎれんばかりに振る犬のようだ。

「「確かに」」

そんなはやての言葉に二人はうんうんと頷き、私に近寄ってくる。

そしてそれぞれ私の腕に自分の腕を絡ませ、手は恋人繋ぎをしてきた。

「…………百合百合しいな…………」

その光景を見たクロノはそうポツリと呟く。

しかしそう言われて火が付いたのか、なのは達は私に絡もうとするのをやめようとはせず、さらに体を密着させてくる。

《音声のみ表示中》

「フランちゃんのこっつて柔らかいの」

「本当だね」

「じゃあ私はこっちを……………」

「え！？なのは！？フェイトもどつたの！？…………あう！…………  
は、はやてえ…………そこはあ…………／／／／／」

《自主規制につき注意》



「……………はぁ……………」

クロノは疲労感たっぷりのため息をひとつして頭を抱えこつ思った。

コイツらだけで大丈夫なのかと……………

しかしクロノのこの心配は的中する事になる。

それは……………

今後の彼女達の未来を決定付けるような大事件になるなど今この瞬間、誰にも予想は出来なかった……………

これから訪れる運命は本当ならありえなかった最終鬼畜な吸血鬼の  
少女と魔法少女達の空白期のお話である……………

第43話 空白期編（前書き）

急展開

## 第43話 空白期編

「……………罪と罰、今ここに交わりてすべてを穿ち薙ぎ払わん……………  
集まりし力は沈黙をもってすべてを示し暴虐の限りを尽くす……………」

禁忌……………」

803

『アポカリプスブレイカー』！！』  
ズガーーーーーッ！

私の前に現れた巨大な魔法陣から赤黒い砲撃が発射されて目の前にいた巨大なボールみたいな機械や三角形の空飛ぶ機械、カプセルみたいな機械を大量に薙ぎ払う。

そこは……………粉雪が降る荒野だった。

「……………こんな聞いてないの！！……………デイベイイイイイ

ンバスター！」

ドガン！

なのははそう言ってカプセルみたいな機械を砲撃で大量に薙ぎ払う。

ザンツ！

「クロノは簡単な護衛任務だっって言ったのに……………はああああああああああ！！」

高速機動で機械達を攪乱しながらフェイトはバルディッシュを鎌から大剣に変えて機械を切り裂く。

「フランちゃんを騙したクロノは後でシバいたる……………ブ  
ラッティダガー！」

ズガガガガガガー！

はやてはここにいないクロノに憤りながら迫ってくる機械達を殲滅していった。

しかし……………

「全然減らないよ（の）！！」

私達はそう叫んだ。

周りを見ると前後左右、上も下も全部あの機械達でいっぱいだった。

「とにかく本局にいるはずのクロノに何とか連絡してシグナム達を応援に送ってもらおう!!」

「うん！」

私はそう言ってみんなの気持ちが落ち込まないように声をかけると  
なのは達は力強く頷き、攻撃を再開する。

「いくよへル！てりやあああああああああああああ  
あああああああああああああ！」

[illegible]

「バルディッシュ！……はあああああああああああああああ  
あああああああああああああああ！」

私は弾幕を張って大量の機械を叩き落とし、フェイトは私の弾幕をすり抜けた撃ち漏らしを切り払う。

それは砲撃や広域攻撃魔法を放とうとするのはやはやての援護を為の行為。

「エクセリオオオオオン……………バスタアアアアアアアアア  
！！」

ドウン！

「終焉の笛……………ラグナロク！！」

ドガガガガガガー——ン！

なのはとはやても自分達の役割をすでに理解しているので砲撃や広域攻撃魔法を何度も繰り返し放った。

そんな中で私は今現在の全体的な状況を攻撃しながら観察する。

「……………このまま一点に攻撃を集中してレリックを持って撤退するよ——！！」

現状を把握した私はなのは達にそう声かけた。

なのは達は私の声が聞こえたのか頭だけで頷く。

何故こんな指示を出したのかというと……………

……………多過ぎるのだ。

私達四人に対してあまりにも機械達の数が多過ぎる。

機械達はそれこそ戦場となっている荒野を埋め尽くさんばかりに大量展開しているのだ。

今はなんとか反撃してはいるものの魔力は無限にある訳ではない。

いつか必ずこの圧倒的な物量に飲み込まれてしまっだろう……………

だからこそ余力があるうちに一点突破での離脱を敢行する必要がある。  
った。

「私が道を開くの……！」



私が弾幕で機械達を牽制している際になのはが魔力をレイジングハートに収束させていく……………

「なのはの援護を!!」

ズバンッ!

フェイトはそう叫ぶと今出せる最高の速度でなのはに近づく機械達を斬り払った。

「私も援護するで!!ブラッティダガー!」

ドガン!

はやてもその言葉に反応してフェイトとは反対方向に攻撃を開始する。

「私も……………ッ!」

私もなのはの援護をする、そう言いつつもりだった。

「……………何……………あれ……………」

しかし私は見てしまった。

なのは後ろにある奇妙な”モノ”に……

それはまるで空間に切れ目が入っているかのような”モノ”だった。

しかもその切れ目の両端に赤いリボンのよいな物が付いている。

ドクツドクツドクツ……

「……………知ってる……………私は”アレ”を見た事がある……………」

”ソレ”を見ていると心臓の鼓動が激しくなった。

「……………どこで……………どこで見たんだろう……………うう……………分からない……………」

この時必死に思い出そうとするあまり、私は何故”ソレ”がこの場に……………しかもなのは後ろにあるのか考えようとしなかった……………

だから……………

ドスッ！

「……………え？」

突然、そんななのは声が聞こえる。

「「なのは（ちゃん）！？」「」

フェイトとはやての驚いたような声も聞こえた。

理解できなかった……………

ソレが急に開いて中から日傘が飛び出して……

なのは胸を貫いている事に……

「なのはあああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああ！」

私はただそう叫ぶ事しか出来なかった。

第44話 空白期編（前書き）

ちよつと鬱展開です。

## 第44話 空白期編

「……………か…は…」

なのはは口から血を吐き出しながら墜落する。

「なのは…!」

胸を日傘で貫かれたなのはをフェイトが抱きしめて戦線を離脱しようとした。

「援護するで!!……………終焉の笛!ラグナロク!!」

はやては広域攻撃魔法を唱えてなのはを連れて離脱するフェイトを援護する。

「……………よくもなのはを……………ヘル!!」『レーヴァテイン』





「……………あ、あれ？……………力が……………」

全身の力が抜け意識が朦朧としていくのだ。

恐らくあの裂け目の力なのだろう。

その証拠に裂け目はゆっくりと動けない私に近づいて来る。

意識を失った私を捕まるつもりなのだろうか……………

なら何故なのは傷付けたのだろうか？

不意にそんな考えが私の頭を過ぎる。

そもそも私を狙っただけならなのはに攻撃する必要は無いはず……………

なら何故？

理不尽だ……………



《ガガガ……ガガ……マス……タ……》

その力に耐え切れずヘルにヒビが入る。

しかし我を忘れて怒り狂う私は気が付けない……

[illegible]

私は柱を維持したまま叫び続けた。

裂け目はそんな私に恐怖を覚えたのか離れていく……………

しかし

「逃がすもんかあああああ  
あああああ！」

ドゥン！！

その瞬間を私は見逃さず手に持っていたレーヴァテインを投擲した。

だが裂け目はレーヴァテインを避ける。

[illegible]

外れたレーヴァテインは避けた先にいた機械達を巻き込み大爆発を巻き起こす。



何かがちぎれる音と感触が右手に伝わり、裂け目から悲鳴が聞こえる。

それがどうしたー！

そんなの胸を貫かれたのはに比べたら怪我の内に入らないー！

そんな思いで裂け目から腕を引き抜いた。

その手に握られていたのは……………

血の付いた紫色の長い髪の毛だった。

「これだけ！？もう一度……………」

私は掴んだのが髪の毛だけであった事にイラつき、もう一度裂け目に手を入れようとして裂け目の方に目を向けると……………

裂け目は最初からそこには存在しなかったのかのように忽然と姿を消していた。

「……………逃げられた……………」

私はその事実を理解すると急に頭が冷え……………

パシッ……………バチバチバチ……………

「……………ごめんねヘル……………こんなにしちゃって……………」

スパークして機能停止状態のヘルに謝る……………

しかしその声にヘルは反応することではなく、代わりに聞いていたのは周りに散らばるガラクタと化した機械達の成れの果てだった。

~~~~~

「なのはは!？」

あの後少し離れた神殿の跡地のような場所にいたフェイト達に追いついた私はフェイトとはやてになのはの容態を聞くと二人とも顔を俯かせて何も話さない。

仕方なく私は直接なのはの様子を見ようとなのはが寝ている祭壇のような場所に行くと

「……………フラン……………ちゃん……………」

「なのは……………」

なのははいた。

しかしその身体から流れる血は止まってはおらず、生きて意識があるのが不思議なくらいだ。

胸を貫いていた日傘は柄と先の方を切り取られてなのはが仰向けに寝られるようにしている。

多分フェイトがバルディッシュで切り落としたのだろう。

下手に日傘を抜けば大出血は免れないからこの処置は正しい。

しかし

いつ救援が来るか分からないこの状況では気休めがいい所だろう。

「……………ごめ……………ん……………ね？……………私の……………せいで……………」

不意にそんなのはの声が聞こえた。

私は込み上げてくる涙をそのままに反論する。

「そんな事ないよ！！私が……………あの時見つけた私がちゃんと教えてればなのはが……………」

しかし怪我する事はなかったのに……………そう言おうとして私の涙を拭おうとするのはの手に止められた。



なのはただ笑顔で私の涙を拭う。

そんななのは姿を見てたら涙がさらに込み上げてきた。

なんて無力なんだろう……………

そんな思いが私の頭を過ぎる。

私の力は何の為にあるのだろう……………

涙を流しながら私は必死に考える。

そうしている間にもなのは命は消えかけているのに……………

私は……………ただ強大な力を持っているだけのくだらない存在

なんだろうか.....

そんな負の感情が私を支配し始める。

私は.....

私は.....

.....吸血鬼なのに.....

「……………吸…血鬼……………」

不意にその単語に私の何かに引っ掛かった。

私は自分の両手の平を見つめ

「……………もしかしたら……………」

なのはを助けられる？」

そう呟く。

「……………フラン……………ちゃん？」

そんな私になのはは首を傾げた。

私は目を閉じてなのはの手を握り絞め

「なのは……………これから私の事を恨んでくれていいよ……………  
だけど私はなのはに生きてほしいんだ……………だから……………」

私の○○になつて？」

そう言った。

それは……………私にとって今のなのはとの友人関係を崩しかねないほどにつらい事だった。

今からやろうとしている事はなのはの人生を大きく変えてしまう事なのだ。

私は握っている手が震えるを感じる。

それは私自身の心の震え……………

ぎゅ

「……………大丈夫……夫……………一緒に……………」

なのははどこにそんな力があつたのか上半身を起こし、震える私を抱きしめてくれた。

「なのは……………」

そんななのは優しさに勇気付けられた私は……………

なのはに私の○を与えてなのはを私の○○にしたのだった。

## 第45話 空白期編

「死ねよ管理局の狗があああああ！！」

ドガッ！

「グフッ……………ティ…アナ……………」

血を吐き倒れ込む俺の身体。

与えられた任務でここまでドジったのはこれが初めてだ。

事の発端は首都クラガンに指名手配犯が見つかったという通信があり、執務官である自分にも出勤命令が下された事だった。

その時の俺は別のヤマ……………管理局が関わっていると噂される違法研究について極秘に調べていたのだが、上からの指令により仕方なく出て来た訳なのだ。

そして、指名手配犯はあっさりと発見できた。

俺は本部に連絡し、一気に身柄を確保する為の応援を要請をする。

しかし本部から返ってきた返答は俺一人、単独で確保せよとの指示だった。

初めは本部の連中が何を言っているのか理解できなかった……いや、理解したくなかった。

しかし本部の言いたい事も分かる。

俺の所属している地上部隊……通称”陸”は次元航行部隊……通称”海”と仲たがいとまではいかないものの仲が悪い。

何故なら次元航行部隊にはランクの高い魔導師を引き抜いている為に地上部隊に質の高い魔導師がまわされて来ないからだ。

しかも間の悪い事に今回の任務には次元航行部隊の人員まで参加しているらしい。

仕方なく俺は自分の銃型のデバイスを構えて指名手配犯のあとを単独で追う事となったのだが………

それが失敗だった。

いつの間にか指名手配犯に尾行している事に気が付かれてしまい、  
人気のない路地裏に逃げられてしまったのだ。

焦った俺は後を追って路地裏に入り……………待ち伏せしていた指名手配犯に殺傷設定の魔力球を何発も撃たれ動けなくなった。

そして、冒頭の台詞とともに俺は指名手配犯にトドメを刺されたのだ。

頭に思い浮かぶのはまだ幼い妹のティアナ……………

両親を早くに亡くした俺にとって最後の肉親とも言える可愛い妹を  
一人残して逝くのはつらすぎる……………

ティアナはまだ幼い……………それこそ誰かから愛情を注いでもらいながら成長する時期なのだ。

「……………ティアナ……………ナ……………あぐつ……………」

そんな情けない声が俺の口から漏れる。



「なんだ？まだ生きてやがったのか？クッハハハ！これ以上生きてても苦しいだけだ……………楽にしてやるよ……………」

指名手配犯はそんな俺を見て笑うとデバイスを俺に向けて魔力を収束させ始めた。

ここまでなのか……………

そんな思いが頭の中で響き渡る。

「……………死にな」

指名手配犯はそう呟くと魔力を解放した。

しかし

「……………ヘル、『レーヴァテイン』を……………」

《イエス マスター レーヴァテイン》

ドゥンッー！

「がふうー！！」

しかし倒れたのは指名手配犯の方だった。

上空にいた真紅の何者かが紅蓮の炎を纏った剣を指名手配犯に向かって投擲したのだ。

「……………何…なんだ……………」

俺は残った力を振り絞り空を見上げると、そこには……………

紅く輝く満月をバックに大きなピンク色のリボンの付いた真紅のゴスロリ風なドレスを来た金髪の少女が七色に光る宝石状の飾りの付いた翼を広げて浮かんでいた。

外見年齢を推測すると恐らく13〜15歳くらいだろうか？

身長は恐らく140～145cmくらいでとても華奢な身体つきをしている。

しかし、ひとつだけ段違いに大きい部分があった。

「……………間違い……………ない……………あれ……………は……………ロリ巨乳……………だな……………」

俺はそう呟くと最後に爽やかな笑みを浮かべて力尽きる。

最後にいいもの拜ませて頂きました……………

そう思いながら……………

その後、俺……………ティード・ランスターはなんとか生き残ったらしく病院で目を覚ましてスカウトを受けた。

ちょうど見舞いに来た上司から無能扱いされてやけっぱちになっていた俺は迷う事なくそのスカウトを受け入れる事にした。

しかしその後にあつた説明とメンバー紹介を受けて俺はこのスカウトを受け入れて心底良かったと思っている。

だって

その最高責任者があの時俺を助けてくれたロリ巨乳の少女だったからな。

しかもメンバーのほとんどが母性が大きな女性ばかり……………

……………ここはこの世最後の楽園なのか？

思わずそう思ってしまったのは仕方のない事だと俺は思う。

まあなんにせよあなたには感謝しているって事ですよ”総指令”……  
プリンセス・オブ・スカーレット  
……真紅の姫君様？

これから頑張りますのでよろしく願いしますね？

第46話 空白期編（前書き）

夏風邪で執筆が遅れました

## 第46話 空白期編

いきなりだけど自己紹介させてもらっわ

私の名前はクイント・ナカジマ。

”元”ゼスト隊隊員だったわ……

まあ今は”司令”の下で同じくゼスト隊隊員だったメガーン・アル  
ピーノと一緒に働いてるんだけどね。

「クイント、今日の分の書類終わらせてね？」

噂をすれば同僚のメガーンが私に書類を渡してきた。

5 mくらい積み重なった奇跡のタワーを……………

「ちょ！？その量はおかしいんじゃないメガーヌ！？」

あまりの量の多さに私は驚きメガーヌに抗議すると

「計画的に書類を消化していかないからこうなるのよ」

メガーヌはジト目で私の反論を叩き潰した。

「うう……………そこをなんとかあゝ」

それでも引き下がらない私はD O G E Z Aと呼ばれる愛しい夫の故郷の謝り方でメガーヌにお願いしてみると

「……………クイント……………あなたはプライドをどこに捨ててきたの？」

さらに冷たい目でメガーヌに見つめてきた。



「メガー又うううううううう……」

仕方なくメガー又の薄情っぷりに私は悲しみ、涙を流しながら書類に手を付け始める。

奇跡のタワーを築き上げた書類の束を崩さないよう丁寧に下ろし、ペンを進めた。

どれくらい時間が経ったのだろうか？

気が付くと窓の外には星が瞬く夜空が見えた。

「んんん……もうそんなに時間が経っちゃったんだ……」

私はペンを置き、窓の外を見つめる。

ふと夜空を見上げるとそこには満月が優しい光を放ち、私を見下ろしていた。

「……………」あの時”もこんな風に綺麗な満月だったなあ……………」

私はポツリとそう呟く。

目を閉じればすぐに浮かび上がるあの時の光景。

拳を弾かれ吹き飛び、自身から飛び散る赤い血液が相手を濡らして倒れ伏す自分。

そしてゆっくりと近寄ってくる私をボロボロにした張本人。

「……………」司令には感謝してもしきれないよね……………」

静かに目を開いて私は小さくそう呟いた。

どうやら満月を見るとあの日の事を……………」ゼスト隊全滅事件”の事を思い出してしまうようだ。

「……………隊長……………みんな……………」

私は満月を見上げながら助けられなかった隊長や同僚達の事を思う。

「仕方のない事だよね……………あの時生き残れたのが私とメガーヌだけだったもの……………」

そう呟いた私はもう一度目を閉じてあの時の事を思い出す。

それは……………

雲一つ無い満月の夜の事だった。

~~~~~

「くう……………メ、メガー……………又……………」

力尽き倒れ伏す私は隣で倒れているメガー又に近づこうと手を伸ばす。

しかし、そのメガー又は頭から血を流してピクリとも動かない。

「ぐおおああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

不意に誰かの断末魔が聞こえた。

私はメガー又に手を伸ばしながらも断末魔の聞こえた方に顔を向けると

「ゼスト……………隊長……………」

ベルカの騎士であり、歴戦の猛者であるゼスト隊長のゼスト・グランガイツが全身を真紅に染めて壁に寄り掛かるように事切れている。

た。

「……………思ったより時間がかかったなチンク」

「返す言葉もない……………訓練し直す必要があるな」

銀髪の少女が右目から血を流しながら青い短髪の女性と会話している。

事態は絶望的だった。

きっかけは今現在私の娘となった養子のギンガとスバルが違法研究所で私に保護された事から始まる。

非合法で非人道的な研究を行う研究所の中で、私は自分のDNAを使う事で完成した”戦闘機人”……………ギンガとスバルを発見し保護した。

それはすなわち……………管理局内で私のDNAを無断で盗み出した何者かがいたという事に他ならない。

その事を上司であるゼスト隊長に報告するとゼスト隊長はすぐに極秘で捜査を開始するよう私達隊員に指示を出した。

そして、極秘に捜査を進めていると”ある存在”が違法研究を援助していた可能性が浮かび上がってきた。

その存在とは……………

”最高評議会”

それは管理局に存在するといわれている管理局の最高機関。

しかしその実体はまったくの不明であり、どこにあるのかさえ分からないのが現状だった。

だけでもし、それが事実であるならば管理局が違法研究をさせているという事になる。

実際に他に何かないと上層部の事もついでに調べてみたら、8割くらいが何らかの形で犯罪に手を染めている事が分かった。

次元世界の平和を守るはずの管理局が腐敗し、逆に犯罪を行っている事にシヨックを隠しきれなかったけど……………

私達は諦める事なく捜査を続行した。

そして掴んだ一つの情報。

それこそが違法研究施設の場所だった。

それを掴んだゼスト隊長は陸の最高責任者であり、親友のレジアス・ゲイツ少将（現在は中将）に強制捜査するように掛け合っただけだ……………

しかし返ってきた答えは、その件からの撤退命令。

これは私の予測だけど、恐らくレジアス少将はこの時何かを掴んでいたからその危険性を知っていたのではないのかと思うのだけど……………真相はいまだ闇の中。

まあとにかくその命令を受け入れられなかった私達はその日の内に研究施設へ突入したわけなんだけど……………

結果は全滅。

私とメガー又は青い短髪の女性とメガネをかけた女性の二人を相手に戦い負けた。

ゼスト隊長も銀髪の少女にやられ、隊員達は奥から出て来たカプセル型の機械に成す術もなくやられてしまったのだ。

「……………そういえばドクターが新しい実験の被験体を捜していたな……………こいつらで代用出来ないだろうか？」

不意に青い短髪の女性がそう言っで私達を指差した。

すると残った二人も頷いて私達に近寄ってくる。

「……………そちらから襲って来たんだ、悪く思っなよ」

青い短髪の女性はそう呟いてゼスト隊長を担ぎ上げ、メガネの女性の操作するゲートの中に消えていった。



「……………くっ……………ゼスト隊長……………」

私は悔しさのあまりそう呟く。

いつもカメラ片手にスバルとギンガの写真を何枚も撮ってたゼスト隊長……………

普段着からどこぞの魔法少女の衣装（白い服と黒いレオタードのマント付き）まで衣装を揃えてたゼスト隊長……………

プールでは家族である私達よりも写真を撮っていたゼスト隊長……………

あ、あれ？

なんか今考えるとゼスト隊長が一番犯罪者に近いような……………

まあ仕事はかなり優秀だったから誰も文句は言わなかったけど……………

……………

スバルとギンガの為にはこのまま消えてもらった方がいいのかもしれない。

というかゼスト隊長が負けた理由って戦っていた相手が少女……………ちっちゃい子だったからかのかな？

「……………ひ、否定できない……………」

可能性が高過ぎて怖い。

「次はこいつだな」

そんな事を考えていたらあの青い短髪の女性が戻ってきており、今度はメガーヌを連れ去ろうとしていた。

「……………うつ……………くつ……………メガーヌ……………」

私は動かない身体を必死に動かしてメガーヌを連れ去ろうとしている青い短髪の女性の足を掴んだ。

「……………まだ動けたとはな」

青い短髪の女性は少し驚き、私を見た。

その目には哀れみの感情が籠っており、どこか悲しげでもある。

「……………このまま意識があるのも辛いだろう……………眠っておくといい」

青い短髪の女性はそう言うと私の手を振り払い、足を振り上げた。

私は何もできない悔しさでいっぱいだったけど、最後の瞬間まで目を閉じる事なく見届ける為に青い短髪の女性を見上げる。

「……………いい覚悟だ」

女性はそう言って足を勢いよく振り下ろした。

しかし

「そこまでだよ……………禁忌『レーヴァテイン』」

《イエス マスター レーヴァテイン》

ゴウー！！

その足が私を踏み付ける事はなかった。

ふと見ると七色に光る宝石の付いた翼を持つ少女が紅蓮の炎に包まれた剣を右手に握りしめて立っている。



誰かの名前を呼んだ。

すると

「……………了解！ダイバイイイインバスター！！」

ドガー——ン！！

「な、何だ……………」

桜色の砲撃が天井を貫きながら何かを言いかけていた青い短髪の女性を飲み込んだ。

「「トーレ！？」」

残った二人は青い短髪の女性の名前を呼んで助けに行こうとしたのだが……………

「逃がさないよ？」

「もう少しゆっくりして行きや」

いつの間にか隣にいた二人の少女のデバイスを首に当てられて身動

きが取れなくなっていた。

「容疑者確保完了、でも……被害が大き過ぎたね……レ  
ジラス少将のお願いが無かったら分からなかった事なんだけど……  
…ね……」

炎の剣を持つ少女は周りを見ながら悲しげにそう言つと倒れたまま  
の私を見つめ

「ねえ、そこのお姉さん……私達と一緒に来ない？」  
そう言つて私をスカウトしたのだった。

~~~~~

「まああれから少し経った時に捕まえた三人には逃げられちゃったんだけどね……………」

ゆっくりと閉じていた目を開きながら私は誰に言うのでもなくそう呟く。

そう、あの時捕まえた三人は本局で詳しく事情を聞こうと護送している最中にあのカプセル型の機械……………ガジェットに襲われ、その混乱に便乗して逃げられてしまったのだ。

あの時も極秘で護送をしていた情報が内部に裏切り者がいた為に漏れてしまった結果起きてしまった事件だった。

「悔しいなあ……………結局ゼスト隊長がどこに連れて行かれたのかも分からないままだもんね……………」

私は握り拳に力を込めながら窓の外を見る。

でもあの時司令が助けてくれたからこそ私とメガーヌが今ここで生きているのも事実……………

「……………はあ……………皮肉なもんだね……………」

私はため息を吐きながらそう呟く。

あの時、瀕死のメガーヌと私を救ったのは司令の使い魔のレアスキルだった。

”ありとあらゆるものを直す程度の能力”と呼ばれるかなり希少なレアスキルを有した司令の使い魔により、私達は愛する家族の下へ帰ってくる事が出来たのだ。

しかし、その代償として私達に返ってきたのは………  
亡くなった隊員達の家族からの恨みの声だった。

何故、何故危険だと分かっているながら無理矢理捜査をしたのだと………

そのせいで自分達の家族は死んだのだと………

そう言われた。

正直………辛かった。

後悔もした。

でも………

それでも………

ここまで頑張った彼らの頑張りを無かった事にしなくなかった。

だから………

私達はスカウトを受ける事にしたのだ。



例えそれが辛くて苦しい道のりだったとしても！！

隊員のみんなやいまだに見つからないぜスト隊長の為に！！

私達は立ち止まらない事を誓ったのだ！！

「……………絶対……………絶対に捕まえてやるんだからね……………」

”ジェイル・スカリエッティ”！！”

私はそう言っ て握り拳にさらに力を込めたのだった。

## 第47話 空白期編

「くっ……………ゼスト……………俺のせいで……………くそっ!!」

ドンッ!

俺……………レジアス・ゲイズは今現在自己嫌悪に陥って机を叩いた。

原因は……………親友であるゼスト・グランガイツを見殺しにしてしまった事だった。

あいつが関わっていた事件……………それを解決するという事はすなわち管理局の闇を白日の下に晒す行為だった。

次元世界の平和を守るはずの管理局が犯罪に手を染める……………

それがもし公表されていれば確実に管理局は終わりだろう。

だから……………管理局の上層部や甘い汁を吸ってきた連中はゼスト達を嵌めたのだ。

ゼスト達は偶然違法研究施設の場所を発見出来たように思っただろうが、実際は違う。

上層部の連中が己の闇を暴かれないように一番危険な……………それこそ命を落とす確率の高い研究施設の場所を故意に晒したのだ。

そして、まんまとそれに引っ掛かったゼスト達は隊員二名を残して全滅してしまった……………

「俺は……………ゼスト……………すまない……………」

先程、次元犯罪者であるジェイル・スカリエッティからの通信……………ゼストの死亡報告を受けていた俺は悔しさを滲ませながら声を搾り出す。

「……………俺のくだらない考えがなければ……………」彼女達”をもっと早く応援に付けられたのに……………くっ」

俺は後悔と自己嫌悪を繰り返しながらそう呟く。

”彼女達”……………

その正体は魔導師ランクオーバーSクラスの少女4人。

実戦経験が豊富で、どんな逆境でも覆してきたといわれる少女達……………

……………

まさにエースの名に相応しい存在なのだが……………あの時俺は自身の持つくだらない考えを持っていたせいで”彼女達”がゼスト達を助けるまでに時間がかかってしまった。

そのくだらない考えとは……………

エリート嫌い。

俺は自分に魔力が無い為にかなり苦労して今の地位まで上り詰めた。

その為、俺をずっと支えてくれたゼスト以外の凄腕の魔導師やエリート、エースと呼ばれる存在が大嫌いだった。

そんなくだらない考えを持ち続けた結果、俺は親友のゼストやその隊員達を死なせてしまったのだ。

しかも生還した隊員二名には命を落とした隊員の家族からの罵声が浴びせ掛けられているらしい。

「……………その罵声は俺が受けなければならないのにな……………」

俺はまた自己嫌悪に苛まれた。

しかしそれだけで済むわけではなく、まだ俺の頭を悩ます問題が一つ残ってる。

その問題とは……………最高評議会から全滅したゼスト隊の生き残りの始末せよという指令なのだ。

「そんな事……………できるはずがない!」

ドンッ!

俺はまた机を叩いた。

”彼女達”の介入によって助かったゼストの部下を殺せと命じられた俺は、どうすればいいのか分からず途方にくれる。

「どうすれば……………俺はどうすればいいんだ……………ゼスト……………」

亡き友の名を呼びながら、俺は悩み続けた。

だからだろう。

俺の部屋に入って来た侵入者に気が付かなかったのは。

「……………ずいぶん悩んでるみたいだね？レジアス少将？」

「だ、誰だ！？」

不意に声を掛けられた俺は驚いて顔をあげると……………

そこには七色に光る宝石が付いた翼を持つ少女が、真紅の瞳をこちらに向けて微笑んでいた。

「真紅の姫君……………いつの間に……………いや、それよりなんの用だ？」  
プリンセス・オブ・スカーレット

俺は現実離れたその姿と可憐さに驚きつつも彼女が何故ここに来たのか疑問に思っただけで聞いてみる。

すると彼女は

「私はね……………レジアス少将にお願いをしに来たんだ」

そう言つてその可憐な外見からは想像もつかないくらいに妖艶に笑う。

ゾクッ

その姿を見ていたら不意に背筋が寒くなった。

「……………それで……………いったい俺に何を願うつもりだ？」  
俺は身体が震えるのをなんとか抑え、搾り出すような声で彼女に聞くと彼女はゆっくりとした歩調でこちらに歩み寄る。

そして俺の隣まで来た時に……………

「これから私達がする事がバレないように私達に協力して？」

そう俺の耳元で囁いた。

それは……………まるで悪魔の囁き……………

思わず何も考えずに頷いてしまいそうな程に甘い声に俺は動けなくなってしまった。

俺はなんとか目だけを動かし

「……………何が狙いだ……………」

俺を惑わす少女にそう聞くと少女はその言葉を待っていたのかのようにゆっくりと口を開いた。

「クスクスクス……………あなたに特別教えてあげる……………」  
…私はね？

この管理局に巣くう闇を……………全部壊しちゃおうと思ってるんだ」

それはまるで気に入らない玩具を壊してしまう子供のような口調だ



った。

「な、なんだと!？」

俺はそんな重大な管理局への離反宣言を気軽に話す少女に驚きを覚えた。

しかもその事に対して少女は悪びれた様子もなく平然と笑っている。

今現在管理局の上層部はあの伝説の三大提督を除いて真つ黒と言っても過言ではない状態だ。

つまり彼女が本当に管理局の闇を破壊するつもりなら、管理局の殆どを敵に回す事になる。

「……………し、正気か？」

そう呟いた俺に少女は笑い、そして言葉をさらに紡ぐ。

「うん 正気だよ？私はこの管理局に巣くう闇を壊して……………」

みんなが楽しく笑顔で過ごせる世界を守る組織に作り変えるの」

それは、叶わぬ夢物語……………

だが……………俺にはその夢物語を笑ったり馬鹿にしたりする事はできなかった。

何故なら……………かつて俺やゼストが目指した正義もそれと似たようなものだったからだ。

そして気が付くと俺は

「……………分かった、協力しよう」

長い沈黙をした後に彼女に協力することを約束していた。

すると彼女は満足そうに笑うと

「ありがとう」

そう言っただけで俺から離れる。

しかし俺の目の前まで来て

「せっかくだから私に協力してくれるもう一人の協力者を紹介するね?……………入って来て」

ある一人の人物を俺の前に連れて来た。

「な、なんだと!?お前は……………」

その人物を見た俺は驚きを隠せない。

しかしその人物はそんな俺を見てどこか自嘲気味に笑うと俺に向かって握手を求めた。

俺は戸惑いを覚え、その手を取るのを躊躇したのだが……

「大丈夫、”彼”はあなたの知ってる”彼”じゃないよ?」

彼女にそう諭されて俺はゆっくりとその手を握った。

その後、この出来事が俺の運命を徹底的に破壊し尽くす結果になる  
とは今の俺には予想もできない事だったんだがな……………

## 第48話 空白期編

「……………保護観察してる子達の様子がおかしい？……………それってどういう意味？」

それは、ある日のフェイトとの会話だった。

「そうだよフラン！！……………私のせいなのかな？」

フェイトは涙目になりながら最近になってかなり発育のよくなった身体で私に縋り付く。

「わわ！フ、フェイト！いきなり抱き着いたら危ないよ……………まあ話くらいは聞いてあげるけど……………」

フェイトに抱き着かれた身長だけがあまり成長しない私はその身長差から若干バランスを崩しつつもなんとか踏み止まり、フェイトに話すように促した。

するとフェイトは

「本当？それじゃあこの映像を見てよ……………私が代理保護者をしてる”エリオ”と”キャロ”って子達の映像なんだけど……………」

そう言ってモニターを呼び出して映像を再生し始めたのだった。

~~~~~

廃墟と化した町に機械的な槍を構える赤毛の少年と小さな翼竜を肩に乗せるピンク色の髪の少女がハイウェイの上を走り抜けていく。

「エリオ君！！あそこにガジェットがいっぱいいるよ！」

不意にピンク色の髪の少女がそう言って指差す。

すると赤毛の少年……………エリオは不敵に笑うと

「あの程度の戦力で来るなんて……………過小評価もいいところだな……………ストラーダ！」

《承知》

何故か日本語で話す槍型のデバイス……………ストラーダを構えて走る速度をあげた。

そして

「スピーア・アングリフ！！」

ゴウッ！！

ストラーダから黄色の魔力を噴射しながらガジェットに突撃をかける。

「斬り捨て御免!!」

ズバンッ!!

ストラーダから噴射される魔力を推進力にしたエリオはそう言って最前列にいたガジェットを斬り払った。

「まだまだあああああ!!」

ズババババッ!!

しかし、最初に斬ったガジェットが確実に仕留められた事を確認したエリオはそのまま近くにいたガジェット達をその手に持ったストラーダの穂先の部分で斬り裂いていく。

「今日の僕は……………阿修羅すら凌駕する存在だ!!」

そう叫びながら今度は縦回転しながらストラーダを振るうエリオ。

その攻撃の仕方は独特で、身体を横に回転させながら穂先の部分だけを当てている。

しかしガジェット達がそれで引く事はなく、逆に攻撃しようと近づこうとしたが……………

「竜魂召喚！焼き払って！！ヴォルテエエエル！！」

「グオオオオオオオオオ！！」

キャラの召喚した巨大な竜人……ヴォルテールにハイウェイごと焼き払われてしまった。

そしてそれを見たキャラはどこか暗い目をして

「……………フッフ エリオ君には指一本……………うつん、髪の毛一本  
触れさせないから」

怪しい笑顔を浮かべるのだった。

~~~~~



「……………」

「どうかなフラン？なんとか出来そう？」

映像を見て言葉を失う私にフェイトは上目づかいに聞いてきた。

とてもじゃないけどアレは手遅れな気がする。

しかし力になると言った手前、引くことはできない……………」

「やっぱり無理かなフラン？」

黙ったままの私を見るフェイトの目には涙が溜まり始めている。

何か答えないとたぶんフェイトは泣くだろう。

でもあれはどう見ても直せそうに無い。

だったら……………」

「……………」そのまま受け入れるのが一番だと思うよ？」

私は笑顔でフェイトの両肩に手を置いてそう言った。

「その……………まま？」

フェイトは同性の私でも可愛く見えるくらいにちょこんと首を傾げる。

そんなフェイトに私は笑顔のまま大きく頷いた。

するとフェイトは笑顔になり

「そのまま……………か、ありがとうフラン！私、頑張ってみるよ！」

そう言って駆け出して行ったのだった。

その後、フェイトにエリオとキャロの事を聞くと長い時間をかけて二人の良い所や可愛い所を語られる事となるのはまた別のお話

第49話 空白期編（前書き）

かなり急展開

## 第49話 空白期編

「……………機材搬入完了なのですましたー」

それは取り出したデバイスのカメラを起動した状態で構え続ける私の使い魔たるハチからの言葉だった。

「……………分かった……………ありがとねハチ」

私はそんな自身の使い魔に礼を言うと、ハチは

「ますたーの為ならこんなのへっちゃらなのです!」

元気よく笑顔でそう答えてくれた。

私はカメラの先にある豪華な飾り付けのされた真紅の椅子に座り足を組む。

それを見たハチはカメラの位置を改めて確認し、いつになくご機嫌なのかいつの間にか出していた茶色の尻尾をフリフリと振っている。

その事に頬を緩ませながら私はハチの準備が終わるのを待つ。

ついでに協力してくれるはずである”彼ら”がすでに準備が終えているのを自分専用のデバイスである”ヘル・デイウォーカー”を通じて確認する。

「……………これでやっと始められるんだ……………ううん、始まったんだよね？」

私はそう呟いて今までの道のりを思い出す。

「……………ますたー……………」

そんな私の呟きが聞こえていたのかハチは心配そうに私を見つめている。

「あはは……………ごめんねハチ？私がこんな弱気じゃダメだよね？」

私はそんなハチに笑いかけながら自身に言い聞かせるように話す。

しかし、今私がしようとしている事を実行すれば成功にしろ失敗にしろもう立ち止まる事はできない……………

「……………さあ……………そろそろ時間だね……………」

私は椅子に足を組んだまま肘掛けに肩肘を付いた状態でポーズを決める。

それを見て私の準備が終わったのを確認したハチは真剣な表情でデバイスを操作してカメラを……………起動させた。

~~~~~

『……………皆さんこんにちは、私の名前はフランドール・スカ  
ーレットです』

それはいきなりの事だった。

誰もが予想しない出来事……………

それが第一管理世界ミッドチルダ……………時空管理局のお膝元とも  
いえるその世界中でそれは起きた。

ミッドチルダ中にあるモニターやスクリーンといった映像を放映で  
きる機械全てにフランが映っているのだ。

人々は困惑の表情を浮かべてそのフランの映るモニターを見つめる。

すると映像に映るフランは

『まず始めにこのような強引な手段でしか皆さんに訴えかける事しかできない事について謝罪いたします』

そう言つて頭を下げた。

それを見ていた人々は困惑の表情をさらに深める。

何故この映像に映っている少女…… フランドール・スカーレットは頭をさげているのか？

しかも彼女は管理局の中でもエースオブエースを超えるエースと名高い存在であり、犯罪者の検挙率が過去に類を見ないほどの好成績を誇る真紅の姫君という二つ名を持ったかなりの有名人である。

そんな彼女が頭を下げているのだから人々はさらに頭を悩ます。

フランはそんな人々の困惑の中でゆつくりと口を開いた。

『私は……人間ではありません……吸血鬼と呼ばれる人とは相容れない化け物です』

その言葉に人々は驚く。

人ではない化け物。

フランは自分の事をそう言ったのだ。

フランは真剣な表情のまま

『その証拠に私には人間にはない物……………翼やキバがあります……………  
……………言っておきますがこれは幻影魔法を使った偽物などではありません』

そう言つて七色に光る宝石の付いた翼と犬歯にしては鋭いキバを見せつける。

映像を見る人々はその事に驚き、辺りはざわめく。

それもそのはず、今まで自分達や平和を守ってきたはずの管理局の  
エースが人ではない。

そんな事を言われて納得できるはずもないのだから……………

しかしフランの話は続ける。

『そんな……………人ではない私は今まで皆さんに正体を隠して過  
ごしてきましたが……………もう、それをやめようと思います……………  
何故なら、人ではない私の事を友達だと言って支えてくれる人達が  
いてくれる……………だから私は今まで隠していた自分の事を今この場  
を借りて皆さんにお話しようと思ったからです』

映像に映るフランはどこか吹っ切れたような清々しい笑顔を浮かべた。



映像を見つめる人々はその笑顔に引き込まれ何も言えず、辺りを沈黙が包み込む。

『それに……………今から行おうとしている事を私の正体を隠したまま……………私自身に隠し事があるのに実行したくはなかったからです……………こちらをご覧ください』

フランは真剣な表情でそう言つと椅子から下りてすぐそばにあった機械を操作し、モニターに”ある映像”を映し出した。

そこにあつたのは……………

とある研究施設だった。

その研究施設の入口には管理局公認と書かれたプレートが設置されている。

そして映像は途切れる事なくそのまま施設内の排気口から侵入していく。

そのまま施設内をしばらく進んでいくとそこには人間が一人は入れそうなカプセルがいくつも並んでいる。

映像はそのまま一つのカプセルに向かってズームしていく。

「ヒッ！」

そんな声がこの映像を見ていた人々の中から聞こえてきた。

恐らくこの映像を見ていた人々はこのカプセルの中身を見なかった方がよかったと誰もが思ったことだろう。

何故ならそのカプセルの中には人間が入っていたからだ。

しかもただの人間ではなく、右腕は鋭く尖った爪を持つ鱗の生えているものの左腕は人間と同じ肌をしている。

しかし、その左腕は二の腕の半ばからちぎれて無くなっており中から骨や筋肉が見えていた。

両足は何かは無理矢理潰されたようにグチャグチャで腹部には普通収まっているはずの臓器が飛び出している。

頭も右の眼球が飛び出し頭は割れて中身もえぐられていた。

「うえええ！」

誰かが吐く声が聞こえる。

これだけグロテスクな映像を見せられては仕方のないことだろう。

だが映像はまだ終わっていない。

不意にそのカプセルの安置している場所に足音が聞こえてきた。

ズームしていた映像はすぐにその足音のする方を向く。

そこにはカプセルの方を無感情に見つめる研究員が二人いた。

映像はその二人にピントを合わせて撮影を続けていると

『……………クソッ！コイツもダメだったか……………まあいい、次の被検体に生かせるいいデータが取れたからまだマシか……………』

そんな研究員の苛立ったような声が聞こえてくる。

するとそんな同僚の肩を叩きながらもうひとりの研究員が

『ハハ！どうせ材料はスポンサーがいくらでも用意してくれるんだからそんなにイラつく事もないさ……………なんたつて俺達は”管理局公認”で研究してるんだからな』

笑いながらそう言って近くにある機械のボタンを押した。

ゴボゴボゴボ……………

すると全てのカプセルの中から中身を満たしていた液体が排出される。

それを確認した研究員は

『コイツらはもう用済みの生ゴミだな……………ククク……………ゴミ箱はゴミ箱につてな』

笑いながら別のボタンを押した。

ガチャン！

そのボタンを押した瞬間にカプセルの中に入っていた人間のような何かは、カプセルの下に開いた穴の中に落ちていく。

『さあて……ゴミは処分したし……少しウサ晴らしにでも行きますか……一緒にどうだ？あいつらをいじめるのは結構楽しいぞ？』

機械を操作していた研究員は上機嫌にそう言ってもうひとりの研究員を誘う。

すると誘われた研究員は

『あいにく俺はロリコ……そんな特殊な性癖は持ち合わせてないから遠慮しとくよ』

手を顔の前で振って答えた。

『まあまあ、そう思うのは最初だけだって……すごい楽しいぞ？』

断られたにも関わらずその研究員はしつこく誘い続けるが誘われた方の研究員は取り合わずにその場を離れ、誘い続ける研究員もそれに続いてその場を離れて行った。

それに合わせて映像も途切れる。

そして再びフ란の映る部屋に映像が戻った。

フランは機械から自身の映っているカメラへと視線を向けると

『……………これは実際の……………本当にあった潜入捜査時の映像です』

悲しげな表情を浮かべる。

『この映像を撮影した後すぐに強制捜査に踏み切って中にいた材料……………つまりはあの実験に使われるはずだった子供達を約30名保護しました……………しかし、その中にはあの映像にあったように子供達に暴行を加える人達もいて……………半数以上がいまだに病院に入院しています』

映像の中のフランの言葉に人々は憤りを隠す事ができない状態だった。

それもそのはず、自分達の平和を守っているはずの管理局が子供を使って人体実験を行うような研究施設を管理局公認として認めているのだから……………

『……………皆さんは覚えているでしょうか？今現在、私の部下に元ゼスト隊の隊員が二名いる事を……………無謀な捜査をしたために壊滅してしまったと不名誉な言葉を言われた彼女達は今の管理局の上層部の汚職について調査をゼスト隊隊長ゼスト・グランガイツに命じられていました……………』

初めて知った事実に驚く人々。

しかしフランの話はまだ終わらない。

『その結果、実に約８割が何らかの犯罪を起こしている事が彼女達の調べで分かったのです！しかも……あろう事が我が身が可愛くなつた上層部は彼らを罠に掛けて壊滅させ、その生き残りすら口止めの為に殺すように指示を出したのです！』

フランは涙を流し、人々に真実を伝えた。

そんなフランの言葉に人々もだんだんと引き込まれていく。

『しかも……その指示は実の親友であつたレジアス・ゲイツ中將に！そんな上層部からの指示にレジアス中將は助けを求めていました……誰にも相談出来ずに苦しんでいました！偶然私が彼の話を聞いていなければまた新たな悲劇が起きたかもしれません！……こんな……こんな事があつていいはずがないんです！！』

映像の中のフランは先程の悲しい表情を消し、逆にその視線の先を焼き尽くすような怒りの籠つた表情でそう言つた。

それに合わせ、映像を見つめる人々の表情にも怒りの声が上がりはじめ。

そんな中、フランは

『……故に私はここに宣言します！今現在、管理局に蔓延る闇を……管理局の闇とも言える管理局がスポンサーとなつている違法研究施設や私欲に塗れた上層部の一斉摘発を！！』

そう言つて自分の腕を振り上げる。

人々もそれに合わせて腕を振り上げた。

それは、長い間蔓延っていた管理局の闇への裁きの光。

その闇が深く濃いものであるが故に生じた眩しく強い光はある意味必然的な出来事だったのかもしれない。

実はこの映像はミッドチルダだけでなく、管理世界中に時間差で放送されていた。

その為、のちに”スカーレット宣言”と呼ばれるこのフランの宣言が違法研究施設の研究員達に見られる事が遅れた為、この日管理外世界も含めた数多くの管理局公認の違法研究施設が摘発され、犯罪に手を染めていた上層部の約9割を逮捕する事ができたのだ。

しかし取り逃がした上層部や研究施設の者達によるテロがその後の新体制となった管理局を悩ませ、新たな部隊の設立のきっかけとなるのはまた別のお話。

第49話 空白期編（後書き）

先に言っておきます

次回はこの話の裏側です



第50話 空白期編（前書き）

久しぶりな更新ですよ。  
。・ノノ

## 第50話 空白期編

それは、とある次元航行艦での一幕。

「……………準備はいい？」

エースオブエース 高町なのははBJを身に纏い、自身の相棒であるレイジングハートを構えて隣にいる人物へと声をかける。

「へっ、そんなもんとづくに終わってるつつの」

鉄槌の騎士ヴィータはニヤリと笑って騎士甲冑を身に纏って自分のデバイスのグラーフアイゼンを肩にかけた。

互いの準備が完了しているのを確認した二人は出撃命令が下るのを待つ。

「お二人にとっては簡単な任務かもしれませんが油断は禁物です」

そんな二人に声をかける小学生だった頃のなのはによく似た人物が一人……………

「分かってるよ”シュテル”ちゃん」

なのははその人物……………”元闇の書のマテリアル”であつた星光の  
シュテル・ザ・デストラクター  
殲滅者にそう言つと

「分かってるさ……………絶対に慢心も油断もしねえ……………私がなのはの  
背中を守るんだ！」

ヴィータはアイゼンを強く握り絞めて力強く答えた。

「……………昨日の事件は悲惨でしたからね」

そんな二人を見ながらシュテルはそう呟く。

「……………」

それを聞いた二人は顔を引き攣らせ、急に黙り込む。

その事件の発端は実に阿呆らしかった。

~~~~~

それはミッドチルダのとあるバーを一軒まるごと借りて行われた集会での出来事。

「……………ちゅう訳で明日、フランちゃんの演説がこのミッドチルダだけでなく、時間差で全管理世界に放送される訳なんやけど……………みんな準備はできとるな？」

そう言つて集まつたなのは達に確認する揉み魔兼ペット（はやて）。

そこにいた魔王<sup>なのは</sup>、死神<sup>フェイト</sup>、バトルマニア（シグナム）、エターナルロリータ（ヴィータ）、墮犬<sup>ザファイラ</sup>、腹黒策士<sup>シャマル</sup>、変態<sup>リインフォースタイン</sup>、バカ親<sup>アリシア</sup>、薄幸少女<sup>メガーヌ</sup>、シスコン兼乳マニア（ティータ）、脳筋母<sup>クイント</sup>、毒舌<sup>クイント</sup>、それに新たな仲間として生まれた変態の二代目、リインフォースツヴァイに違法研究所からフランが救出した烈火の剣精アギト、なんの因果か奇跡的に変態の中に残され、プレシアのマッドサイエンティックな技術により”とある存在”に変わった……………というか変えられた元闇の書のマテリアルである星光の殲滅者<sup>シュテル・ザ・デストラクターレヴィ・ザ・スラッシュヤー</sup>、雷刃の襲撃者<sup>ロード・ディアーチェ</sup>、闇統べる王が領く。

フランとハチは明日の準備の為、ここにはいない。

ちなみにクロノと淫獣<sup>ユート</sup>は仕事を立て込んでいるのでお休み……………と  
いうか淫獣<sup>ユート</sup>はハチがいないのでお休み。

「明日は絶対成功させるで！」

全員が頷いたのを確認したはやては自分の持つグラスを掲げる。

すると全員がその手に持ったグラスを掲げ

「……乾杯！」……

そう言っただけに入ったお酒やジュースを飲んだ。

そこから立食パーティーが始まったのだが……

「これを見るの！これはフランちゃんのお風呂上がりにはシュテルちゃんと一緒にコツコツと集めた髪の毛の束……サラサラで手触りも良くて見た目もその美しさを損なわない……これぞフランちゃんに近い私にしか手に入れない希少アイテムなの！」

そう言っただけでレイジングハートから綺麗に紐で纏められた髪を見せるのは。

その隣にはルシフェリオンから同じような髪を取り出すシュテルもいる。

そんな物を入れられていたレイジングハートとルシフェリオンはどこか影がさしていた。

何故こんな事になっているのか？

それはパーティーが始まってすぐにクイントが何気なく

「そういえば三人ってさ、司令の幼なじみなんだよね？誰が一番司令と仲がいいの？」

と聞いたのが発端だった。

「それなら私達も負けないよ！レヴィ！」

なのはとシュテルのアイテムを見たフェイトが雷刃の襲撃者……  
レヴィに合図を送ると

「そうだそうだ！僕とフェイトはフランのブラをゲットしてるんだぞ！僕のはフランが小さい時で、フェイトは少し前のやつを肌身離さず身につけてるんだ！………流石に今フランが付けてるやつはフェイトにも合わなかったけどな」

そう言つて胸を張る。

それを聞いていた乳マニア（ティータ）は

「なんだと！？司令はあの金髪巨乳美人のフェイトさんを超える巨乳なのか！？………今度直に触って確かめねば………」

指をワキワキさせ鼻から忠誠心を垂れ流す。

あまりに直視耐えない光景に……………

ガシユン！

「滅べ変態！紫電一閃！」

ドーン！

シグナムが愛剣を持ち出して乳マニア（ティード）を吹っ飛ばした。

「シグナムさんの乳も最高おおおおおおおおおおおお  
おおー！」

乳マニア（ティード）はそんな断末魔を残して店の天井を突き破り  
夜空へと消えていく。

「殺す！」

その断末魔を聞いていたシグナムは夜叉も裸足で逃げ出すような憤  
怒の表情を浮かべて乳マニア（ティード）が突き抜けた天井から騎  
士甲冑を身に纏い凄まじい速度を出して出て行った。

「……………」

パーティー会場は沈黙する。

しかしそんな事お構いなしになのはやフェイトの出したアイテムを

見たはやてが

「私達はこれや！」

と言って自分のスカートを叩く。

皆が怪訝そうな表情を浮かべると

「我らは貴様らよりもっと上質のモノ……………フランドールのパンツだ……………しかも常に装着しているのだ」

ロード・ディアーチエ  
闇統べる王が満足そうな表情を浮かべ腰に手を当てて偉そうにする。

しかし、実際なのは達がしている事はストーカー行為として訴えられるレベルなのだが誰もその事を指摘しない。

それどころか、それを聞いた変態は  
ラインフォースアイン

「流石主！痺れるう！憧れるう！……………後でその脱ぎたてのやつを私にください！」

と忠誠心垂れ流しで膝まずいた。

「はっはっは！もっと私達を褒めてな！……………パンツはやらんで」

はやては高笑いしながらそう言つと椅子に座つてわざとらしく足を組む。

「おお！見えそうで見えない……………なんてエロいんだ……………」



ラインフォースアイン  
変態はなんとかその組んだ足の間を見ようとあらゆるアングルから  
覗き込もうとして…………

ガシユン！

「アイゼン！ギガントシュラク！」

ズガーン！

ヴィータのギガントフォームになったグラーフアイゼンに潰された。

「またつまらねえもん潰しちまったぜ」

ヴィータはアイゼンを待機状態に戻して料理の置かれたテーブルへと戻る。

それはもはや日常のレベルとして周囲に認知されている為、誰も気にとめない。

「ね、ねえライン……アイン……大丈夫なのかな？」

烈火の剣精アギトはその外見に似合わずオドオドとした表情で心配  
ラインフォースアイン  
そうに変態を見守る。

本来彼女の性格はもっと明るくて積極的だったらいいのだが……  
フランが助け出す前に人格の改変が行われてしまい、引込み思案  
で人見知りの性格になってしまったのだ。

（その事を知ったフランは激怒し、アギトを助けた後、その研究所  
をスクウェアブレイカーで跡形もなく吹き飛ばしている）

「大丈夫なのです！」アレ”は見えてはいけないモノ……汚染物質なのです！…………それよりアギトちゃん…………リインとあっちの部屋で良いことするのです」

リインはそう言つとアギトの手を引いて奥の部屋へと誘つ。

「え？リイン？それつて前にリインが私にやって気持ち良くて頭が真っ白に…………」

ボタン！

アギトがそこまで言つた後、扉はゆっくりと閉じたのだつた。

場所は変わつて会場の隅つこの方ではバカ親、<sup>ブレシア クイント</sup>脳筋母、<sup>メガーヌ</sup>毒舌が自分の子供について熱く語っている。

どのくらい熱いかというと……………

「私のフェイトとアリシアが一番可愛いのよおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

！」

紫色の雷を放ちながら叫ぶバカ親。<sup>ブレシア</sup>

「うちのギンガとスバルだつて可愛いわよ！リボルバーナックル！」

得意のシューティングアーツを使いバカ親に攻撃する脳筋母。<sup>ブレシア クイント</sup>

「私のルーちゃんだって貴女達の子供に負けなくらい可愛いわ!」

メガー又はそんな二人の隙を突いて誘導弾を放つ。

「「「私の子が一番可愛い!」」」

もはやその一角は戦場である。

ちなみにアリシアは

「付き合いきれないよ」

と言って先に帰りました。

そして墮犬<sup>ザファイラ</sup>は……………

「やっぱり我慢はするものではないな」

そう言つて外へと続く扉から人型の状態で入ってくる墮犬<sup>ザファイラ</sup>。

「あら?どこに行つてたのザファイラ?」

腹黒策士<sup>シャマル</sup>は妙にすつきりした表情を浮かべる墮犬<sup>ザファイラ</sup>の様子が気になり声をかけると

「ああ、すぐそこに」俺専用のモノ」があつてな」

そう言つて墮犬<sup>ザファイラ</sup>はニヤリと笑う。

「俺専用のモノ」?何かしら?」

気になった腹黒策士シヤマルは扉の向こう側へいくと

「……ザフィーラ……は、激し……過ぎ……／＼／＼」

パーティー会場にいなかったアルフ（子供形態）が顔を真っ赤にし、身体を震わせて倒れていた。

腹黒策士シヤマルは一瞬で何があったか理解して

「……………リア充って爆発しないかしら？」

と呟いていたらしい。

こんな感じで続いたパーティーだったのだが、最終的に誰が一番フ  
ランと仲が良いのか決着をつける為になのは達が戦いだして、なの  
はのスターライトブレイカーによって物理的に幕を引いた。

~~~~~

「……はぁ」

ため息を吐くヴィータとシュテル。

その視線の先にはもちろんなのはがいる。

「にやはは……」

対するなのはは渴いた笑い声をあげるのみ。

ビー！ビー！

『総員！第一種警戒体勢！繰り返します！総員！第一種警戒体勢！武装局員ならびに高町一等空尉、ヴィータ三等空尉、シュテル空曹長は出撃準備に入ってください！』

突然甲高い警報音とともにそんな艦内アナウンスが流れる。

「どうやら作戦が開始されたみたいですね」

シュテルは自分のデバイスであるルシフェリオンを握り二人を見ると二人は頷く。

恐らく他のみんなの所でも同じような事になっているだろう。

全てはこの時の為に準備してきたのだ。

レジアス中將には地上の武装局員や上層部の情報封鎖。

アリシアやプレシア、ティーダにはできるかぎりの情報収集をしてもらったのだ。

これ以上のチャンスはもう訪れないかもしれない……………

だから……………

「行こう！そして掴もう！私達の目指す未来を！」

なのははそう言って走り出す。

「おうよ！背中には任せな！」

ヴィータもニヤリと笑い駆け出す。

「……………未来……………ですか……………私も頑張るとしますか」

シュテルはフツと笑い駆け出す。

こうしてのちにスカーレット宣言として名を残すこの大規模作戦は成功したのだった。



第51話 空白期編（前書き）

グダグダですね  
wwww



## 第51話 空白期編

「……………部隊名？」

私はティードからのそんな質問に首を傾げる。

「いやあゝ実は俺、司令からスカウトされた時に司令の胸に釘付けで部隊名をちゃんと聞いてなかったんですねゝ」

ティードは笑顔のままポリポリと頭を掻きつつ……………視線は私の胸から離さずにそう言ってきた。

「うつ……………話す時は人の顔を見て話して欲しいんだけど……………」  
／  
／

私はティードの視線から自分でも大き過ぎると思っている胸を腕で隠しつつそう言つと

「無理っす」

それは清々しいまでの笑顔での即答だった。

「死ね変態！飛竜一閃！！」

ズガン！

そんなティードを愛刀であるレヴァンティンを連結刃にしたシグナムが容赦なく吹っ飛ばす。

「やつぱりシグナムさんの乳最高おおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
……… ヴィータちゃんの貧乳もだああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああ  
あああああ！！」

ティードはそんな言葉を残し天井を突き破って飛んでいった。

「殺す！！」

その声を聞いていたシグナムとヴィータは互いに己のデバイスを構えて壊れた天井からティードを追って飛び出していく。

「…………… 皆さん元気が良すぎるのです」

その壊れた天井を見ながらハチがポツリとそう呟いた。

「そうだね…………… でも」

私もハチと一緒に壊れた天井を見ながら

「この天井って誰が修理するのかな？」

そんな疑問が思い浮かんだのだった。

それは”スカーレット宣言”の後で全員が再び揃って、作戦成功を祝っての祝賀会での事だった。

~~~~~

「え？部隊名？」フランちゃんと八神はやての愛の巣”やないん？」

「違うの！」フランちゃんとなのはとその仲間達”なの！」

「全然違うよ！」フランとフェイトのライトニングサンダー”だよ  
「！」

以上がはやて、なのは、フェイトの三人が答えた部隊名だ。

「……………三人ともネーミングセンスが無いのです」

ハチの毒舌が冴え渡る。

「……………三人とも知らないんだ……………」

私はガッカリして肩を落しながら私はその場を離れると

「フランちゃんが墜ち込んだる！今がチャンスや！」

「あ！抜け駆けは許さないの！デイベインバスター！」

「なのはもだよ！プラズマスマッシャー！」

後ろの方で暴れる音が聞こえてきたけど気にしない。

「クイント達は……………」

私はクイント、メガーヌ、プレシアを見ると…………

「スバルとギンガが一番可愛いの！」

「ルーちゃんが一番よ！」

「アリシアとフェイトが一番に決まってるわ！」

紫電や魔力球が飛び交い、その隙間を縫ってクイントが接近戦を仕掛けていた。

「……………無理っばいね」

私はハチと一緒に再びその場を離れると…………

「私とハチ…………どっちが好きなんだい！」

「ぬう…………それは……………」

ザフィーラとアルフ（子供形態）が修羅場を迎えていた。

「……これは放置だね」

特に興味も湧かなかったので私は何事も無かったかのようにスルーして再びハチと一緒に歩きだす。

ハチも心なしかザフィーラの事を冷たい目で見ています。

少しハチが殺気を出し始めたので私は少し早歩きで歩きだした。

そして、さらに歩き続けると……

「久しぶりだなフラン！」

「マイプリンスハチイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイイイ！！」

久しぶりに登場したクロノと淫獣が……

「エクセリオンバスター！」

ドガン！

ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
「 「 ギ ヤ ア ア ア ア ア ア ア ア  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア

いきなりなのは砲撃に誤射された。

「…………被害甚大なのです」

ハチは黒焦げになった二人を憐れむように見つめながらそう呟く。

「二人の事は忘れないよ……………」

私はティードが吹っ飛んで開いた天井の穴から見える星空を眺めながらそう言っつてその場を離れた。

そして私はハチと一緒に酒場の扉を開いて外に出る。

綺麗な星空を見上げて

「……………頑張つて考えたんだけど……………誰も覚えてなかったなあ」

私は一筋の涙が目から零れるのを感じながらそう呟いた。

ハチは笑顔のままそんな私の呟きを聞いて静かに酒場の中に入り

「……………禁断『戻りゆく世界』」

何やら今まで起きていた喧騒が消えて凄まじい魔力が収束するのを感じた。



「すみません遅れました！……………ってあれ？みんなはどこに？」

そんな私の前に遅れてシャルがやって来てそう言うてくる。

「今日はもうみんな寝てるのです」

シャルの問い掛けにハチが答えた。

「寝てる？……………うゝんよく意味が分からないんだけど……………」

シャルはうんうん唸りながら考え続ける。

「今夜は星空が綺麗だなあ……………」

そんな眩きを残しながら祝賀会はグダグダなお開きとなったのでした。



番外編 4（前書き）

久しぶりの更新です

## 番外編 4

ピッピピッピ……………

とある暗い空間でたった一人なにもない空間に浮かび上がるモニターを操作する人物……………

空間に浮かぶモニターにはあのスカーレット宣言をしているフランの姿が映しだされていた。

「……………流石は”フランお嬢様”……………”お嬢様”の姉妹ですね……………」

その人物の特徴は銀色の髪でその場に似つかわしくないメイド服を着てそれ以上何も喋ることなくただモニターを操作していく……………

しかし、その姿に隙はなく、いつ何があっても対処できるという力強さを感じ取る事ができた。

「そっちはどうなんだ”咲夜”？」

不意にメイド…………”十六夜 咲夜”に声を掛ける人物が現れる。

咲夜に声をかけた人物は暗いその部屋の明かりを付け、部屋全体を明るくすると…………

「……………容赦なしだな……………」

その人物は部屋を明るくした事を後悔した。

「……………別に……………邪魔だったから廃除したまでよ」

咲夜はそう言ってモニターから目を離さない。

しかし、その部屋には大量の血飛沫が飛び散り、部屋全体を赤く染めている…………

その血を流した哀れな骸はモニターを操作する咲夜の足元にいくつも転がっていた。

その多くは自身の身に何が起きたのか理解する前に息絶えており、死ぬ間際まで浮かべていた表情をそのまま浮かべている。

「それよりあなたがここにいて事はもう制圧は済んだのね？」

咲夜はデータを纏め終えたのかモニターを消してその人物を見詰めた。

「ああ！こんな簡単過ぎて欠伸が出るんだぜ！」

するとその人物はニヤリツと不敵な笑みを浮かべてその手で小さな六角形の立方体……”ミニ八卦炉”を弄ぶ。

「ならもつここには用は無いわ……さつさと建物ごと破壊……  
…いえ、消滅させてもらうと助かるわ」

咲夜はそう言うとその人物の前で忽然と消え去った。

「お、おい咲夜！………つたく、人使い………いや、”魔法使い”  
”使いの荒い奴なんだぜ”………」

そう愚痴るその人物……”霧雨 魔理沙”はミニ八卦炉を一際高く上に投げて

「まあ………胸糞悪いのは私もただけだな」

パシッ！

そう言つてミニ八卦炉をキャッチし、今まで浮かべていた不敵な笑みを消して険しい表情を浮かべる。

その脳裏に浮かび上がるのはこの施設に侵入した際に見つけた”実験体”やその失敗作達………

それを見つけた魔理沙は怒りを抑える事が出来なかった。

幻想郷において人の生死を間近に見つめてきた魔理沙ではあったものの、この施設で行われていた人道や倫理を逸脱したおぞましい研

究は言葉に表すのを躊躇うほどに酷いもので、これ以上命を弄ぶ行為を許すことができなかったからである。

「……………手向けになるかは分からないけど……………あの世くらいは苦しまないようにしてほしいんだぜ」

魔理沙はそう言ってその部屋を立ち去って行った。

その後、その施設は巨大なレーザーによりこの世界から消え去ったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6688s/>

---

魔法少女リリカルなのは～最終鬼畜の妹様な話～

2012年1月8日22時02分発行